

穴沢遺跡・カイル遺跡

レイク相模ゴルフ俱楽部ゴルフ場造成
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992. 3
上野原町教育委員会

穴沢遺跡・カイル遺跡

レイク相模ゴルフ俱楽部ゴルフ場造成
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992.3
上野原町教育委員会

序

この報告書は昭和 61 年度に発掘された上野原町桐原の「穴沢遺跡」「カイル遺跡」の調査結果をまとめたものです。

桐原は深い山を背負い、水量豊かな渓谷が無数に地区内を走り、南面する台地も随所にあるので、江戸時代には旧上野原村を凌駕する人口を擁していました。こうした恵まれた自然条件のもとで、昔から人間たちが住みついたものでしょう。「桐原は遺跡の宝庫だ」という声もきいたことがあります。今回、レイク相模ゴルフ俱楽部のゴルフ場開発により、「椿地区」「小伏地区」の遺跡の発掘調査が実施され、伝説の一部が白日にさらされることになったわけです。この地域の縄文早期から晩期にかけての遺物の調査結果については、本書がその全容を明らかにしてくれることと思います。こうした発掘調査が進むにつれ、遺物・遺構をとおして、古代人の生活の姿が解明されていくばかりでなく、その喜びや悲しみ、大自然に対する畏敬の念まで見えてくるに違いありません。そうなれば古代の人々と直接対話ができる思いがし、文化についても、本質的な問い合わせができるものと思います。

終わりに臨み、穴沢・カイル地区内埋蔵文化財発掘調査団の団長さんはじめ直接担当された方々、作業員の皆さん、及び、執筆・編集を担当された方々に、改めてその労を感謝いたします。

上野原町教育委員会

教育長 井上武寛

例 言

- 1 本書は、山梨県北都留郡上野原町桐原字小伏地内穴沢遺跡、および字カイル地内カイル遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、レイク相模ゴルフ俱楽部ゴルフ場の造成に伴う事前調査で、株式会社山田地建の委託を受けて実施された。
- 3 発掘調査は、桐原字穴沢・カイル地内埋蔵文化財発掘調査団が実施した。その組織は後述の通りである。
- 4 本報告書の執筆・編集は、穴沢遺跡については小西直樹、カイル遺跡については田中悟道が行った。全体の編集は小西が行ったが、語句等の統一はあえてしなかった。
- 5 石材の鑑定は、上杉陽氏、中井均氏（都留文科大学地質学教授）のご教示によった。
- 6 本報告書にかかる出土品、記録閏面等は一括して上野原町教育委員会が保管している。
- 7 発掘調査及び整理作業にあたっては以下の方々のご指導、ご助言を賜った。
山梨県文化課、新津 健、奈良泰史、杉本正文、品川裕昭、諏訪間伸、西桂町教育委員会、都留文科大学考古学研究会（順不同）

桐原字穴沢・カイル地内埋蔵文化財発掘調査団 名簿

団長	田中久弥 上野原町文化財審議委員
副団長	長谷川孟 上野原町文化財審議委員
	田中悟道 上野原町文化財主事（昭和62年2月19日からカイル遺跡調査主任）
調査主任	奥山和久 日本考古学協会々員（昭和62年2月18日転出）
	田中悟道（昭和62年2月19日転入）
	小西直樹 上野原町教育委員会社会教育課主事（整理・報告書作成担当）
調査員	小林安典
経理事務	上野原町教育委員会 岡部仁勇、石井源仁、和田正樹
会計監査	上野原町役場職員 細田邦男、奈良典子
作業員	和智英樹、長谷川準、市川治夫、荒井 泉、荒井一郎、城戸宏子、中村林太郎、高橋正英、水越光子、東山 充、荒井 貞、安藤洋子、鷹取睦雄、石井よしえ、志村信江、市川真一、杉本すきい、水越茂子、中村透子、久島武正、安藤盛平、和智幹一、山上敬三、山下芳信、網野秋広、加藤正弘、中島高光、中村巳佐子、長田増雄、木口由美子、村野利夫、瀧口成子、佐藤淑江、久島順子、弦切吉堯、平井和江、佐

藤一郎、田村俊行、鈴木恒夫、山口栄子、白鳥愛子、関口政江、弦切喜一、弦切菊江、関戸秀光、市川 薫、中村勝秀、曾根 清、長尾将司、古家俊治、高橋 信
調査補助員 小山若葉、土橋美和、梶原ゆかり、岡田晃子、遠藤かほる、横田恵一、阿部良作、
新妻伸浩、小野和江、塚原佳世子、苔原 真、吉田伸之、原 陽子、森川浩江、中
村聖、高橋つき子
整理作業員 久島順子、中村道子、滝口成子、水越茂子、佐々木清子、上條龍子、網野いづみ、
波辺恵子、坂本喜久子、小山和枝（順不同）

凡 例

- 1 遺構の縮尺は1/30である。
- 2 遺物の縮尺は1/3を基本としたが、大型の上器については一部1/4とした。また、石鏃・剣
片は2/3である。
- 3 土器断面図のスクリントーンは、胎土に植物纖維を含むことを示す。
- 4 土層図、断面図の「 m」といった数値は、標高を表す。
- 5 挿図中の遺物番号と、写真図版中の遺物番号は一致している。

目 次

序

例言

第 I 章 調査にいたる経緯.....	1
第 II 章 遺跡の位置と周辺の環境.....	2
第 III 章 穴沢遺跡.....	7
第 1 節 調査の方法.....	7
第 2 節 遺跡の層序.....	7
第 3 節 遺構と遺物.....	7
1 繩文時代.....	7
(1) 土坑.....	7
(2) 小穴.....	11
(3) 焼土址.....	12
(4) 遺構外出土遺物.....	12
ア 土器.....	12
イ 石器.....	49
(5) 磁.....	87
2 奈良・平安時代以降.....	88
(1) 土坑.....	88
第 4 節 まとめ.....	93
第 IV 章 カイル遺跡.....	97
第 1 節 調査の概要.....	97
第 2 節 遺跡の層序	100
第 3 節 遺構と遺物	101
第 4 節 まとめ	107

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	3
第2図	周辺の遺跡	4
第3図	周辺の地形と発掘区	5
第4図	穴沢遺跡遺構分布図	6
第5図	土坑 1	8
第6図	土坑 2	9
第7図	土坑 3	10
第8図	小穴	11
第9図	土器出土状況分布図（調査区東半分）	15
第10図	土器 1（縄文時代早期中葉）	18
第11図	土器 2（縄文時代早期中葉・後半）	19
第12図	土器 3（縄文時代早期後半）	20
第13図	土器 4（縄文時代早期後半）	21
第14図	土器 5（縄文時代早期後半）	23
第15図	土器 6（縄文時代早期後半）	24
第16図	土器 7（縄文時代早期後半）	25
第17図	土器 8（縄文時代前期前半）	30
第18図	土器 9（縄文時代前期前半）	31
第19図	土器 10（縄文時代前期前半）	32
第20図	土器 11（縄文時代前期前半）	33
第21図	土器 12（縄文時代前期前半）	34
第22図	土器 13（縄文時代前期前半）	35
第23図	土器 14（縄文時代前期前半・後半）	36
第24図	土器 15（縄文時代前期後半）	40
第25図	土器 16（縄文時代前期後半）	41
第26図	土器 17（縄文時代前期後半）	42
第27図	土器 18（縄文時代前期末～中期初頭）	43
第28図	土器 19（縄文時代中期前葉・後葉）	46
第29図	土器 20（縄文時代中期前葉・後葉）	47
第30図	土器 21（縄文時代後期・晚期）	48

第31図	石器	1 (尖頭器)	49
第32図	石器	2 (石鎌)	58
第33図	石器	3 (石鎌)	59
第34図	石器	4 (石鎌, 石匙)	60
第35図	石器	5 (石匙)	61
第36図	石器	6 (石匙, 石錐, 剥片)	62
第37図	石器	7 (剥片, スクレイパー)	63
第38図	石器	8 (剥片, スクレイパー)	64
第39図	石器	9 (剥片, スクレイパー)	65
第40図	石器	10 (打製石斧, 磔器)	66
第41図	石器	11 (礫器, 凹石)	67
第42図	石器	12 (凹石)	68
第43図	石器	13 (凹石)	69
第44図	石器	14 (凹石)	70
第45図	石器	15 (凹石)	71
第46図	石器	16 (凹石)	72
第47図	石器	17 (凹石)	73
第48図	石器	18 (凹石)	74
第49図	石器	19 (凹石)	75
第50図	石器	20 (凹石)	76
第51図	石器	21 (凹石)	77
第52図	石器	22 (凹石)	78
第53図	石器	23 (凹石, 磨石類)	79
第54図	石器	24 (磨石類)	80
第55図	石器	25 (磨石類)	81
第56図	石器	26 (磨石類)	82
第57図	石器	27 (磨石類)	83
第58図	石器	28 (磨石類)	84
第59図	石器	29 (磨石類)	85
第60図	石器	30 (磨石類, 石皿, 磨製石斧)	86
第61図	礫分布図	87
第62図	土坑	90

第63図	土坑	91
第64図	土坑	92
第65図	R6グリッド周辺土石流配置図	102
第66図	遺構	103
第67図	遺物	105
第68図	カイル遺跡全体図	106

表 目 次

第1表	石器 1	52
第2表	石器 2	53
第3表	石器 3	54
第4表	石器 4	55
第5表	石器 5	56
第6表	石器 6	57
第7表	カイル遺跡出土遺物	104

図版目次

- | | |
|-----------------------|-------------------------------------------------------------------|
| 図版1 穴沢遺跡調査前全景、調査状況 | 図版20 穴沢遺跡出土土器 |
| 図版2 1号～7号土坑 | 図版21 穴沢遺跡出土石器 |
| 図版3 8号～14号土坑 | 図版22 穴沢遺跡出土石器 |
| 図版4 15号～18号土坑、1号～2号小穴 | 図版23 穴沢遺跡出土石器 |
| 図版5 1号、4号焼土址 | 図版24 穴沢遺跡出土石器 |
| 図版6 穴沢遺跡調査風景 | 図版25 穴沢遺跡出土石器 |
| 図版7 穴沢遺跡調査風景 | 図版26 カイル遺跡周辺風景、発掘以前、発掘準備、1～10グリット設定 |
| 図版8 土器出土状況 | 図版27 カイル遺跡11～19グリット設定、完掘、1号土坑、テストピット |
| 図版9 尖頭器、上器出土上状況 | 図版28 カイル遺跡2号、3号、4号土坑 |
| 図版10 土器出土状況 | 図版29 カイル遺跡5～7グリット周辺土石流跡、土石流跡（散石）5～7グリット周辺十字断面調査遠景、近景、1～10グリット完掘全景 |
| 図版11 穴沢遺跡出土土器 | 図版30 カイル遺跡発掘風景 |
| 図版12 穴沢遺跡出土土器 | 図版31 カイル遺跡出土土器 |
| 図版13 穴沢遺跡出土土器 | 図版32 カイル遺跡出土石器 |
| 図版14 穴沢遺跡出土土器 | |
| 図版15 穴沢遺跡出土土器 | |
| 図版16 穴沢遺跡出土土器 | |
| 図版17 穴沢遺跡出土土器 | |
| 図版18 穴沢遺跡出土土器 | |
| 図版19 穴沢遺跡出土土器 | |

第Ⅰ章 調査にいたる経緯

今回報告の穴沢遺跡・カイル遺跡の発掘調査は、レイク相模ゴルフ俱楽部ゴルフ場の開発計画を受けて実施された。開発区域は山梨県と東京都との境に近く、熊倉山、生藤山など900mを超える山々が連なる山間地帯である。このため遺跡は小伏穴沢において縄文時代中期の遺跡1ヵ所知られるのみであった。

昭和57年7月11日、町教育委員会は県文化課と町文化財審議会と合同で開発予定区域内の現地踏査を行った。この結果、穴沢遺跡を含め計4ヵ所の旧耕地について試掘調査を行う必要が確認され、同年8月11日、上野原町埋蔵文化財調査会が発足、予備調査団が組織された。

試掘調査は、同年8月11日から約1ヵ月間かけて行われた。この結果、穴沢遺跡において縄文早期から中期にかけての土器片や打製石斧が出土した他、穴沢遺跡の北西約900mの県道相原-藤野線北側緩斜面でも縄文早期から中期中葉の土器片が出上、新たに遺跡として確認され、字名からカイル遺跡とされた。

昭和61年7月10日、業者より工事権が提出されたのを受け、同年8月8日、町埋蔵文化財調査会が開かれ、本調査も止むなしということで前記2遺跡の記録保存を目的とした発掘調査団が組織された。

発掘調査は、穴沢遺跡（調査面積約3,600m²）が昭和61年8月11日から翌1月27日まで、カイル遺跡（調査面積約330m²）は昭和62年2月20日から3月31までの期間で実施された。

第II章 遺跡の位置と周辺の環境

穴沢遺跡、カイル遺跡のある北部留都上野原町は、山梨県の東端に位置し、東京都・神奈川県と接している。町面積の79%を山林が占めており、この山々を縫うように桂川（相模川）、支流の鶴川・仲間川が流れ、流域には河岸段丘地形が断続的に発達している。桂川と鶴川の合流地点に大きく張り出した上野原台地は、町内で最も規模の大きい河岸段丘であり、町の中心地となっている。河岸段丘地形は、山がちな当町にとって重要な生活の場であり、このことは西原・桐原（ゆずりはら）・大野・今野等平坦を表す地名が多いことからも伺えると言われている。

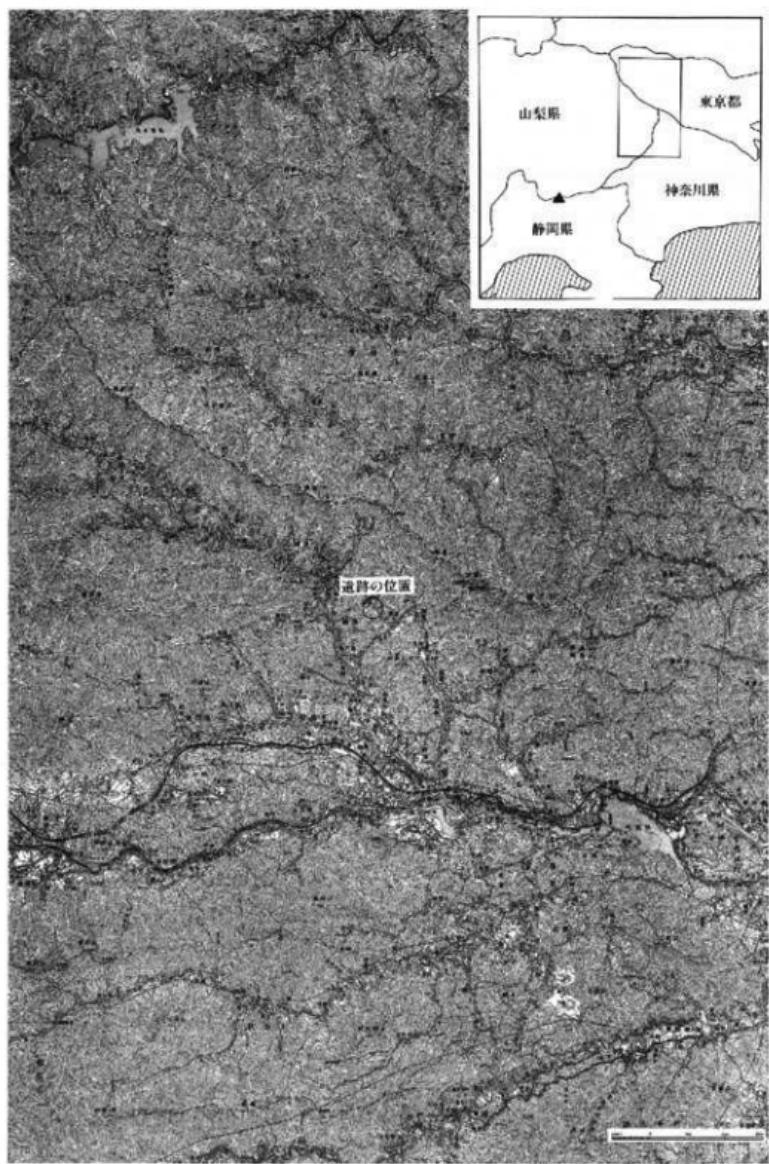
町内で現在までに確認されている遺跡は、こうした河岸段丘上や山の緩斜面に位置しており、これはまた現在の集落分布とほぼ一致している。時期としては縄文時代が最も多く、とくに中期に至って急増しており、この傾向は桂川流域全体に認められている。弥生時代以降、数は激減する。

穴沢、カイル遺跡は鶴川中流域の桐原地区に位置する。この付近一帯は、県境をなす熊倉山・生藤山の山系と、町境をなす佐野峰、権現山の山系とが広がる山間地域である。各山系とも標高1,000m前後であり、これら山系を水源として、三ツ山川、小伏沢、黒田沢、井戸川といった川が峡谷をなして鶴川に注いでいる。

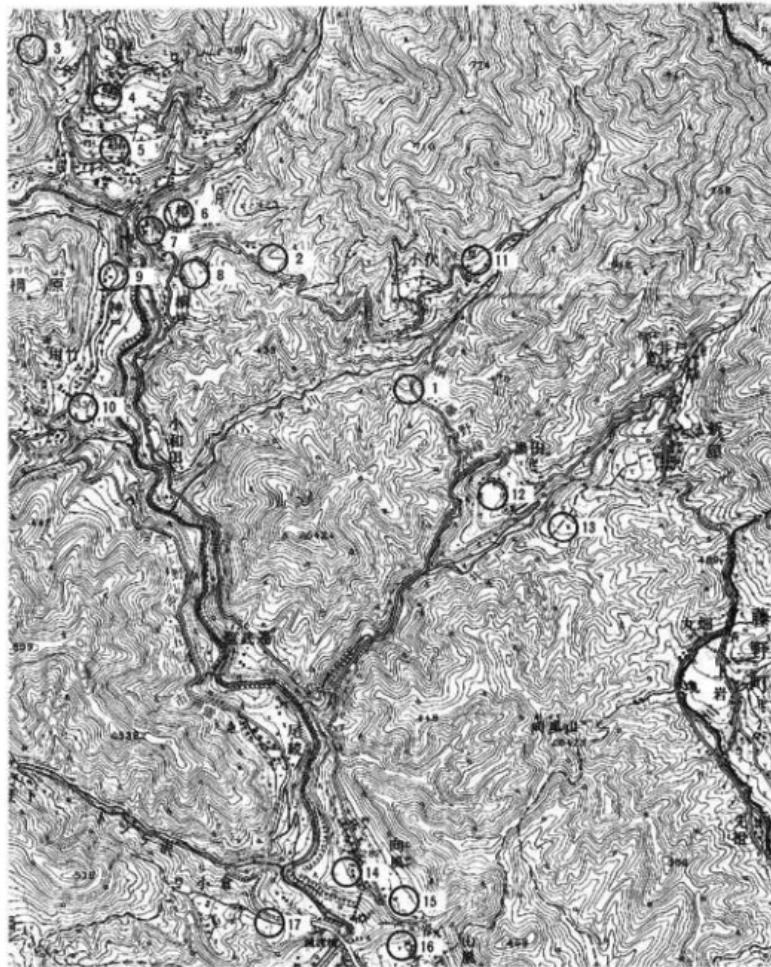
穴沢遺跡は、県境の熊倉山（972m）から南西方向に延びる支脈と聚武連山（542m）との間の鞍部に位置し、小伏沢、黒田沢との分水嶺となっている。標高は380mから410mである。カイル遺跡は、穴沢遺跡の北西約900m、県道藤野一桐原線北側の緩斜面に位置している。標高は390mから395mである。両遺跡とも旧耕地であり荒地となっていた。

穴沢遺跡の周辺では神庭遺跡(1)、黒田東遺跡(2)、新屋原遺跡(3)が知られている。各遺跡とも鶴川から派生した支流沿いに点在しており、縄文前期から中期にかけての遺物が確認されている。一方、鶴川が大きく流路を変える猪丸・日原地区は、比較的広い緩斜面を有し、山懐にいだかれた感を受ける地域である。縄文時代を中心に遺跡の数が多く、主なものでは桐原遺跡(8)、椿和田原遺跡(6)、下椿遺跡(7)、猪丸遺跡(5)、本光寺遺跡(4)、チチューダケ遺跡(3)がある。猪丸遺跡の南に位置する桐原中学校では、敷地造成時に後期中葉から晩期にかけての土器片が大量に出土し、敷石遺構等が発見されている。

各遺跡とも、発掘調査例が少ないため詳細については不明な点が多い。山間地域という生活舞台の限られた地域であるだけに、各遺跡間の関連性が注目される。



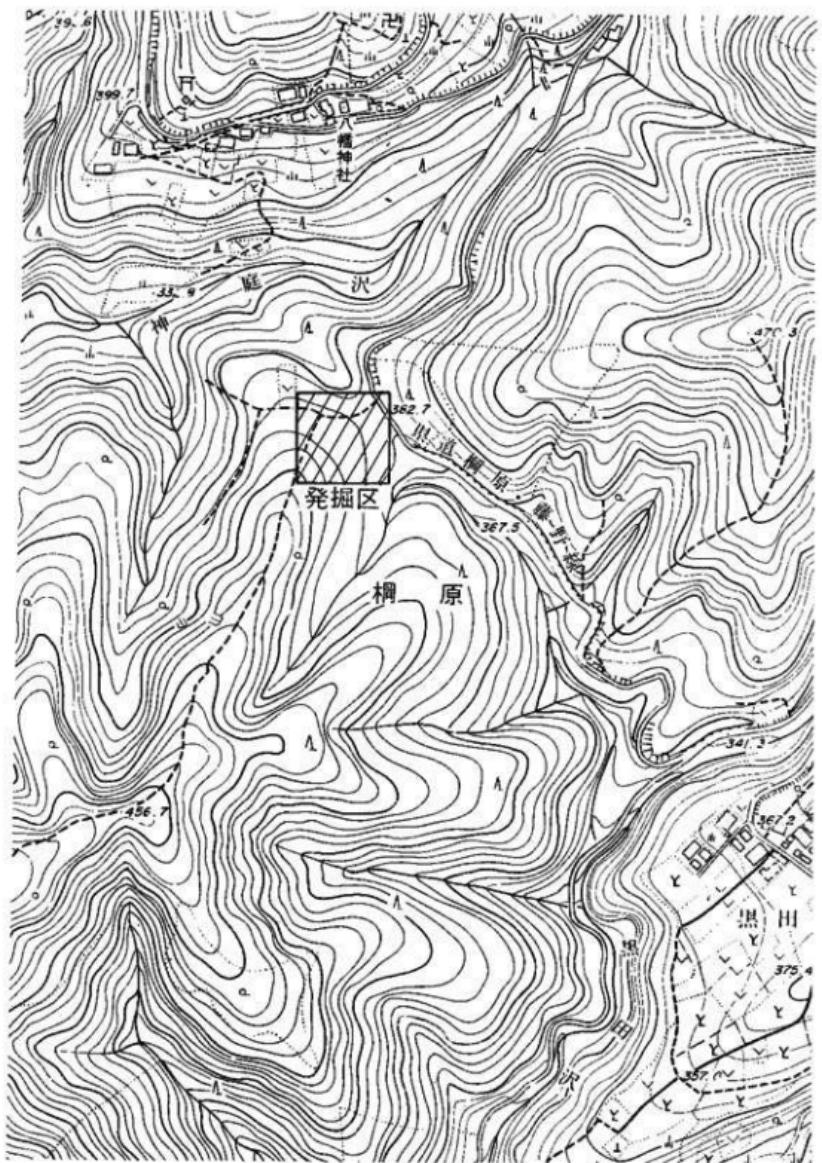
第1図 遺跡の位置



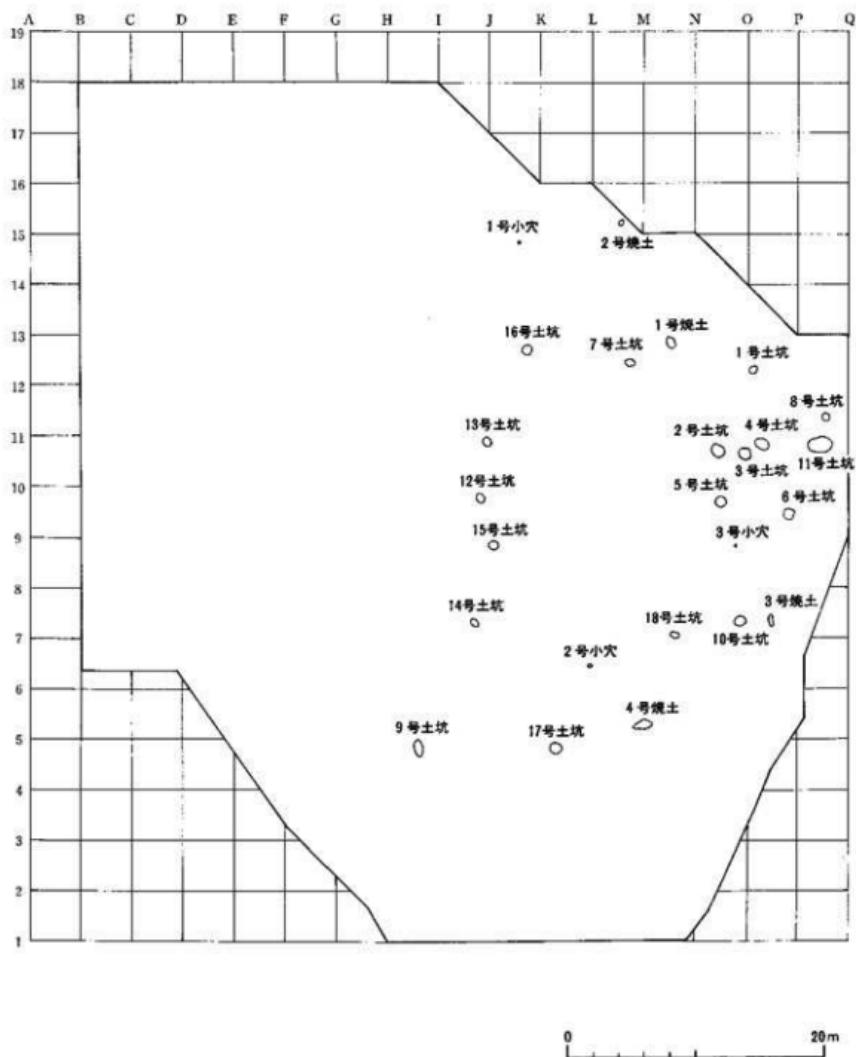
1 : 25,000

第2図 周辺の遺跡

- | | | | | |
|----------|----------|------------|-----------|----------|
| 1 穴沢遺跡 | 2 カイル遺跡 | 3 チチューダケ遺跡 | 4 本光寺遺跡 | 5 猪丸遺跡 |
| 6 椿和田原遺跡 | 7 下椿遺跡 | 8 桐坪遺跡 | 9 神戸遺跡 | 10 殿村遺跡 |
| 11 神庭遺跡 | 12 黒田東遺跡 | 13 新屋原遺跡 | 14 向風II遺跡 | 15 向風I遺跡 |
| 16 山風呂遺跡 | 17 小倉遺跡 | | | |



第3図 周辺の地形と発掘区(1:5,000)



第4図 穴沢遺跡遺構分布図

第III章 穴沢遺跡

第1節 調査の方法

地形にそった形で4mグリッドを設定し掘り下げた。遺物は原則として全点記録を行なった。

第2節 遺跡の層序

層序は斜面部においては表土直下がローム層という状況であったが、斜面下方では、およそ5層に分けられた。

第I層 表土。

第II層 棕色土。粒子、粘性の違いで第III層と分けられる。

第III層 棕色土。

第IV層 黒色土。縄文時代の遺物包含層である。

第V層 ローム層。

第3節 遺構と遺物

発見された遺構、遺物はつぎのとおりである。

縄文時代

遺構 土坑7基、小穴3基、焼土址4基

遺物 早期～晚期の上器、尖頭器・石鎌・石匙・凹石・磨石などの石器

奈良、平安時代以降

遺構 七坑10基

遺物 土師器、須恵器

1 縄文時代

(1)土坑

7基検出された。平面円形を呈し、堀込みが深く底面に複数の小穴をもつ。分布は、調査区東側、傾斜の緩やかな範囲に、等高線に添うような形で発見されており、その形態とともに齊一

性が認められる。確認面は第IV層である。

9号土坑（第5図）

位置 II-5区。

形態 平面不整梢円形。壁は上方に向かって開き、一部オーバーハングしている。

規模 上端 118cm×78cm、深さ42cm 下端 108cm×70cm

施設 底面に小穴1個。径10cm。

遺物 無し。

12号土坑（第6図、図版3）

位置 I-10区。

形態 平面不整円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

規模 上端 82cm×64cm、深さ82cm 下端 42cm×42cm

施設 底面に小穴5個。径5~10cm。深さ13~18cm。

遺物 無し。

13号上坑（第6図、図版3）

位置 I-11区。

形態 平面円形。壁は急傾斜で立ち上がる。

規模 上端 80cm×72cm、深さ94cm 下端 26cm×26cm

施設 底面に小穴4個。径6~8cm。深さ5~9cm。

遺物 無し。

14号上坑（第6図、図版3）

位置 I-7区。

形態 平面不整円形。壁は急傾斜で立ち上がる。

規模 上端 90cm×74cm、深さ80cm 下端 50cm×40cm

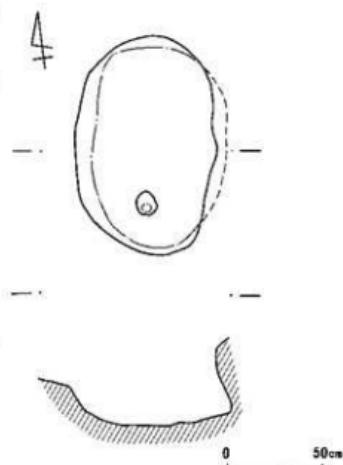
施設 底面に小穴4個。径5~6cm。深さ11~13cm。底面に小穴1個。径6cm。深さ18cm。

遺物 繩文土器片1点。

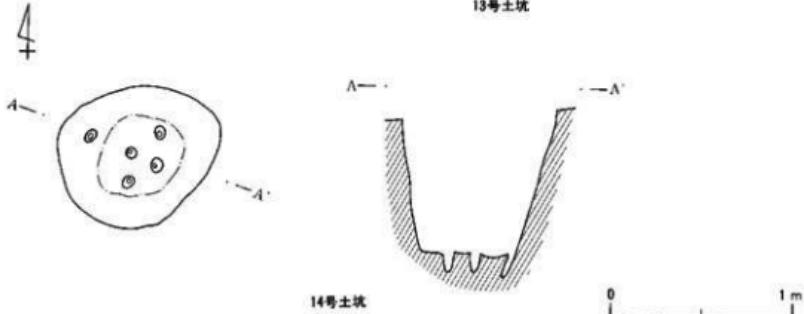
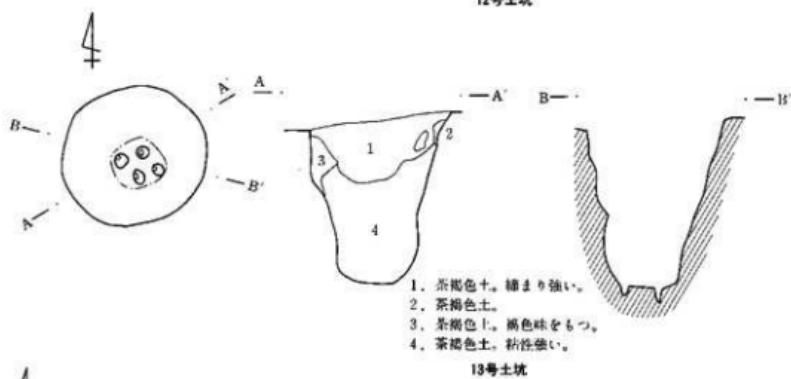
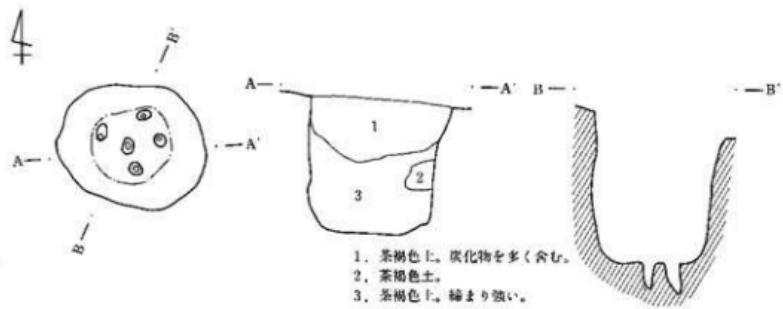
15号上坑（第7図、図版4）

位置 I-9区。

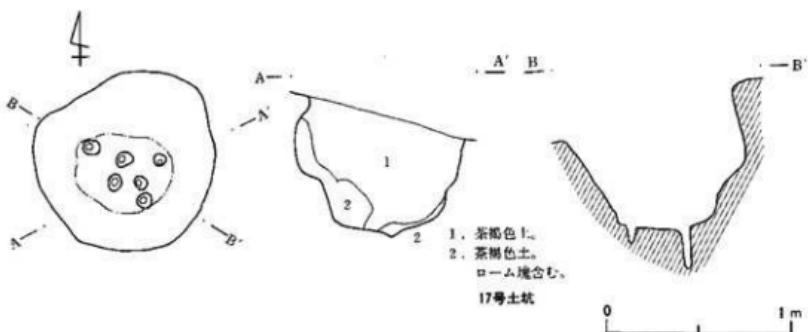
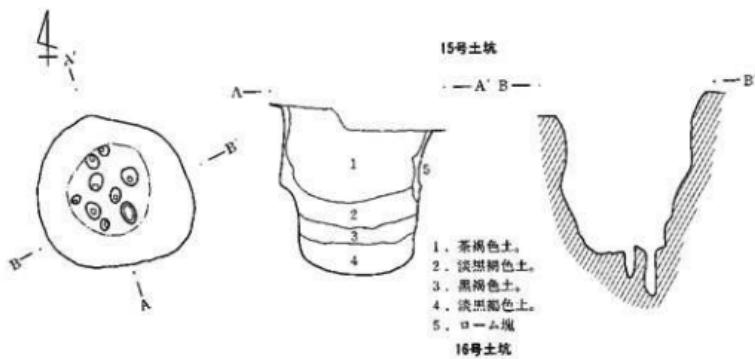
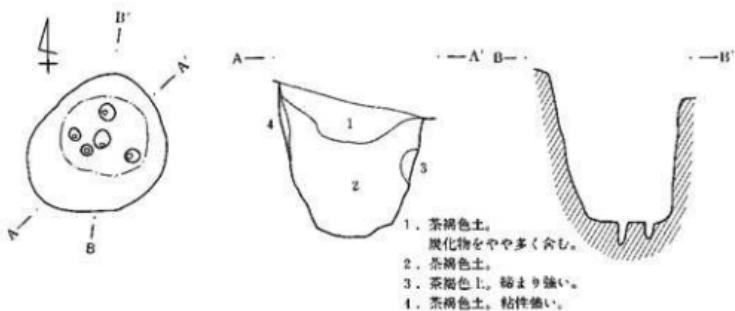
形態 平面円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。



第5図 土坑1(9号土坑)



第6図 土坑2



第7図 土坑3

規模 上端 80cm×78cm、深さ84cm 下端 48cm×42cm

施設 底面に小穴 5 個。径 6 ~ 10cm、深さ 8 ~ 13cm。

遺物 無し。

16号土坑（第7図、図版4）

位置 J-13区。

形態 平面円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

規模 上端 82cm×84cm、深さ94cm 下端 46cm×46cm

施設 底面に小穴 9 個。径 5 ~ 12cm、深さ 8 ~ 21cm。

遺物 無し。

17号土坑（第7図、図版4）

位置 K-5区。

形態 平面円形。壁は急傾斜で立ち上がる。

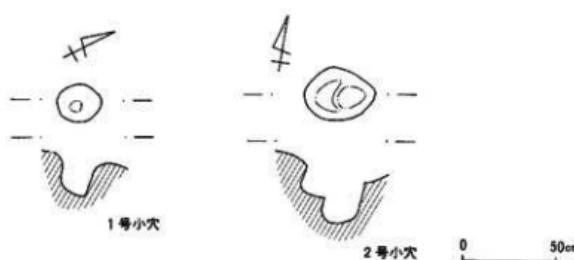
規模 上端 100cm×98cm、深さ80cm 下端 52cm×40cm

施設 底面に小穴 6 個。径 6 ~ 10cm、深さ 14 ~ 35cm。

遺物 無し。

(2) 小穴

調査区東側、傾斜の緩やかになった所で 3 基確認された。それぞれ単独で位置する。



第8図 小穴

1号小穴（第8図、図版4）

位置 J-15区。

形態 平面円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

規模 上端 径20cm、深さ24cm

遺物 無し。

2号小穴（第8図、図版4）

位置 K-7区。

形態 平面不整円形。西壁に段差を持つ。

規模 上端 36cm×26cm、深さ40cm 下端 14cm×10cm

遺物 無し。

3号小穴

位置 N-9区。

形態 平面不整円形。

規模 上端 径24cm

遺物 繩文早期（条痕文）2点。

(3)焼土址

1号焼土址（図版5）

M-13区に位置する。112cm×68cmの範囲で焼土が認められた。

2号焼土址

L-16区に位置する。108cm×80cmの範囲で焼上が認められた。

3号焼土址

O-7区に位置する。100cm×38cmの範囲で焼土が認められた。

4号焼土址（図版5）

L-5区に位置する。152cm×82cmの範囲で焼土が認められた。

(4) 遺構外出土遺物

ア 土器

本遺跡の出土土器総数は、5,460点にのぼる。分布は、第9図に示したように調査区東側、傾斜の緩やかになったところに集中する。所満時期は、縄文時代早期中葉から晩期にわたっているが、特に早期の沈線文系・条痕文系土器、前期の羽状縄文系・竹管文系土器が多く見られる。大半が小破片であり数も膨大なため、主なものを文様、および施文手法によってつぎのように分類し報告する。

第I群 縄文時代早期中葉、押形文土器。

第II群 早期中葉、沈線文系土器群。

- 第1類 貝殻腹縁文
第2類 口縁部に平行沈線文
第3類 半裁竹管による沈線文
第4類 縦位・波状の太沈線文
第5類 擦痕様の沈線文が山線氣味に施されるもの

第III群 早期後半、条痕文系土器群。

- 第1類 沈線と押引文による三角形状の文様をもつもの。
第2類 押引文
第3類 緒条体压痕文
第4類 貝殻腹縁文
第5類 条痕文
第6類 無文
第7類 底部

第IV群 前期前半、胎土に纖維を多く含み縄文等の施される土器群

- 第1類 無節縄文
第2類 単節縄文
第3類 異条斜縄文
第4類 羽状縄文
第5類 コンバース文
第6類 口縁部に平行沈線文
第7類 梯子状文
第8類 胎部に平行沈線文
第9類 縄文地に平行沈線文
第10類 刺突・押引文
第11類 無文
第12類 底部

第V群 前期後半の土器群

- 第1類 半裁竹管による連続爪形文
第2類 縄文地に平行沈線文
第3類 無文地に平行沈線文
第4類 結節沈線文
第5類 口縁部に多数の貼付文をもつ

第6類 繩文のみ

第7類 無文

第8類 浅鉢

第9類 底部

第VI群 中期初頭の土器群

第1類 結節浮線文

第2類 結節沈線文

第VII群 中期前葉の土器群

第1類 地文に繩文

第2類 地文に繩文なし

第VIII群 中期後葉の土器群

第1類 口縁部に渦巻状文様

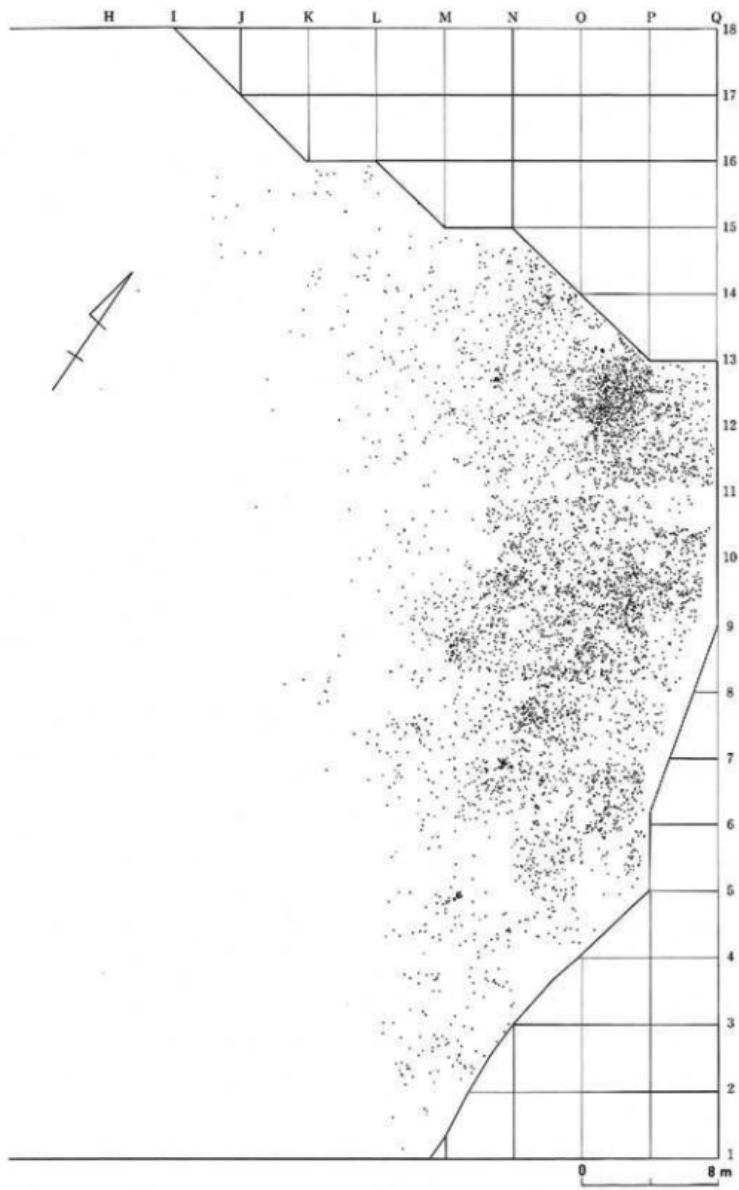
第2類 縱位の区両文

第IX群 後期の土器群

第1類 磨消繩文

第2類 太沈線文

第X群 晩期の土器



第9図 土器出土状況分布図（調査区東半分）

第Ⅰ群 繩文時代早期中葉、押形文土器を一括した(1~4)。(第10図、図版11)

1を除きいずれも胴部破片である。1は口縁部破片で、口唇部は丸く外反気味である。椿円押形文が1は縱位、他は横位に施され、その大きさは6mm×3mmほどである。胎土は黒雲母、金雲母、石英を多く含んでおり、器面はざらついている。色調はいずれも赤褐色を呈し、焼成は比較的良好である。

第Ⅱ群 早期中葉、沈線文系土器群を一括した(5~29)。(第10~11図、図版11)

第1類 貝殻腹縁文が施されたものである(5~15)。貝殻腹縁文のみのものと、沈線文とが組合わされるものとに分けられる。

a種 貝殻腹縁文のみ施されるものである(5~11)。5~7は口縁部破片である。口縁部から斜行する貝殻腹縁文が頸部において横位の腹縁文と連結する。胴部は無文である。口唇部には刻みが施されており、施文具は棒状具によるもの(6)と、貝殻腹縁によるもの(5, 7)とがある。10・11の貝殻腹縁文は他に比べ鋭さに欠ける。11は穿孔が1個見られる。胎土は黄白色粒子、黒雲母、砂粒を多く含む。色調は概ね赤褐色を呈し、焼成は良好である。

b種 沈線間に貝殻腹縁文が施されたものである(12~15)。12以外は胴部破片である。13・15は横位の沈線間に連続山形文が施される。12は口唇部上面に細い刻みが、外面には刺突文が加えられる。胎土はa種と同様である。色調は赤褐色ないし褐色であり、焼成はいずれも良好である。

第2類 口縁部に平行沈線文が施されたものである(16, 17)。17には斜行する短沈線文が見られる。16には穿孔が見られる。内面は平滑に仕上げられる。胎土は纖維を多く含む。色調は褐色を呈し、焼成は悪い。

第3類 半裁竹管による沈線文が施されたもの(18~23)。

18、口唇部は半坦で内反気味に立ち上がり、半裁竹管による刺突文が加えられる。胎土は石英、黄白色粒子を含む。色調は赤褐色で、焼成は良好。

19~23は、三角状のモチーフが施されている。19は外反気味に立ち上がる口縁部で、口唇部には半裁竹管による刺突文が加えられる。20・21・23は横位の沈線文間に連続山形文を施す。22は縱位・斜位の沈線文である。いずれも胎土は黄白色粒子・砂粒・黒雲母・金雲母・石英が含まれ、19は纖維を含む。色調は褐色・赤褐色を呈する。焼成は概ね良好である。

第4類 縱位・波状の太沈線文を施したものである20。胴部片である。色調は暗褐色を呈し、焼成は悪い。

第5類 擦痕様の沈線文が曲線気味に施されるものであり、口唇部に細い刻みが加えられる(25~29)。25~28は口縁部、29は胴部破片である。いずれも胎土には砂粒を含む。色調は褐色

であり、焼成は良好である。

第三群 早期後半、条痕文系土器群を一括した(30~89)。(第11~16図、図版11~12)

第1類 沈線と押引文を三角形状の区画で施した土器群を一括した(30~39)。全て胴部破片であり、文様の特徴により3種に分類できる。

a種 細陥起線によって区画されるもの(30~33)。細沈線で区画された中を竹管による押引文で充填する。内面は条痕文が横位に施される。胎土は纖維がわずかに含まれる他、赤色粒子・砂粒を含む。色調は暗褐色を呈し、焼成はやや悪い。

b種 細沈線によって区画されるもの(34~36)。内外面の条痕文を地文とし、区画内は押引文で充填される。胎土はわずかな纖維の他、砂粒を含む。色調は暗褐色ないし褐色を呈し、焼成はやや悪い。

c種 太沈線文、刺突文によって区画されるもの(37~39)。37・38は太沈線文によって区画され、竹管による円形刺突文が加えられる。39は連続刺突文により区画され、それぞれの区画内は押引文で充填されている。39を除き内外面とも横位の条痕文を地文とする。胎土は纖維をわずかに含む他、黒・金雲母、石英、砂粒を含み、器面はざらつく。色調は褐色ないし暗褐色。焼成はやや悪い。器厚は10~15mmであり、他に比べ厚手である。

第2類 押引文が施されるもの(40)。胴部よりほぼ直線的に開く深鉢形であり、口縁部に4条1組からなる縱位の連続押引文を施しており、頸部には細沈線を縱に短く施す。胴部は無文である。器面は内外面とも丁寧に撫でつけられている。口唇部には斜めに刻みが施され、1対の小突起が見られる。胎土は纖維、金雲母、石英、白色粒子が目立つ。色調は赤褐色ないし暗褐色であり、焼成は比較的良好である。

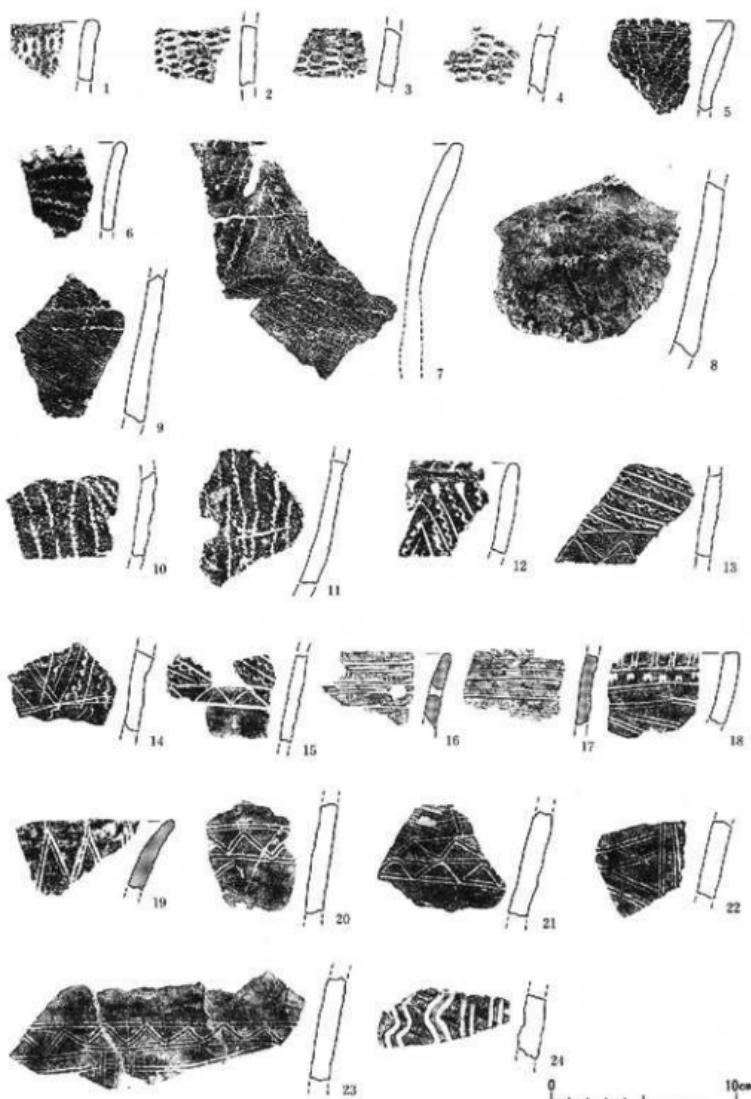
第3類 絡条体圧痕文の施される土器群を一括した(41~49)。縁帶の有無により2種に細分できる。

a種 縁帶あるいは突帯のあるもの(41~43)。口縁部破片である。

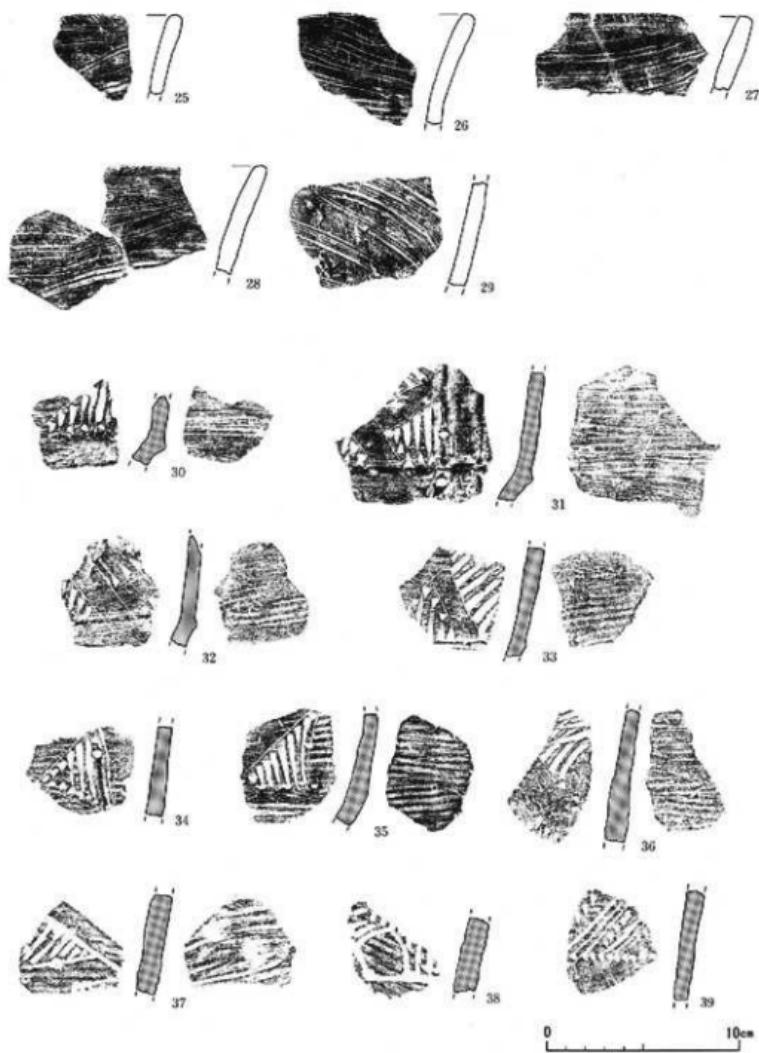
41は、胴部上位よりほぼ直線的に開く深鉢形土器の破片である。口縁部にめぐら3本の平行縁帶上に、絡条体圧痕文を斜位に施している。圧痕文は深く明瞭である。口唇部外側には瘤状の突起が1個見られる。内外面に地文の横位条痕文が見られる。胎土は纖維、赤色スコリア、白色粒子を含む。色調は褐色で、黒斑が見られる。焼成はやや悪い。

42,43は同一個体。菱形状モチーフの条痕文を地文としている。内面は無文。横位の絡条体圧痕文を口唇部、突带上に施している。胎土は、黒雲母、石英、黄白色粒子を多く含み、纖維はほとんど含まれない。色調は暗褐色で、焼成は比較的良好。

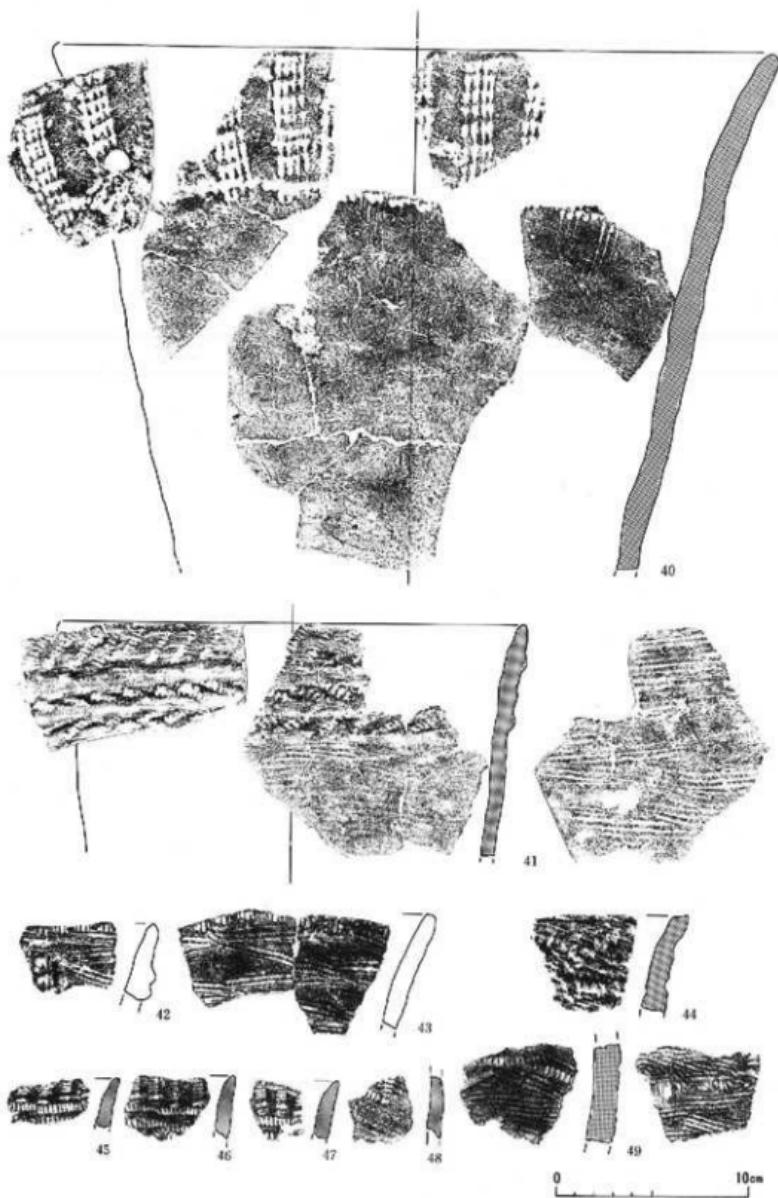
b種 縁帶の見られないもの(44~49)。48,49を除きいずれも口縁部破片である。



第10図 土器 1 (縄文時代早期中葉)



第11図 土器2(縄文時代早期中葉・後半)



第12図 土器3(縄文時代早期後半)

44はわずかに外反する口縁部破片で、縦条体圧痕文をV字状・横位に施す。口唇部上面にも圧痕文を施す。施文は全体に粗雑であり、その輪郭は不明瞭である。胎土は纖維、小礫・砂粒が多く含む。色調は褐色で、焼成は比較的良好。

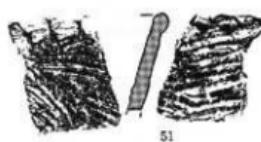
45~48は、同一個体である。口縁部はわずかに外反し先細る。縦条体圧痕文を口唇部に縱位に、下部には横位に施している。胴部にはV字状に施される。施文は明瞭である。いずれも内外面には地文として不明瞭な条痕文が見られる。胎土は纖維、白色粒子を多く含む。色調は黒褐色で、焼成は悪い。

第4類 貝殻腹縁文が施されたものである例。ほぼ直線的に開く口縁部破片で、口唇部は平坦に仕上げられる。器厚は2.5mm~4.0mmと薄手である。内外面には貝殻腹縁による押引きを横方向に連続して施す他、口唇部上面には貝殻腹縁で刻みを加えている。地文は内外面とも条痕文である。胎土は石英を含む。色調は外面黒褐色、内面褐色を呈し、焼成はやや悪い。

第5類 条痕文が施された土器群を一括した。

a種 内外面とも条痕文が施されたもの(50~62, 65, 66, 76)。50~53は、口縁部破片である。

50は横位の条痕文が施され、口唇部には斜位の刻みが加えられる。53は波頂部に位置する口縁部で、外反気味に開く。条痕文が斜位に施され、口唇部上面には繩文原体による圧痕が見られる。胎土は纖維、砂粒を含み、色調は褐色50、暗褐色53を呈する。焼成は概ね悪い。51, 52は、指頭あるいは棒状具による潰しによる波状文を口唇部にもつ。直線的に開く口縁部である。斜位の深く明瞭な条痕文が内外面に施される。胎土に石英を含む。色調は褐色、黒褐色。54~62は、胴部破片である。大半の条痕文は深く明瞭であるが、55, 56, 62については擦痕状である。施文方向は斜位が大半だが擦痕状のものについては一定せず疎らに雜然と施される。胎土は纖維を多量に含む他、砂粒・小礫が目立つ。色調はにぶい褐色ないし赤褐色を呈し、焼成はいずれも悪い。65, 66は外反気味の口縁部破片であり、条痕文が外面縱位、内面は横位に施されるが、



第13図 土器4(縄文時代早期後半)

浅く不明瞭である。胎土は、金雲母・石英を含む。色調は暗褐色、ないし黒灰色を呈し、焼成は良好である。76は口唇部がやや肥厚する。棒状具により斜方向から深く刺突される。外面は横・斜位、内面は縦位の条痕文が施される。胎土は纖維・砂粒を含む。色調は赤褐色を呈し、焼成は比較的良好である。

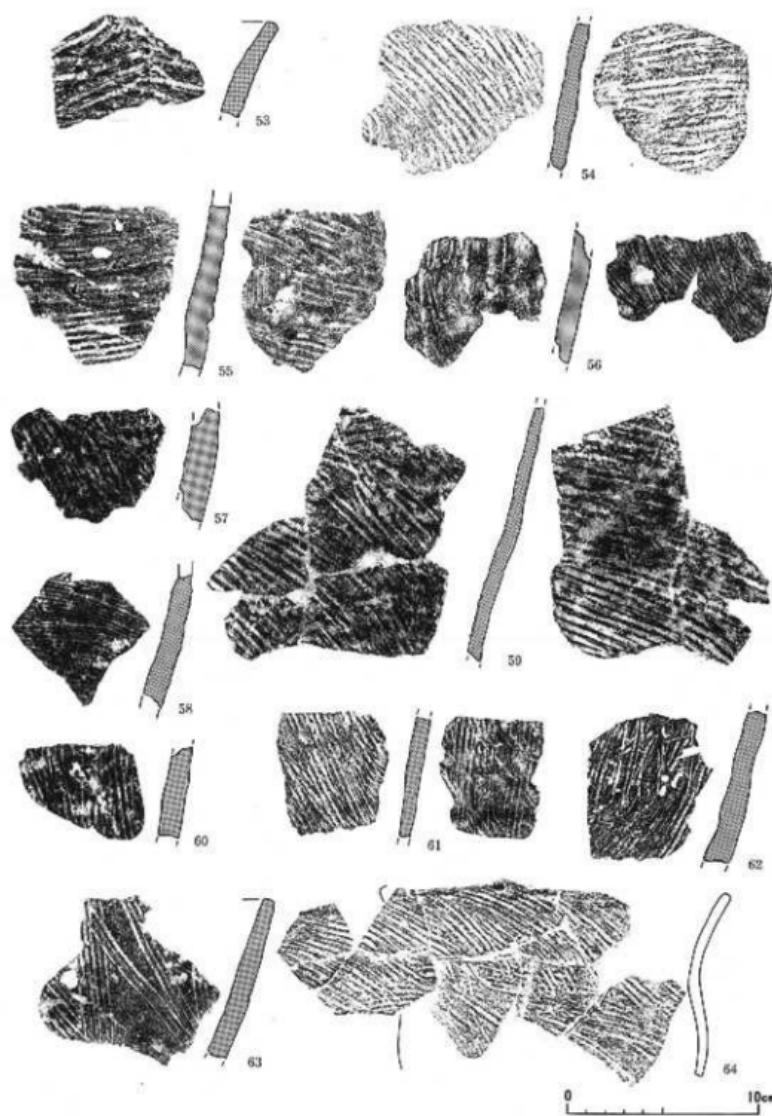
b種 外面のみに条痕文が施されるもの(63,64,67~75)。63は口縁部破片。縦位の条痕文を疎らに施し、口唇部には刻みが加えられる。胎土は纖維をわずかに含む他、金雲母・石英が目立ち、悪い。色調は褐色で、焼成は比較的良好である。

64は口縁部から胴上半部の深鉢である。器厚は5mmと薄手である。口縁部は外反し波状を呈し、口唇部上面は平坦である。文様は、条痕文を胴上半部は横位に、口縁部は斜位に施している。色調は黒褐色で、胴上半部内面には吸炭が見られる。胎土は纖維を含まず、1mm以下の白色粒子を含む。67~69は、条痕文が縦位に施される。69には半裁竹管による刺突文が不規則に加えられる。胎土には纖維が含まれず、砂粒をわずかに含んでいる。色調は暗褐色、ないし黒灰色を呈し、焼成は良好である。70,71は胴部破片。条痕文を不定方向に疎らに施しており、施文は明瞭である。胎土中の纖維はわずかであり、金雲母が目立つ。色調は暗褐色ないし黒褐色で、焼成は比較的良好に固く焼き縮まる。

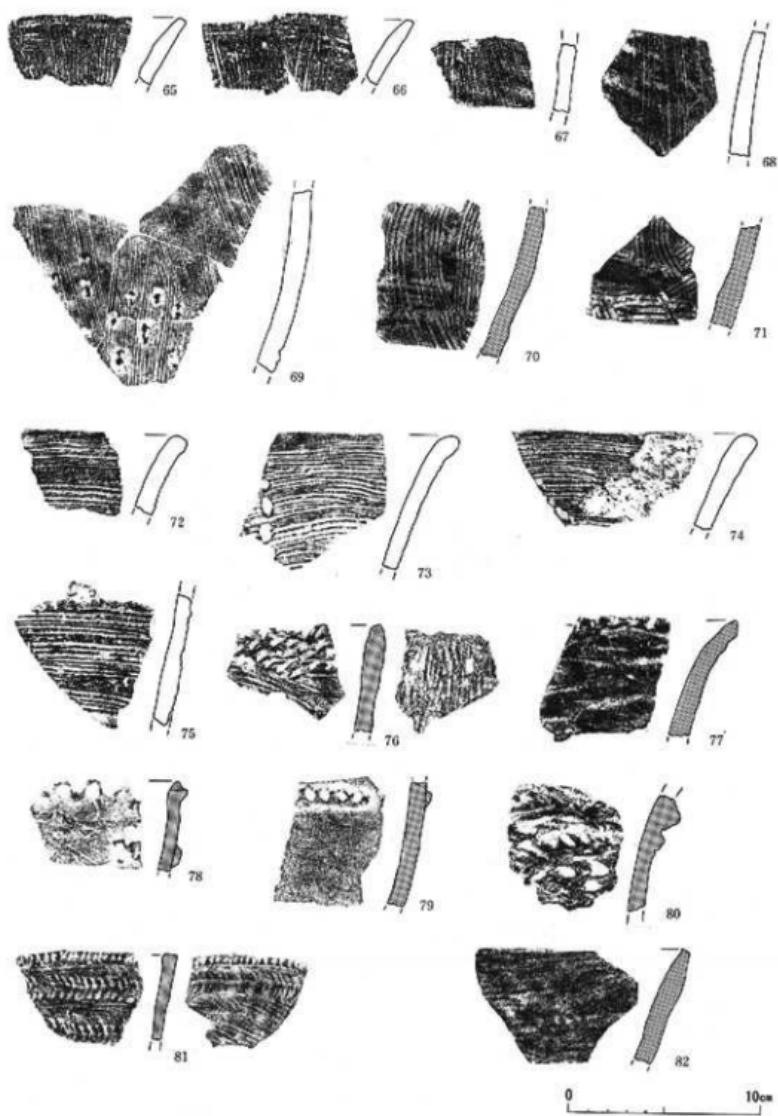
c種 内面のみに条痕文が施されるもの(82~84)。82は口縁部破片である。横位の条痕文である。胎土は白色粒子を含み、色調黒褐色、焼成は比較的良好である。83,84は胴部破片である。斜位の条痕文である。84の外面は器面調整時の撫でにより、粘土が筋状に盛り上がる。胎土は、83は白色粒子・赤色スコリア粒、84は金雲母・石英等を含む。色調は褐色、赤褐色を呈し、焼成は比較的良好である。

第6類 擦痕を含め、無文のものを一括した(77~80,85~87)。77は外反する口縁部破片である。口唇部に刻みが加えられる。胎土は纖維・赤色スコリアを含む。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。78、口縁部に指頭による潰しが加えられた隆帯をもつ。胎土、焼成は85と似る。79、胴部破片。断面三角形の隆帯をもつ。80は胴部破片である。横走する2本の隆帯上に、棒状具の腹を押し当てたような刺突文を斜位に施す。米粒様の刺突文を加える。胎土は纖維を多く含む。色調は褐色を呈し、焼成は悪い。85は、わずかに外反する口縁部破片である。内外面とも横位の擦痕が認められる。口唇部には指頭、あるいは棒状具による潰しによる波状文をもつ。86,87は胴部破片。内外面とも不定方向の擦痕が不明瞭ながら認められる。胎土は纖維・砂粒を含む。色調は褐色で焼成は悪く、86は器面の剥落が目立つ。

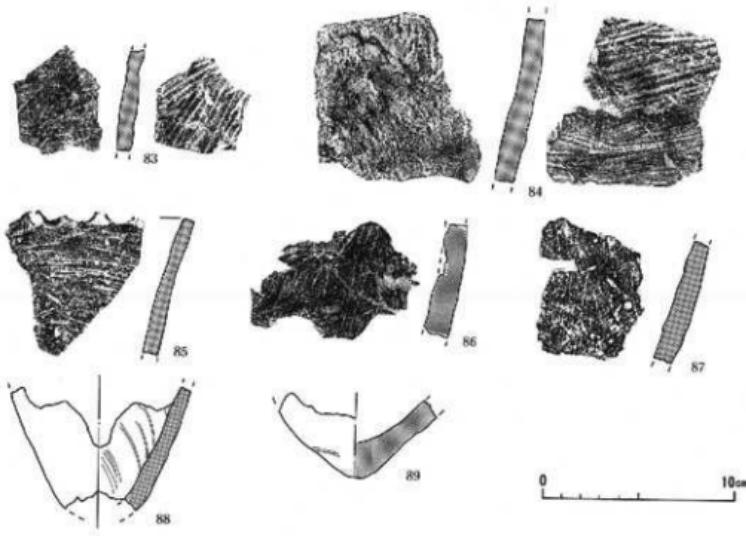
第7類 底部を一括した(88,89)。いずれも底面で、88の内面に深く明瞭な条痕文が施される他は、いずれも無文である。胎土は纖維を含み、色調は褐色で焼成は悪い。



第14図 土器5(縄文時代早期後半)



第15図 土器 6 (縄文時代早期後半)



第16図 土器7(縄文時代早期後半)

第Ⅳ群 前期前半、胎土に纖維を多く含み縄文等の施される土器群を一括した(90~157)。(第17図~23図、図版13~16)。文様等から9類に分類できる。

第1類 無節縄文が施されるものである(90~93)。90は深鉢の波状口縁部で、波頂部には断面三角形の突帯が加えられている。他は、胴部破片である。いずれも無節縄文しが施される。93は頸部に横位降帯が貼付され、指頭による押捺が加えられている。いずれも内面は平滑に仕上げられる。胎土は纖維が多く色調は暗褐色で、焼成はやや悪い。

第2類 単節縄文が施されるもの(94~118)。2種に分類できる。

a種 単節縄文R Lしかほどこされるものである(94~100)。94~96は口縁部破片、97~100は胴部破片である。95は深鉢の胴上半部である。口唇部は外反する。内面はいずれも平滑であり、とくに99は棒状具による磨き痕が継、横位に明瞭に認められる。胎土は纖維が多い。色調は褐色、暗褐色、赤褐色を呈し、焼成はやや悪い。

b種 単節縄文L Rが施されるものである(101~105, 107)。101は深鉢である。推定口径24.0cm、現存高25.0cm。胴中位で膨らみ、口縁部は直線的に開く器形である。底部は平底である。102~104は口唇部で外反する。105は強く外反する口縁部である。内面はいずれも平滑である。色調は暗褐色、暗灰色を呈し、焼成はやや悪い。

第3類 異条斜縄文が施されるもの(106)。外反する波状口縁であり、異条斜縄文しが施される。内面は良く磨かれる。胎土には多く纖維を含み、色調は茶褐色、焼成はやや悪い。

第4類 羽状縄文の施される上器群を一括した(108~110)。文様原体により3種に分類できる。

a種 無節縄文が施されるもの(109)。胴部破片。無節縄文RとLによる羽状縄文である。胎土は纖維、砂粒を含む。色調は茶褐色、焼成は悪い。

b種 単節縄文が施されるもの(108, 110)。108は胴部破片である。単節縄文R Lを斜位、縦位に施す。色調は暗灰色で、焼成は悪い。110は胴下半部の破片。単節縄文L Rを縦、横位に施し羽状とする。色調は茶褐色で、焼成は悪い。胎土はいずれも纖維を多く含む。

c種 ループ文が施されるもの(111~118, 122, 123)。

c-1種(111~114, 122, 123)。多段のループ文帯を構成するもの。122, 123は深鉢の胴上半部であり、口縁部は内湾気味に開く、口唇部は内削ぎ状で123には口唇部上面に山形の突起が付く。文様は、多段のループ文帯と単節縄文帯を交互に施す。123の口唇部には3本1組の短沈線を鋸歯状に配している。111~114は胴部破片である。胎土は纖維を多く含む。色調は茶褐色、褐色、赤褐色を呈し、焼成はやや悪い。

c-2種(115~117)。1段のループ文を持つもの。口縁部破片であり、同一個体。口唇部は平坦気味である。胎土は纖維を含み、色調は褐色、焼成はやや悪い。

d種 付加条縄文が施されるものである(118)。口縁部破片であり、平坦な口唇部上面に小

突起が付けられる。文様は単節縄文RLと付加条縄文を交互に施して、羽状を構成する。色調は橙褐色、焼成はやや悪い。

第5類 コンパス文が施されるものである(119~121, 124~133)。縄文の有無で2種に分類できる。

a種(119~121, 124~127, 129)。地文に縄文をもつものである。施文具の違いにより細分できる。

a-1種 半裁竹管により施されたものである。124は片口を持つ深鉢の胴上半部である。地文として異条件縄文を数段にわたって羽状に施している。コンパス文を口唇部と胸部に各1条巡らし、口唇部にはコンパス文上にボタン状の貼付文を加えている。また、片口端部には半裁竹管による刻みが連続して施される。129は胴部破片。単節縄文地に縦長のコンパス文を施している。胎土はいずれも纖維を含む。色調は暗褐色で、焼成はやや悪い。

a-2種 櫛歯状工具が用いられるものである(119~121, 125~127)。

119~121は口縁部破片である。口唇部は内削ぎ状となり、120には山形、127には台状の突起がそれぞれ付けられている。文様は、口唇部にコンパス文を巡らし、下部に多段のループ文、単節羽状縄文、さらにその下にコンパス文を施している。127は櫛歯状工具による横位沈線文を口唇部に巡らし、円形貼付文が加えられる。125, 126は胸部破片である。ループ文、単節縄文を地文として、コンパス文を巡らしている。126にはさらに櫛歯状工具により山形の平行沈線文を施す。内面はいずれも平滑である。胎土は纖維を含み、127は白色粒子が目立つ。色調は橙褐色、褐色を呈し、焼成はやや悪い。

b種(128, 130~136)。地文に縄文を持たないものである。施文具は半裁竹管である。コンパス文の特徴から、つぎのように分類できる。

- ①横へ長く、間延びした感を与えるもの(128, 130)。
- ②小刻みに施されるもの(131~133)。
- ③山形、ないしは波状を呈するもの(134~136)。
 - ①はコンパス文のみで文様が構成されている。128は口縁部破片であり、外面全面に施される。内面は良く磨かれている。130は胸部破片。内面に稜を持つ。色調は明褐色・暗灰色で、焼成はやや悪い。②は平行沈線文とともに文様が構成される。132は頭部で肩曲して内湾する口縁部にいたる深鉢である。頭部には細かな波状沈線文を巡らしている。133は胸部破片。色調は橙褐色で、焼成はやや悪い。③は連続爪形文、平行沈線文、山形文とともに文様が構成される。134, 135は口縁部で、同一個体である。136は胸部破片。色調は黒褐色で、焼成は悪い。
 - ①~③をとおし胎土には纖維を含んでおり、134~136は砂粒が目立つ。

第6類 口縁部に平行沈線文をもつもの(142~144, 146, 147)。施文具は櫛歯状工具である。円

形貼付文の有無により2種に分類できる。

a種(142~144)。円形貼付文を伴うものである。深鉢の口縁部から頸部にかけての破片であり、同一個体と思われる。波状口縁である。平行沈線文を横・斜位に施した上に、竹管による刺突の加わった円形貼付文を配して口縁部文様帯を構成している。143には円形刺突文も加わる。頸部以下は多段のループ文と単節羽状繩文を帯状に施す。胎土は纖維を含む。色調はくすぐんだ褐色で、焼成はやや悪い。

b種(146,147)。円形貼付文を伴わないもの。口縁部破片である。口唇部は内削ぎ状となる。口唇部に短沈線を縦位に施している。下位は多段のループ文と単節羽状繩文などで構成される地文に、平行沈線を山形に施している。

第7類 145のみである。胸部破片である。ワラビ手状に施された沈線文間を細かな刻みで充填し、円形貼付文を配している。胎土に纖維はわずかであり、白色粒子を含む。色調は明褐色。焼成は比較的良好く、固く焼締まる。

第8類 胸部に平行沈線文をもつもの(148~150)。施文具は櫛齒状工具であり、沈線は深く明瞭である。148は、三角形状の格子目文が施される。下位には地文として単節繩文が施される。内面は良く磨かれる。色調は暗褐色を呈する。149は曲線状、150は格子目状に施す。胎土はいずれも纖維、赤色スコリア・黒雲母・石英を含む。色調は概ね褐色で、焼成は比較的良好である。

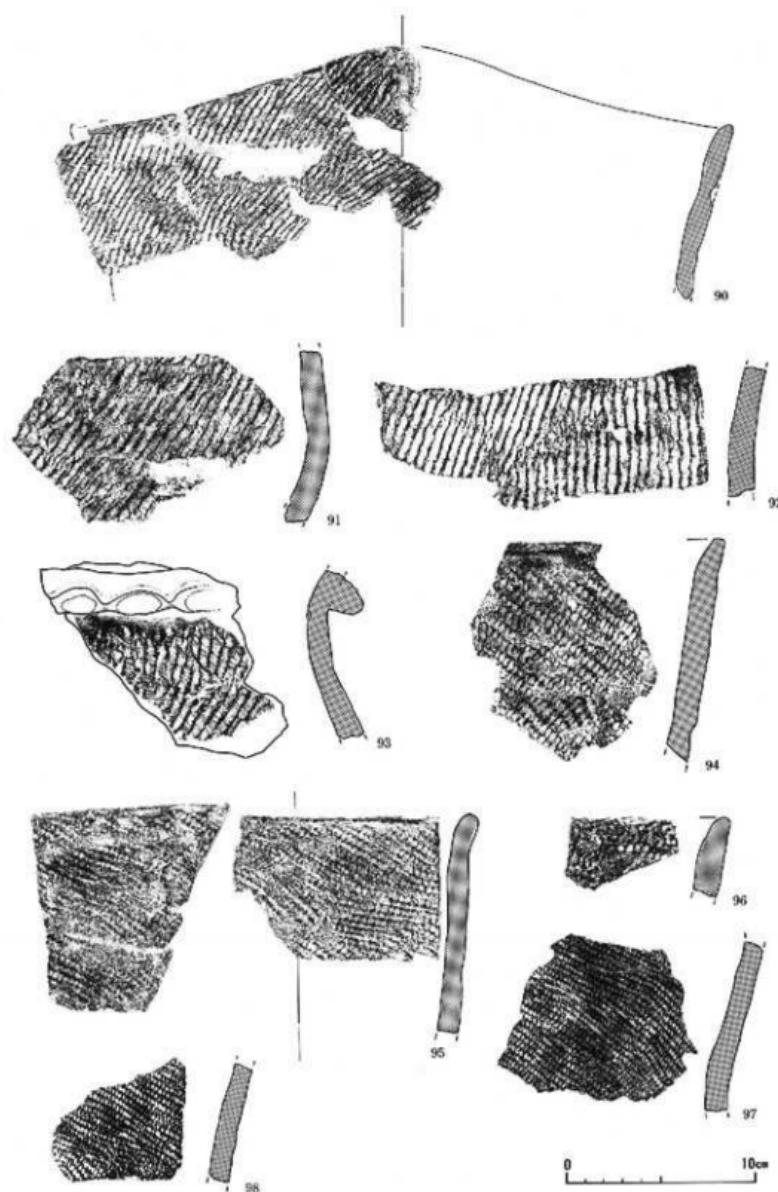
第9類 繩文地に平行沈線文を横位に施す(137~141)。137~139は口縁部で、文様等から同一個体と考えられる。口唇部は内削ぎ状である。無節繩文RとLによる羽状繩文を地文とし、平行沈線文を口唇部に施している。140,141は深鉢の頸部破片である。器厚は1.2cm~1.8cmと厚手である。胎土はいずれも纖維・砂粒を含む。色調は褐色ないし黒褐色を呈し、焼成はやや悪い。

第10類 刺突文・押引文が施されるものである(151~153)。

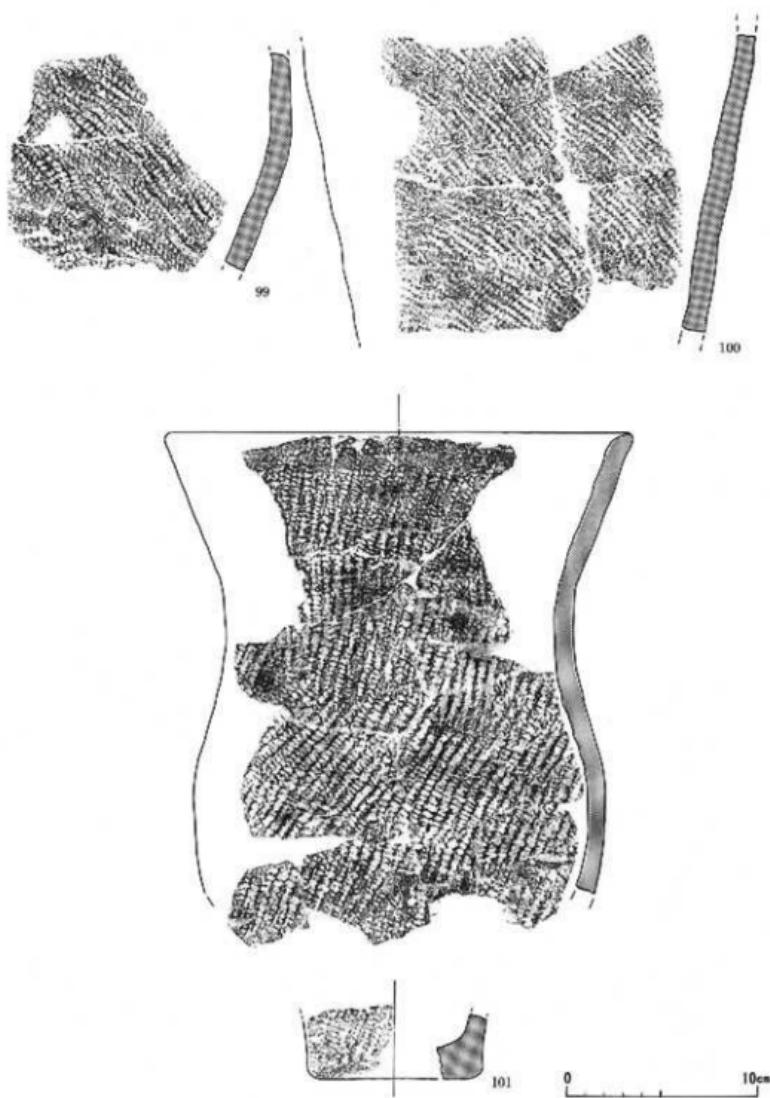
151は、頸部から大きく開く深鉢である。口唇部には小突起が付く。口縁部、頸部にそれぞれ半裁竹管による連続爪形文を巡らして文様帯を構成する。地文には吳条斜繩文を羽状に施している。内面は平滑である。色調は茶褐色で、焼成は悪い。152は大きく外反する波状口縁部の破片である。半裁竹管による押引きを横位、山形に連続して加えている。胎土は纖維、小砂・砂粒を含む。色調は暗褐色で、焼成はやや悪い。153は強く屈曲する頸部破片である。無節繩文Lを地文とし、頸部に棒状工具による刺突を横位5列にわたって加えている。胎土は纖維を含む。色調は純い褐色で、焼成はやや悪い。

第11類 無文の土器である(154)。外反気味に開く深鉢の口縁部。胎土は纖維、石英、砂粒を多く含む。色調は茶褐色、焼成はやや悪い。

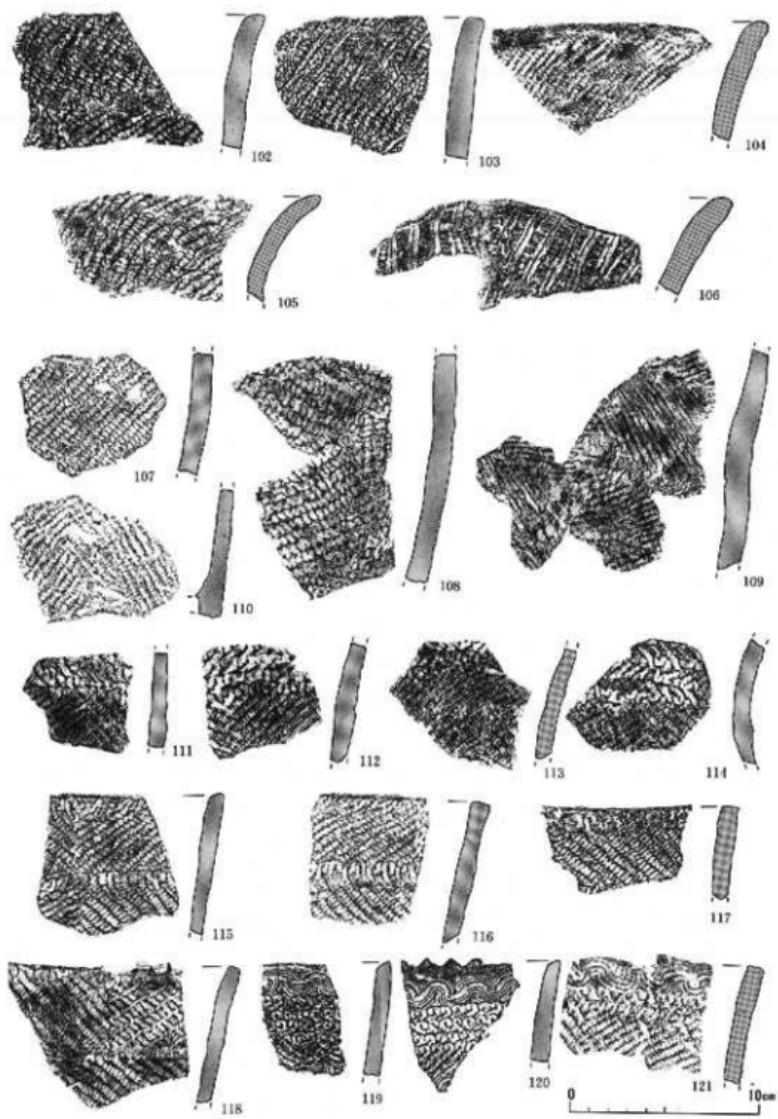
第12類 底部を…括した(155～157)。155,156は上げ底である。底径は155が⁵8.0cm、156が⁵9.0cmである。単節羽状繩文が外面全面に施され、155は底面にも単節繩文が疎らにみられる。胎土は纖維を多く含む。色調は鈍い褐色で、焼成はやや悪い。157は平底である。推定底径13.8cm。無節羽状繩文が施される。胎上は纖維が多く、脆い。色調は赤褐色、焼成は悪い。



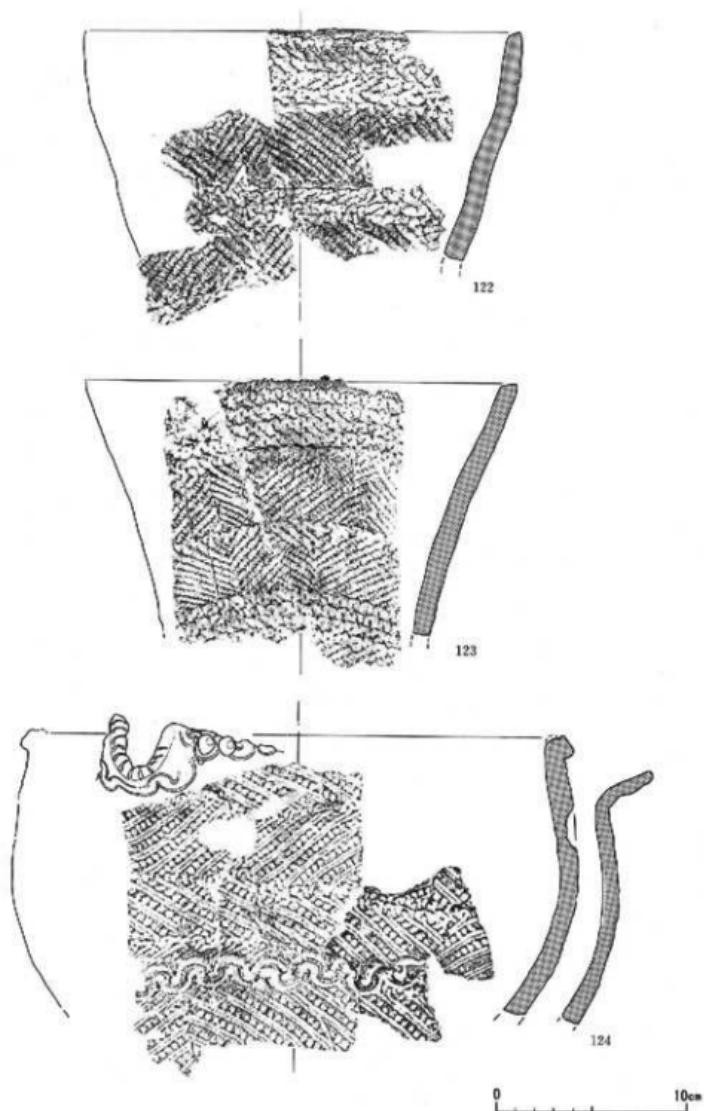
第17図 土器 8 (縄文時代前期前半)



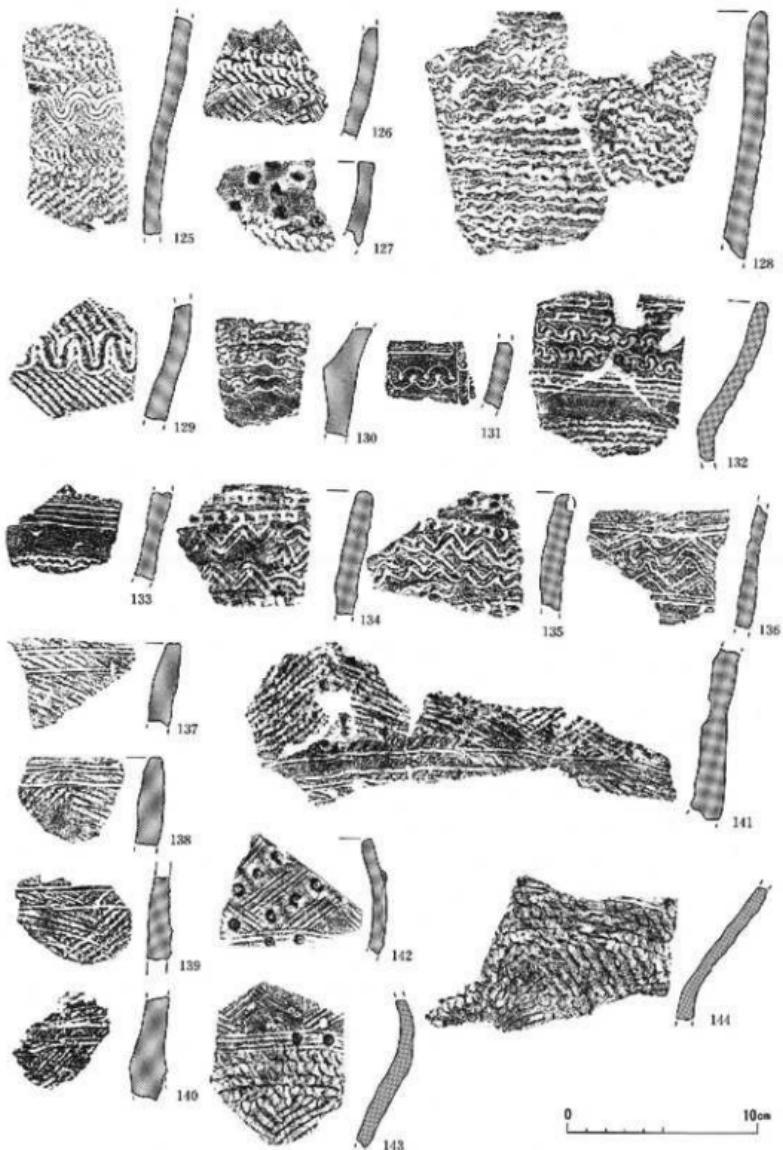
第18図 土器9(縄文時代前期前半)



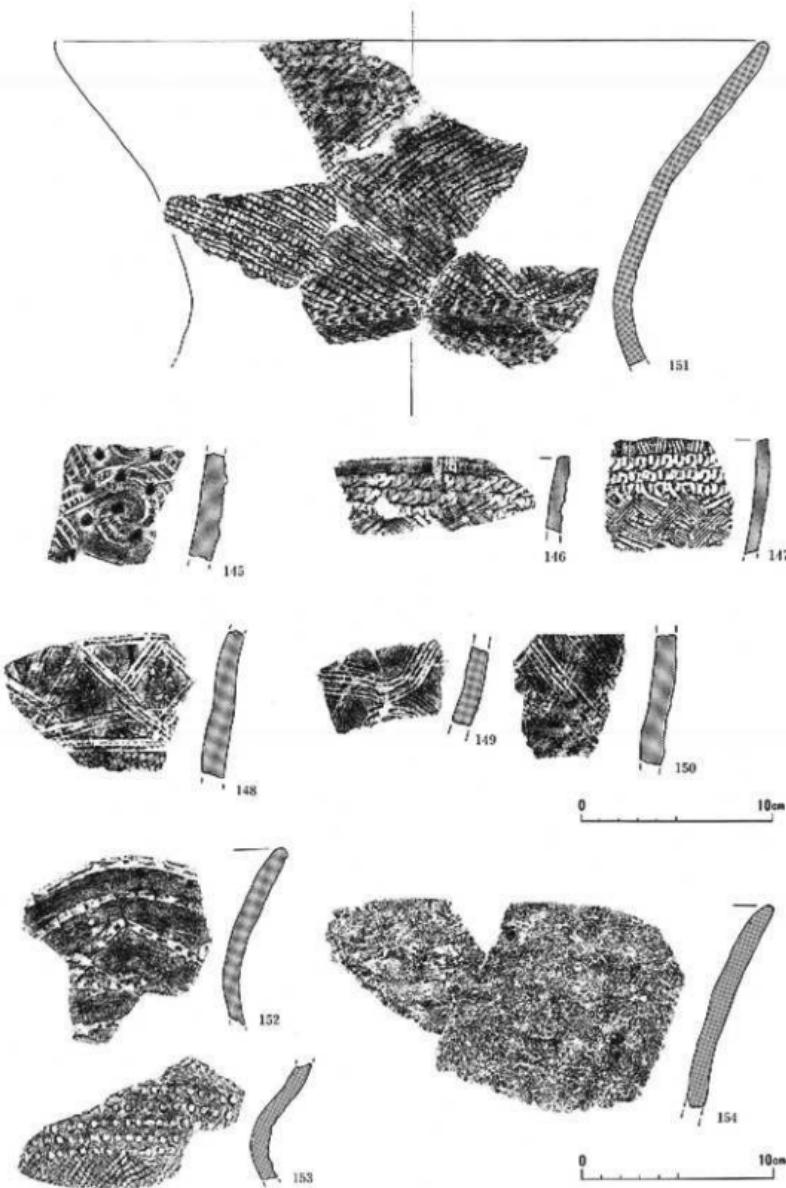
第19図 土器10(縄文時代前期前半)



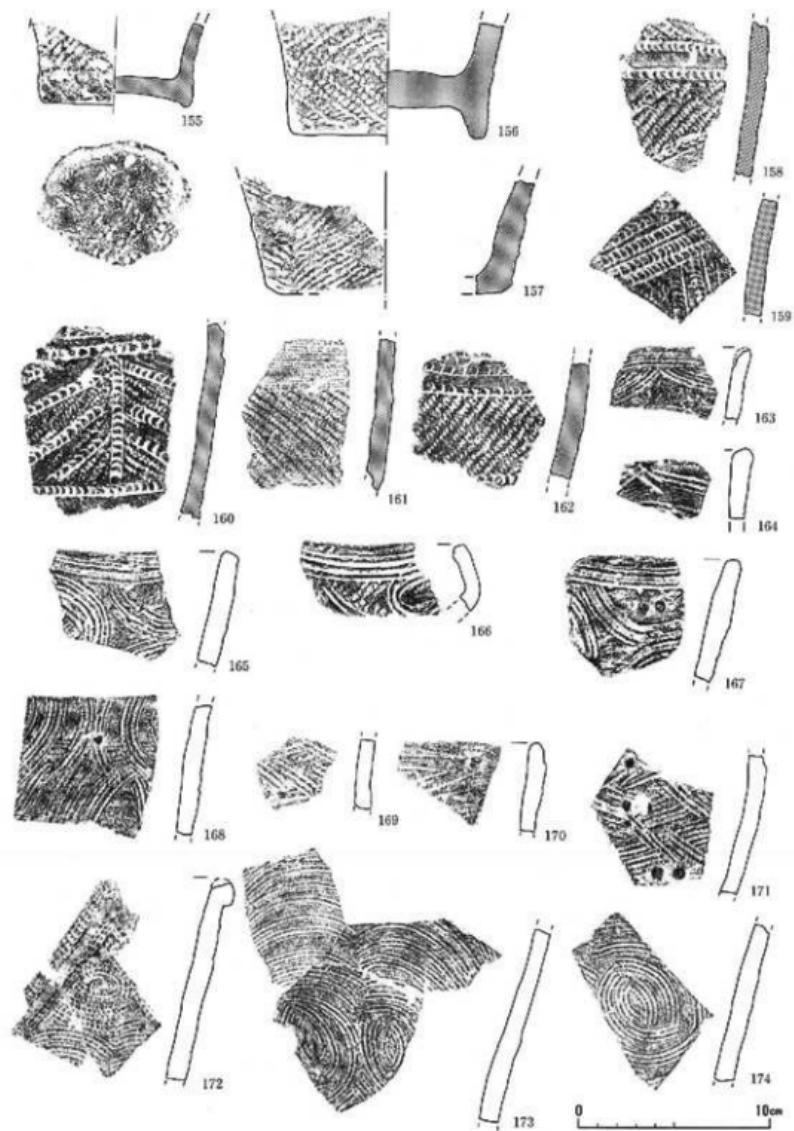
第20図 土器II(縄文時代前期前半)



第21図 土器12(縄文時代前期前半)



第22図 土器13(縄文時代前期前半)



第23図 土器14(縄文時代前期前半・後半)

第V群 前期後半の土器群を一括した(158~207)。(第23図~27図、図版16~18)。6群に分類できる。

第1類 半截竹管による連続爪形文を施すものである(158~162)。いずれも胴部破片である。

a種 連続爪形文を密に施すものである(158~160)。159は横、斜、縦位の平行沈線間を連続爪形文で充填し、竹管による円形刺突も加えられている。158,160は、平行沈線文が肋骨文様に配される。いずれも地文には単節繩文が施されているが不鮮明である。胎土は纖維、黒雲母、透明粒子、白色粒子を含み、器面はややざらつく。色調は鈍い褐色で、焼成はやや悪い。

b種 連続爪形文をa種に比べ疎らに施すものである(161,162)。横位の平行沈線文間を連続爪形文で充填する。地文は単節繩文。胎土は纖維、黒雲母、透明粒子を含む。色調は褐色、棕褐色で、焼成はやや悪い。

第2類 繩文地に平行沈線文を施すものである(166,181,182)。181、深鉢の頸部破片である。無節繩文しによる地文の上を、半截竹管による平行沈線文を横位、弧状に施す。胎土は金雲母、砂粒を含み、色調は褐色、ないし赤褐色、焼成は比較的良好である。182、胴上位で大きく開き、口縁部が直立気味となる深鉢である。波状口縁であり、波頂部にはボタン状突起を加える。文様は、口縁部と頸部に半截竹管による平行沈線文を横位に施している。地文は単節斜繩文である。胎土は金雲母を含み、色調は茶褐色、焼成は良好である。

第3類 無文地に平行沈線文を施すものである(163~165,167~171,184)。

a種 弧状の沈線文を施すもの(163~165,168)。口唇部は丸く、164は山形の突起が作られる。口唇部に横位の沈線文を施している。167には円形貼付文が加えられる。胎土は金雲母、白色粒子、砂粒等を含む。色調は褐色、黒褐色で、焼成は比較的良好。168、胴部破片である。弧線と横位の沈線文とが差しする。円形貼付文が加えられている。胎土は金雲母が目立つ。色調は棕褐色、焼成は比較的良好である。

b種 羽状の沈線文を施すもの(169~171)。直線的な沈線文を斜交させて、羽状の文様構成をしている。いずれも円形貼付文を持つ。170は内弯気味の口縁部で、口唇部には連続刺突文を加えている。胎土は金雲母、砂粒を含む。色調は褐色、暗褐色で、焼成は比較的良好。

c種 弧状と羽状の各沈線文が併存して施されたものである(184)。深鉢の胴上半部である。器形は、直線的に開く胴部から内弯気味に開く口縁部にいたる。内面には稜を有する。折返し口縁部に、つまみ状の突起を持つ。文様は、口唇部の結節沈線文、口縁部の円弧を描く集合沈線文、そして胴部の鋸齒状の集合沈線文とにより構成される。胎土は石英、砂粒を含む。色調は褐色ないし暗褐色を呈し、焼成は良好である。

第4類 結節沈線文を施すもの(172~180)。

172~176、同一個体。胴部から直線的に開く深鉢であり、口縁部は大きく波状を呈する。口

唇部は粘土帯の縁取りをもつ。文様は、波頂部を中心に左右対称で構成され、波頂部に結節沈線文、下部には平行沈線文をそれぞれ満巻状に密に施している。176は穿孔をもつ。胎土は金雲母、砂粒を含む。色調は褐色、黒褐色、焼成は比較的良好である。

177～180、平行沈線文上に結節沈線文を疎らに斜交させている。177、口縁部破片。口唇部外面には連続爪形文を施す。178～180、胴部破片。いずれも円形貼付文が加えられる。177、180の結節沈線文は結節部が浅く不鮮明なため、列点状となる。

第5類 183のみである。内折する口縁部に棒状の貼付文が多数施されている。地文は半裁竹管による沈線文であり、口縁部上位には結節浮線文を3条巡らしている。胎土は砂粒を含み、色調は橙褐色、焼成は良好である。

第6類 縄文のみ施されるもの(185～200)。多くの内面は器面調整時の撫でによる凹凸が見られ、胎土には金雲母が目立つものが多い。

a種 斜縄文のもの(185～190)。

a-1種 無節縄文(185, 186)。いずれも口縁部である。185は原体R、186は原体Lの縄文を施している。186の口唇部には無文地が残る。器厚は4～5mmと薄手である。胎土は金雲母、砂粒が目立つ。色調は暗褐色、赤褐色で、焼成は良好である。

a-2種 単節縄文(187～190)。いずれも胴部である。189は器厚が4～5mmと薄手であり、内面の凹凸は顕著である。胎土は188を除き、金雲母、砂粒を含む。色調は188が明褐色、他は黒褐色ないし赤褐色である。焼成はいずれも良好である。

b種 羽状縄文のもの(191～200)。

b-1種 無節縄文(194)。胴部である。無節縄文しが施される。胎土は金雲母、砂粒を含む。色調は鈍い褐色、焼成は良好である。

b-2種 単節縄文(191～193, 195～200)。原体LR, RLを施して、羽状を構成するものである。191～193は外反氣味に開く口縁部。いずれの器厚も3～6mmと薄手で、内面の凹凸は顕著である。胎土は概ね金雲母を含み、色調は赤褐色、焼成は良好である。

198、直線的に開く深鉢の胴部である。外面全面に縄文を施し、内面は胴下半部に条痕文状の擦痕が認められる。胎土は金雲母、砂粒を含む。色調は赤褐色、黒褐色を呈し、焼成は良好である。

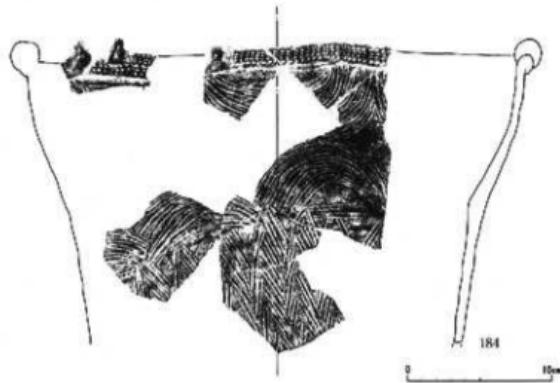
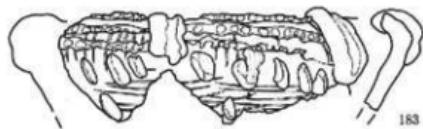
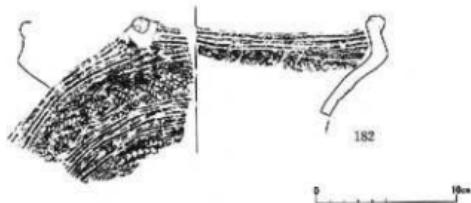
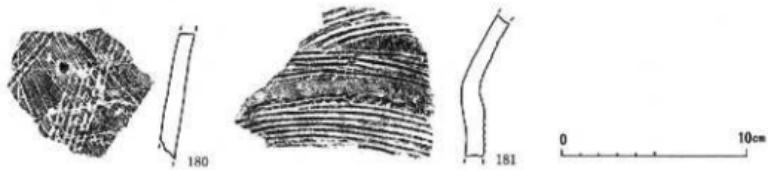
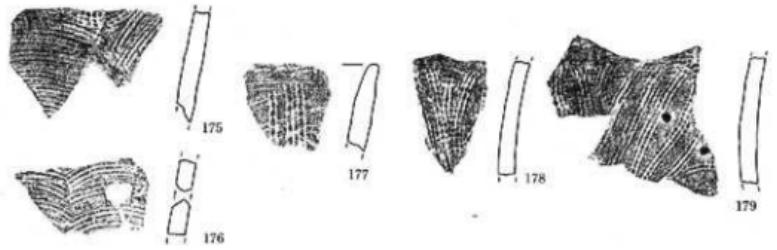
199, 200は同一個体と考えられる。直線的に開く深鉢の口縁部である。口唇部は内外面から粘土紙が貼付され、さらにボタン状粘土が加えられている。外面はさらに下位に波状を呈する粘土紙を配している。内面は平滑である。胎土は金雲母を含み、色調は暗褐色、焼成は良好である。

第7類 無文のもの(201～204)。同一個体と考えられる。口縁部が内齊氣味に開く深鉢形土

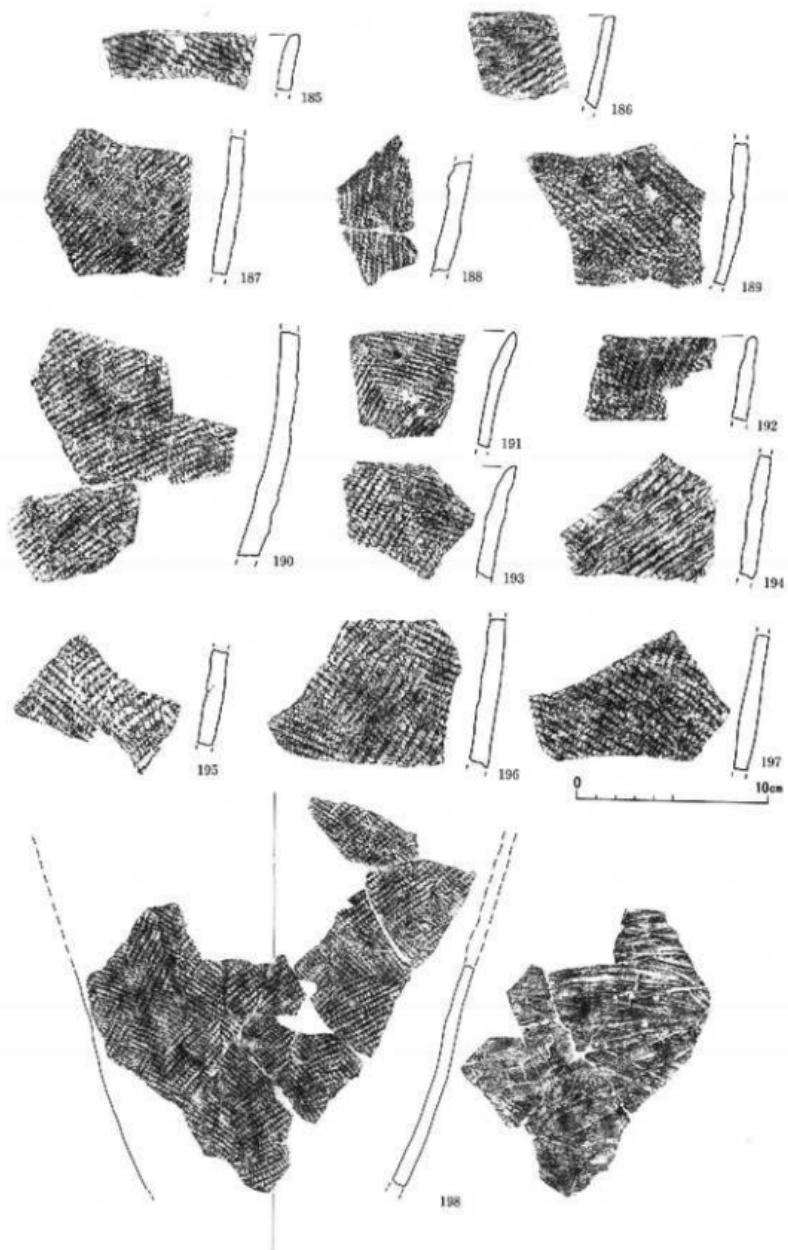
器である。外面は器面調整時の撫でにより、粘土が筋状に横走する。内面は平滑である。胎土は金雲母、砂粒が目立つ。色調は外面黒褐色、内面橙褐色を呈する。焼成は良好。

第8類 浅鉢形上器である(205)。平底から丸く立ち上がり、強く内折する肩部から直立する口縁部にいたる器形である。肩部上面には2個一対と考えられる穿孔が加えられる。沈線文が肩部下面、および底面の外周に各1条巡らされている。内面は良く磨かれ、胎土は金雲母、砂粒を含む。色調は鈍い褐色、ないし黒褐色を呈し、焼成は良好である。

第9類 底部を一括した(206,207)。いずれも平底であり、無節繩文が疎らに施される。胎土は砂粒を含み、207には金雲母が含まれる。色調は赤褐色(206)、褐色(207)で焼成は良好である。

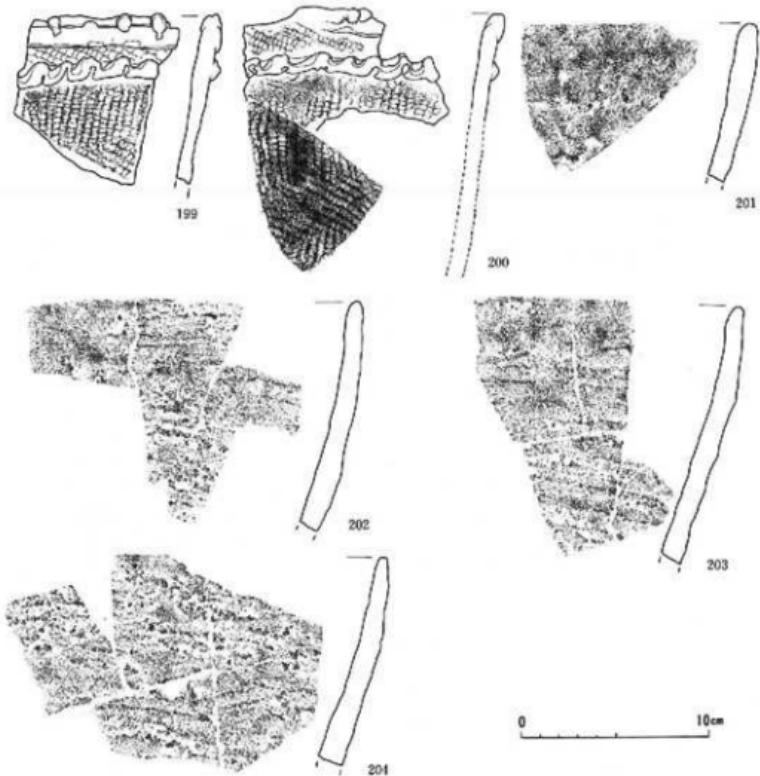


第24図 土器15(純文時代前期後半)

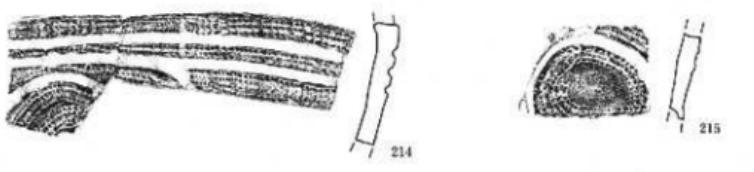
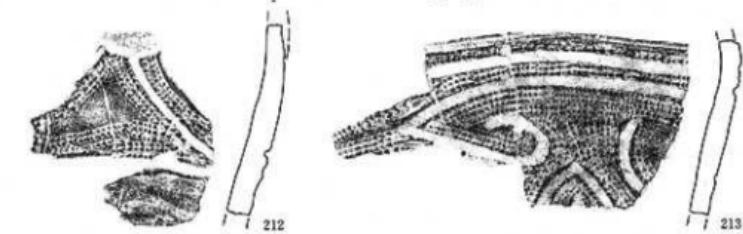
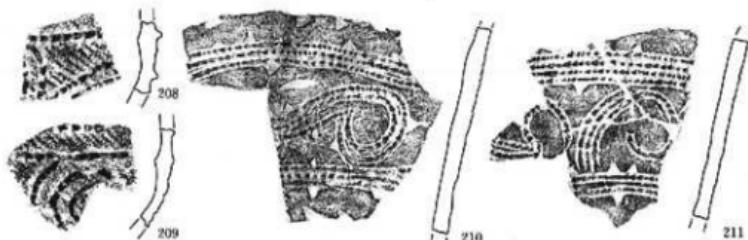


第25図 土器16(縄文時代前期後半)

0 10cm



第26図 土器17(縄文時代前期後半)



第27図 土器18(縄文時代前期末～中期初頭)

第VI群 前期末から中期初頭の土器群を一括した(208~216)。(第27図~28図、図版18)。2種に分類できる。

第1類 結節浮線文を施すものである(208, 209)。同一個体と考えられる。いずれも胴部破片であり、内面には稜を持つ。単節繩文地に横位、渦巻状の結節浮線文を施している。胎土は砂粒が多く、色調は赤褐色、ないし暗褐色、焼成は良好である。

第2類 結節沈線文を施すものである(210~216)。文様から2種に細分できる。

a種 三角刻印文を伴うものである(210, 211)。直線的に開く深鉢の胴部破片である。横位の結節沈線文により区画された中にワラビ手状の結節沈線文を配し、さらに三角刻印文を加えている。胎土は金雲母、砂粒を含み、色調は褐色、焼成は良好である。

b種 太沈線文が施されるものである(212~216)。212、胴部破片。文様は無文地に三角モチーフで構成される。213~215、同一個体と考えられる深鉢の胴部破片である。輪積みされたところできれいに割れている。文様は横位、鍵の手、木の葉状に配される。胎土は白色粒子、石英、砂粒を含む。色調は暗褐色、ないし黒褐色を呈し、焼成は良好である。216、口縁部が内折する深鉢胴上半部。文様は、口縁部で縱位、胴部では弧状に横走する形で構成される。また、各文様帯は結節沈線文の施された隆帯により区画される。胎土は金雲母、砂粒を含み、色調は赤褐色、焼成は良好である。

第VII群 中期前葉の土器群を一括した(217~221)。(第28図~29図、図版19)。

第1類 地文に繩文をもつもの(217)。口縁部で大きく開く深鉢の破片で、口唇部上面は平坦となる。単軸絆条体による木口状燃糸文を地文とする。口縁部には半裁竹管による横位・斜位の沈線文を施し、山形の平行沈線文により胴部文様帯と区切られる。胎土は石英、砂粒を含み、色調は赤褐色、ないし暗褐色、焼成は良好である。

第2類 地文に繩文を持たないもの(218~221)。218、胴上半部で大きく開き口縁部がS字状に立ち上がる深鉢である。文様は口縁部、胴上位、胴中位の3つの文様帯で構成され、それぞれは平行沈線文により区切られている。口唇部に連続爪形文、口縁部は浮線文様の平行沈線文を横位・波状に施す。胴部は集合沈線文を斜・縱位に施し、胴中位は縱方向の区画が設けられる。また、胴部には細沈線文が疎らに斜交している。胎土は金雲母が目立つ。色調は暗褐色、焼成は良好である。

219、深鉢である。220、口縁部。渦巻状の隆帯上に連続爪形文を施す。221、環状把手。つけ根には三角刻印文を巡らす。

第VIII群 中期後葉の土器群を一括した(222~228)。(第29図~30図、図版19)

第1類 口縁部に渦巻状文様をもつもの(222~225)。222は口縁部把手。224,225は同一個体。キャリバー形の深鉢である。渦巻状の隆帯と、地文の単節斜繩文で口縁部文様帯を構成する。頸部は無文である。胎土はいずれも砂粒を含み、色調は、鈍い褐色(222,223)、暗褐色(224,225)を呈する。焼成はいずれも良好である。

第2類 縦位の匂画文を持つもの(226~228)。

a種 条線文を地文とするもの(226,228)。228は口縁部。縦位の条線文を、幅広の沈線文と隆帯により匂画する。226は胸部。指頭による押捺の加わった丁字状の隆帯で匂画する。胎土はいずれも黒雲母、砂粒を含む。色調は褐色、暗褐色、焼成は良好である。

b種 繩文を地文とするもの(227)。口縁部。単節斜繩文を、幅広の沈線文により区画する。胎土は砂粒、赤色スコリアを含む。色調は鈍い褐色、焼成は良好である。

第IX群 後期の土器群を一括した(229~234)。(第30図, 図版20)。

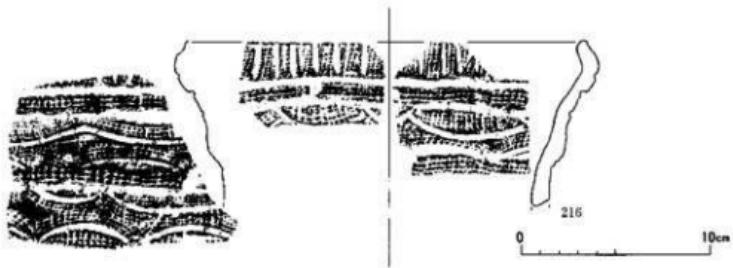
第1類 磨消繩文をもつもの(229,230)。内面から器壁を突く形で作られた瘤状突起を巡って、曲線的な幅広の沈線文が施される。この沈線文間に単節羽状繩文で充填する。器厚は5mmと薄い。胎土は砂粒を含む。色調は褐色で、焼成は比較的良好。

第2類 太沈線文をもつもの(231~234)。231は口縁部で、口唇部は内折する。口唇部に円形刺突文を8の字状に加え、これに続く沈線文を横位に施す。口縁部から胴上位は太沈線文により三角状のモチーフを描いている。沈線の彫りは深い。232、口縁部。横・斜位の太い沈線文を施す。胎土は砂粒が多い。色調は褐色、赤褐色で、焼成は良好である。233、口縁部。口唇部内外面に半裁竹管による文様を持つ。外面は、平行沈線文が浅く施され、内面は押引文と三角刻印文が施される。胎土は金雲母を含む。色調は暗褐色、赤褐色であり、焼成はいずれも良好である。

234、鉢形上器。器形は緩やかに開く胸部から小さく外反する口縁部にいたるものである。沈線による帶状区画が口縁部に巡らされ、区画の中に列点文が加えられる。胎土は砂粒をわずかに含む。色調は褐色、焦灰色である。焼成は良好である。

第X群 晩期の土器である(235)。(第30図, 図版20)。

胴部はやや偏平な球形を呈し、口縁部は外傾する。地文は単節斜繩文であり、胴上位に半裁状文を巡らす。赤彩が内外面の所々に残る。胎土は黄白色粒、砂粒を含む。色調は黒灰色で、焼成は良好である。



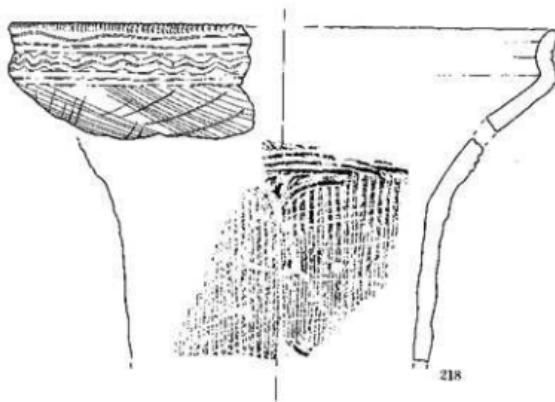
216

0

10cm



217

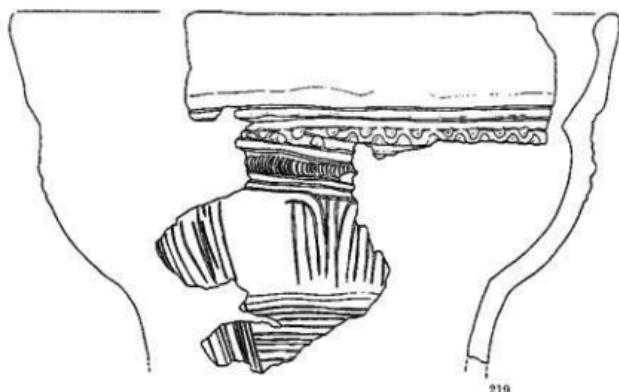


218

0

10cm

第28図 土器19(縄文時代中期前葉・後葉)



219



220



221



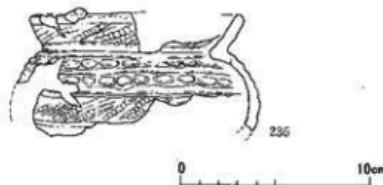
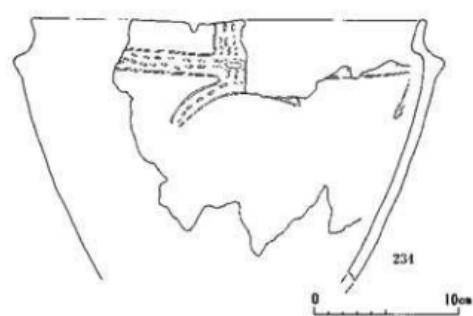
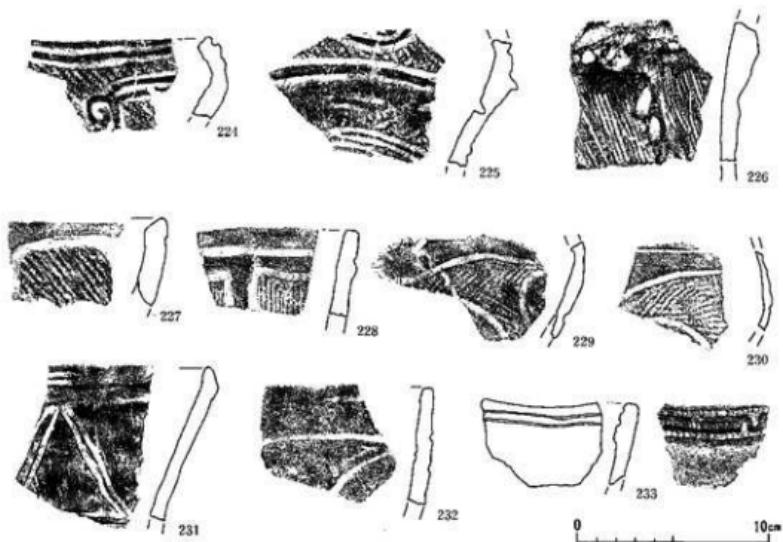
222



223

0 10cm

第29図 土器20(縄文時代中期前葉・後葉)



第30図 土器21(縄文時代後期・晩期)

イ 石器

石器203点を報告する。石鎌、凹石、磨石類が多く出土している。また、黒曜石、チャートの細かな剥片が805点出土している。

① 有舌尖頭器(1)。(第31図, 図版21)

柳葉形を呈し、先端部は欠損する。身部は1.3cmの厚みを持ち、先端部は平坦に仕上げられている。器軸方向の断面では、先端部に反りが認められる。石質は、凝灰質砂岩である。

② 石鎌(2~77)。(第32図~34図, 図版21)

76点中、有茎は2点のみで、他は全て無茎である。

基部の形態から、無茎のものは凹基・平基・円基に分けられる。基部に抉入のある凹基は56点、基部が比較的直線的な平基は17点、基部が丸みを持つ円基は1点である。有茎のものには、基部が突出し全体形が木葉形となるものがある。

石質はチャートが46点と最も多く、黒曜石24点、凝灰岩3

点、水晶2点となっている。破損の見られるものは44点であり、破損状況は、その部位から片脚を欠くもの17点、先端14点、先端と脚8点、両脚5点である。

③ 石匙(78~85)。(第34図~36図, 図版21)

9点である。つまみと刃部の関係から横型6点、斜型1点、縦型2点に分けられる。横型のうち、つまみが片方によっているのは4点であり、このうち78は、つまみに抉りが見られない。縦型のものは刃部形態が直線的なものと丸いものがある。粗雑な作りのものがあるが79、他は入念な剥離調整が行われている。

石質は、チャート6点、黒曜石3点である。

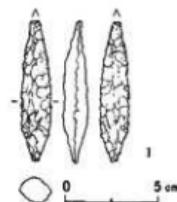
破損の見られるものは、ここでは図示しなかった1点のみ（刃部の両端欠損）であり、他は全て完形であった。

④ スクレイパー(102, 110, 113, 115, 116, 117)。(第37図~39図, 図版21)

6点である。刃部の形態は、いずれも直線的、もしくはわずかに外反するものである。いずれも、素材の一辺に両面から剥離調整を施しており、113が粗い調整の他は、細かい。110は対となる抉入部を持つ。石質は、チャート3点、黒曜石1点、凝灰岩2点である。

⑤ 石鎌(86~88)。(第36図, 図版21)

3点である。87・88の尖端部が両面加工により細かい剥離で造られるのに対し、86は大きく打ち欠いて突出した尖端部を造りだしている。石質はチャート2点、黒曜石1点である。



第31図 石器1(尖頭器)

⑥ 加工痕・使用痕のある剝片、石核(89~101, 103~109, 111, 112, 114, 118)。(第36図~39図, 図版21)

25点である。多量に出土した剝片、石核のうち加工痕、あるいは刃こぼれ等の使用痕が観察できるものを一括した。より詳細に観察すれば数はさらに多くなる可能性がある。

石質は、チャート11点、黒曜石10点で大半を占める他、水晶、凝灰岩がある。

⑦ 打製石斧(119~121)。(第40図, 図版22)

3点である。119・短冊形、120・ばち形、121・分銅形。120のみ片面加工されている。石質は細粒砂岩(ホルンフェルス)である。

⑧ 磨器(122~124)。(第40図~41図, 図版22)

3点である。片面からのみ加工を施したもの(122, 124)、両面から加工を施したもの(123)とがある。いずれも粗い剥離であり、細部の調整が認められない。

⑨ 凹石(125~218)。(第40図~53図, 図版22~23)

94点があり、石器組成の主体を占める。

石質は、泥質片岩が圧倒的に多い。

片面のみに凹みを残すもの39点、表裏両面に残すもの54点、左右側面を含め4面に残すもの1点であり、片面の破損したものを考慮すれば表裏両面に凹みのあるものが最も多い。

凹みの数は、1孔あるいは数孔認められる。凹みの位置は、器面のほぼ中央部に見られ、凹みが複数の場合は器面の長軸方向に並ぶものが大半である。しかし、縁辺部、あるいは縁辺部近くに凹みのあるものもあり、とくに大型の素材を用いている場合(215, 216, 218)に認められる。大半は、素材の自然面に孔をもつが、板状節理をもつ泥質片岩の中には、割れ口の平滑な面にも認められる。凹みの形状は、すり鉢状のものや、溝状、点状、浅く凹むものがあり、これらの中には点状打痕が集合した様相のものが認められる。

石器の形状は、棒状、板状、円形ないしは楕円形、不定形とあり、大きさも10cm以下の小型のものから、20cmを測る大型のものまで様々である。

凹石として分類した中には、磨面を持つものがあり、磨石との複合機能を果していたことが窺える。

⑩ 磨石類(219~279)。(第53図~60図, 図版24~25)

61点である。石材は、砂岩が最も多く用いられており、ほかに花崗岩、溶岩などがある。なお、凹石で多く用いられていた泥質片岩は4点のみであった。磨石は、形態からつぎの5つに分類できる。

A類 平面形が楕円形、もしくは隅丸長方形を呈するもので、総計34個である。石器の断面形からさらに3つに細分できる。

A-1類 断面が梢円形、もしくは円形で厚みを持つもの(219, 222~225, 227~232, 234, 238~240, 243)。

片面、あるいは両面に磨面を持つものが多い。敲打痕が片面、もしくは両面に見られるもの、端部に見られるものもある。

A-2類 断面が四辺形で厚みを持つもの(220, 221, 226, 233~237, 241, 242)。

片面、もしくは両面に比較的明瞭な磨面を持つ他、両側面にも明瞭な磨面を持つものが目立つ。とくに、一部が平坦になった磨面を持つもの(233)や、中央部が磨滅して凹んだもの(236)がある。

A-3類 断面が偏平なもの(248, 249)。

両面に平坦な磨面を持つ他、側面にも磨面が見られる。

B類 平面形が円形のもので2点である(252, 253)。

252, 253は直径3cm程度の小型で偏平なものである。252は、片面に明瞭な磨面を持ち、断面が反った形状になっている。253は、磨面が明瞭でなく、片側側面に4つの小さな抉入部を持つ。磨石としての分類は適当ではないかも知れないが、便宜的に本類に含めた。

C類 平面形が柱状のもので、断面形により2つに細分できる。

C-1類 断面四辺形のもの(258, 260, 267~274)。

2面以上の側面に明瞭な磨面を持つものには、いわゆる砥石がふくまれる。272は、その典型であろう。一方、側面よりも、石器端部の一方に明瞭な磨面を持つものがある(268, 269, 274)。

C-2類 断面円形のもので、全体に良く研磨されている。(277~279)。

D類 平面、もしくは断面形が三角形状で、明瞭な磨面を数面持つものである(256, 257, 259, 261~263)。

E類 球状のもので、良く研磨されている(275, 276)。

⑪ 石皿(280, 281)。(第60図, 図版25)

いずれも破片である。ここでは図示しなかった破片1点を含め、計3点の出土である。石質は、花崗岩、玄武岩質溶岩である。

⑫ 磨製石斧(282~286)。(第60図, 図版25)

乳棒状4点・定角式1点である。乳棒状は、斧身の中軸線から左右均整のとれた形態である。282は、大型石斧の破片である。284, 285は柄部を欠損する。286、ほぼ完形。定角式(283)は刃部のみ残存する。石質は緑色凝灰岩、チャートである。

番号	器種	出土区	層位	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	石質
1	尖頭器	L-15	IV	7.6	1.5	1.0	23.0	凝灰質砂岩
2	石 砕	L-13	IV	1.8	1.5	0.3	1.1	黒曜石
3	"	O-6	II	1.9	1.4	0.2	0.4	チャート
4	"	M-14	IV	1.4	1.3	0.2	0.3	黒曜石
5	"	不明		1.6	1.2	0.3	0.5	凝灰岩
6	"	N-10	II	1.9	1.7	0.4	0.8	チャート
7	"	O-7	II	2.5	1.5	0.3	1.1	"
8	"	K-13	IV	2.2	1.4	0.3	0.6	黒曜石
9	"	O-9	II	1.7	1.3	0.4	0.6	"
10	"	L-6	IV	2.2	1.2	0.3	0.8	チャート
11	"	N-12	IV	1.3	1.4	0.3	0.5	"
12	"	O-6	IV	1.7	1.4	0.5	0.8	"
13	"	O-10	IV	2.3	1.4	0.3	0.8	黒曜石
14	"	O-11	IV	1.4	0.9	0.2	0.2	"
15	"	N-11	IV	1.2	1.4	0.4	0.6	"
16	"	O-9	II	1.5	1.0	0.2	0.3	チャート
17	"	J-5	IV	1.4	1.1	0.3	0.4	黒曜石
18	"	N-11	II	1.9	1.5	0.3	0.7	"
19	"	N-7	IV	1.9	1.4	0.3	0.7	"
20	"	L-11	IV	2.8	1.6	0.3	1.0	チャート
21	"	N-6	IV	2.5	1.5	0.4	1.1	"
22	"	N-7	IV	1.7	1.3	0.3	0.6	黒曜石
23	"	O-6	IV	2.1	1.4	0.4	0.9	チャート
24	"	O-8	IV	3.2	2.1	0.3	1.4	"
25	"	O-7	IV	2.6	1.5	0.4	1.0	"
26	"	O-10	II	1.5	1.7	0.3	0.9	黒曜石
27	"	N-13	II	2.8	1.2	0.3	0.7	チャート
28	"	O-10	IV	2.7	1.6	0.6	1.6	"
29	"	M-9	IV	3.0	1.4	0.6	1.6	"
30	"	P-11	IV	2.6	2.2	0.3	1.4	"
31	"	M-9	IV	3.0	1.7	0.3	1.1	"
32	"	J-3	IV	2.6	1.6	0.5	1.1	"
33	"	不明		2.3	1.7	0.3	0.7	細粒凝灰岩
34	"	N-6	II	1.9	1.8	0.5	1.6	チャート
35	"	P-8	IV	1.5	1.2	0.3	0.4	"
36	"	O-13	IV	1.2	1.5	0.5	1.0	"
37	"	M-6	IV	1.9	1.5	0.5	0.9	"
38	"	O-8	IV	1.5	1.4	0.3	0.6	"
39	"	P-11	IV	1.8	1.3	0.2	0.5	"
40	"	M-9	IV	1.7	1.4	0.5	0.9	"
41	"	K-10	IV	1.9	1.3	0.3	0.7	"
42	"	K-6	IV	1.7	1.4	0.4	0.9	"
43	"	O-8	II	2.2	1.4	0.3	0.7	"
44	"	P-9	II	2.9	1.4	0.3	1.4	水晶
45	"	N-10	IV	2.0	1.4	0.4	0.9	チャート
46	"	P-7	II	2.4	1.6	0.4	1.5	"
47	"	N-14	II	1.5	1.5	0.5	0.9	"
48	"	O-10	IV	2.1	1.6	0.4	1.1	凝灰岩?

第1表 石器!

番号	器種	出土区	層位	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
49	石鍬	O-7	I	2.0	1.3	0.3	0.7	黒曜石
50	"	N-6	II	1.8	1.1	0.3	0.4	"
51	"	N-12	IV	1.8	1.6	0.2	0.7	"
52	"	5	IV	1.5	1.3	0.4	0.6	"
53	"	M-11	IV	1.8	1.2	0.4	0.8	チャート
54	"	K-12	IV	2.0	1.4	0.3	0.8	黒曜石
55	"	O-5	I	1.8	1.5	0.3	0.7	"
56	"	N-10	II	1.2	1.2	0.3	0.5	チャート
57	"	N-13	IV	1.6	1.2	0.3	0.6	"
58	"	N-11	II	2.0	1.3	0.5	0.9	"
59	"	L-9	IV	1.3	1.2	0.5		
60	"	L-13	IV	1.4	1.6	0.3	0.8	チャート
61	"	M-7	IV	2.2	1.0	0.4	0.4	"
62	"	P-10	IV	1.8	1.4	0.4	0.9	"
63	"	N-8	IV	1.6	1.3	0.2	0.5	黒曜石
64	"	N-13	IV	2.1	1.4	0.5	1.1	チャート
65	"	O-8	II	1.7	1.8	0.5	1.7	"
66	"	O-10	IV	2.2	1.8	0.8	2.8	"
67	"	M-13	IV	1.4	1.2	0.3	0.4	"
68	"	L-12	IV	1.6	1.6	0.5	0.7	黒曜石
69	"	M-8	IV	1.8	1.2	0.3	0.6	チャート
70	"	M-8	IV	2.0	1.5	0.4	0.9	黒曜石
71	"	O-9	II	2.0	1.9	0.4	1.3	チャート
72	"	N-8	IV	1.7	1.1	0.3	0.5	黒曜石
73	"	O-9	II	1.8	1.3	0.3	0.9	チャート
74	"	L-9	IV	2.0	1.2	0.5	1.2	黒曜石
75	"	L-10	IV	2.5	1.2	0.4	1.0	チャート
76	"	N-6	IV	2.0	1.4	0.4	1.0	黒曜石
77	"	N-8	II	1.6	2.0	0.5	2.1	水晶
78	石匙			4.1	5.2	0.9	12.1	黒曜石
79	"	O-6	II	3.0	3.5	0.5	5.9	チャート
80	"	N-14	IV	2.6	3.8	0.6	7.2	"
81	"	N-4	IV	4.1	5.1	0.7	15.5	"
82	"	M-11	IV	3.0	5.2	0.9	10.9	黒曜石
83	"			7.6	5.8	1.0	47.5	チャート
84	"	C-12		5.7	2.3	0.6	11.9	黒曜石
85	"	N-9	IV	6.6	3.4	0.8	21.3	チャート
86	石錐	P-12	II	4.1	3.7	1.2	12.6	"
87	"	O-8	IV	3.3	1.6	1.1	5.7	"
88	"	P-11	II	2.2	1.9	0.6	1.7	黒曜石
89	刮片	O-12	IV	2.2	1.2	0.3	0.8	"
90	"	N-5	IV	1.7	2.2	0.8	3.2	"
91	"	P-12	IV	2.7	1.5	0.3	1.4	"
92	"	M-12	IV	3.0	1.2	0.3	1.2	"
93	"	O-9	IV	2.1	2.5	0.5	2.4	チャート
94	"	N-9	IV	2.0	2.4	0.7	3.3	黒曜石
95	"	N-8	IV	3.0	2.5	0.5	4.6	"
96	"	O-12	IV	2.3	2.4	0.5	2.8	"

第2表 石器2

番号	器種	出土区	層位	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
97	剥片	O-10	IV	2.4	1.4	0.7	2.1	水晶
98	"	M-7	IV	3.0	1.5	0.4	2.2	墨輝石
99	"	N-13	IV	3.4	1.3	0.7	3.1	"
100	"	N-10	IV	3.2	2.2	1.1	9.4	チャート
101	"	M-6	IV	4.2	1.6	0.4	4.2	"
102	スクレイバー	O-6	IV	3.1	1.7	0.7	5.4	墨輝石
103	剥片	M-13	IV	3.8	2.1	0.9	9.9	チャート
104	"	L-13	IV	3.8	4.8	1.2	19.5	朴質砂岩
105	"	N-10	IV	4.5	2.1	1.5	14.3	墨輝石?
106	"	L-9	IV	4.8	5.9	1.5	52.4	凝灰岩?
107	"	O-9	IV	4.2	2.6	0.5	5.9	チャート
108	"	N-9	IV	4.0	2.8	1.1	8.8	"
109	"	N-12	IV	5.2	2.5	0.8	19.1	"
110	スクレイバー	L-6	IV	3.1	3.6	0.6	9.4	"
111	剥片	N-13	IV	4.6	3.2	0.7	14.8	"
112	"	N-13	IV	4.0	3.4	1.0	12.6	"
113	スクレイバー	O-12	IV	4.5	4.5	1.1	30.0	桂賀隕灰岩
114	剥片	N-9	II	4.3	3.0	1.9	17.8	チャート
115	スクレイバー	O-9	IV	4.6	2.8	0.9	25.0	"
116	"	M-12	IV	5.5	3.2	0.9	11.7	凝灰岩
117	"	N-5	II	4.9	3.5	1.4	20.5	チャート
118	剥片	M-8	IV	4.6	4.2	1.1	30.0	"
119	打製石斧	O-5	II	10.8	4.7	1.1	6.0	網粒砂岩(ホルンフェルス)
120	"	O-12	IV	11.5	7.0	2.9	290.0	玄武岩?
121	"	L-12	IV	12.0	9.0	3.1	500.0	網粒砂岩(ホルンフェルス)
122	礫石	O-6	IV	10.3	6.5	2.2	200.0	
123	"	O-7	IV	9.2	7.0	2.5	240.0	頁岩
124	"	M-11	IV	8.4	8.2	5.8	590.0	
125	凹形	M-7	IV	12.1	3.7	2.4	146.0	泥質片岩
126	"	O-10	IV	11.6	4.9	2.1	160.0	"
127	"	N-14	IV	10.0	5.3	3.4	295.0	"
128	"	N-14	IV	10.0	5.3	3.4	295.0	"
129	"	O-6	IV	9.2	5.8	4.1	290.0	"
130	"	O-9	IV	6.7	6.5	2.8	140.0	"
131	"	M-9	IV	7.5	7.8	3.4	313.0	"
132	"	N-9	IV	9.3	4.2	3.4	240.0	"
133	"	N-9	IV	11.3	6.7	2.2	270.0	"
134	"	L-9	IV	6.8	7.0	2.3	130.0	"
135	"	O-12	IV	12.0	7.1	4.3	460.0	"
136	"	O-11	IV	6.9	6.2	3.9	200.0	"
137	"	N-8	IV	8.0	7.0	3.4	210.0	溶岩
138	"	L-10	IV	9.5	7.8	3.5	400.0	砂岩
139	"	O-10	IV	7.2	4.1	2.5	0.10	泥質片岩
140	"	N-10	IV	7.0	5.4	3.4	0.20	"
141	"	N-10	IV	8.6	4.9	3.0	0.20	"
142	"	O-9	IV	8.8	4.6	3.1	0.20	"
143	"	N-10	IV	9.8	3.8	3.8	0.20	"
144	"	O-10	IV	9.8	6.0	2.2	0.20	"

第3表 石器3

番号	器種	出土区	層位	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
145	圓石	O-9	N	8.6	5.8	3.2	0.20	泥質片岩
146	"	N-9	N	8.5	7.4	2.1	0.20	"
147	"	P-12	N	5.5	6.0	4.4	0.30	"
148	"	P-10	N	8.8	7.0	1.5	0.10	"
149	"	P-9	H	16.1	5.0	2.1	170.0	"
150	"	M-14	N	14.0	5.7	3.7	340.0	"
151	"	O-6	N	15.4	5.2	2.4	310.0	泥質片岩
152	"	O-6	N	16.5	6.8	3.8	530.0	"
153	"	N-12	N	14.7	5.8	3.0	440.0	"
154	"	N-14	N	11.2	5.7	4.0	310.0	"
155	"	O-10	N	10.7	6.8	3.4	0.35	"
156	"	O-10	"	8.8	7.2	3.2	0.30	"
157	"	O-10	N	10.6	8.2	3.6	0.40	"
158	"	N-10	N	10.4	7.3	4.3	0.50	"
159	"	N-5	N	8.5	6.4	2.6	0.25	"
160	"	N-8	N	12.3	9.85	3.7	0.70	"
161	"	O-11	N	10.6	5.2	2.3	0.20	"
162	"	P-10	N	11.1	4.8	3.8	0.25	砂岩
163	"	O-9	N	12.6	4.9	3.3	0.30	泥質片岩
164	"	O-10	N	14.7	4.8	2.8	0.30	"
165	"	O-10	N	15.3	4.9	3.3	0.25	"
166	"	P-9	N	11.6	5.7	1.5	0.20	"
167	"	N-13	N	12.6	6.5	2.0	0.25	"
168	"	O-6	N	11.1	8.0	3.3	0.40	"
169	"	N-10	N	12.3	7.2	5.2	640.0	"
170	"	N-6	N	15.5	4.5	1.9	220.0	"
171	"	N-13	N	16.9	7.4	3.5	490.0	"
172	"	N-6	N	14.0	4.4	3.4	345.0	"
173	"	N-9	N	11.8	8.0	2.0	245.0	"
174	"	L-11	N	11.3	6.0	3.1	313.0	"
175	"	P-9	N	11.3	9.0	4.8	730.0	"
176	"	M-4	N	12.6	5.7	3.4	320.0	"
177	"	P-12	N	13.4	8.4	2.1	260.0	"
178	"	N-9	N	16.0	8.3	3.5	600.0	"
179	"	N-6	N	13.4	8.8	3.1	490.0	"
180	"	N-6	N	12.5	6.0	3.9	425.0	"
181	"	L-10	N	9.2	6.0	4.1	350.0	"
182	"	P-10	N	10.5	5.2	2.8	195.0	"
183	"	O-10	N	10.2	6.7	4.2	350.0	"
184	"	M-12	N	10.2	5.8	3.9	290.0	"
185	"	M-8	N	9.4	5.2	3.9	311.0	"
186	"	N-13	N	9.7	7.1	2.9	220.0	"
187	"	N-7	N	10.7	8.6	3.7	0.50	"
188	"	M-5	N	9.8	8.7	3.3	0.40	"
189	"	M-10	N	9.5	4.2	3.0	0.20	"
190	"	N-13	H	11.0	3.3	3.5	0.20	"
191	"	N-10	"	12.6	5.0	3.6	0.35	"
192	"	O-11	N	11.7	5.0	2.4	0.20	"

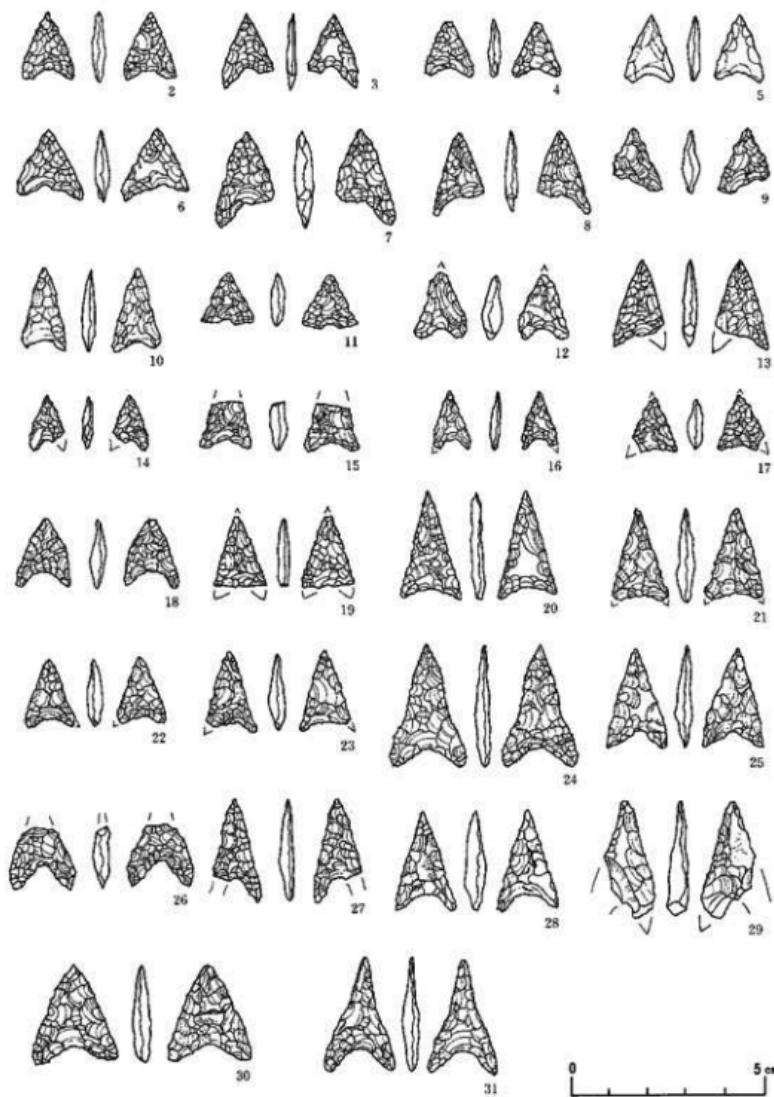
第4表 石器4

番号	岩種	出土区	層位	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
193	砂岩	N-9	IV	12.7	5.5	3.4	0.30	砂岩
194	"			6.8	8.3	3.7	0.30	泥質片岩
195	"	N-5	IV	7.8	6.3	3.7	0.30	"
196	"	N-5	IV	10.4	6.5	3.1	0.30	砂岩
197	"	O-6	IV	8.6	4.4	1.9	0.10	泥質片岩
198	"	N-5	IV	8.5	7.1	3.1	0.30	"
199	"	O-6	IV	10.0	5.5	2.7	0.20	"
200	"	O-10	IV	6.6	5.5	1.7	0.10	"
201	"	O-8	IV	9.8	7.8	3.5	0.35	"
202	"	O-12	IV	7.3	8.3	5.8	0.40	"
203	"	O-10	II	10.7	5.5	3.1	0.30	"
204	"	N-9	IV	11.3	8.4	4.1	0.40	"
205	"	O-10	IV	11.6	9.0	2.4	0.40	"
206	"	J-13	IV	12.0	9.0	3.4	0.50	"
207	"	M-10	IV	14.4	9.9	4.4	0.55	"
208	"	P-11		12.6	9.8	2.5	0.30	"
209	"	N-13	II-N	11.5	10.0	3.8	0.55	"
210	"	O-11	IV	14.2	11.9	3.1	0.70	"
211	"	O-5	IV	9.9	6.0	3.1	0.30	砂岩
212	"	N-4	II	14.0	5.5	3.0	0.30	泥質片岩
213	"			10.6	5.7	5.4	0.40	"
214	"	M-2	IV	19.8	6.8	3.7	0.60	"
215	"	N-12	IV	25.1	7.3	3.5	0.70	"
216	"	M-8	IV	22.0	11.2	6.7	199.0	"
217	"	P-10	IV	11.9	9.1	4.6	780.0	"
218	"	O-12	IV	16.8	14.9	7.5	2.30	"
219	燧石類	N-9	IV	10.7	8.0	3.8	520.0	円礫岩
220	"	N-9	IV	9.0	6.9	5.9	550.0	
221	"	O-9	IV	6.9	8.0	4.8	400.0	溶岩
222	"	N-9	IV	7.5	7.3	5.1	350.0	砂岩
223	"	O-8	IV	7.8	7.2	6.7	550.0	溶岩
224	"	L-8	IV	6.7	6.5	4.5	275.0	ヒン岩
225	"	N-9	IV	8.6	7.2	3.3	350.0	花崗岩
226	"	N-6	IV	10.4	7.7	3.8	540.0	"
227	"	L-14	IV	8.9	7.3	4.8	390.0	砂岩
228	"	N-10	IV	10.8	6.9	5.4	540.0	溶岩
229	"	N-8	II	9.2	7.3	4.3	460.0	細粒砂岩
230	"	M-13	IV	6.9	8.0	4.1	300.0	ヒン岩?
231	"	M-6	IV	8.0	7.7	6.3	540.0	円礫岩
232	"	M-4	IV	9.0	8.2	7.5	670.0	円礫岩?
233	"	N-5	IV	12.0	5.0	2.4	210.0	凝灰質砂岩
234	"	M-12	IV	9.9	5.3	4.5	410.0	溶岩
235	"	K-13	IV	12.0	5.8	4.9	620.0	細粒砂岩
236	"	M-6	IV	12.3	6.3	3.2	390.0	"
237	"	N-5	IV	11.0	6.2	3.3	450.0	細粒花崗セン練岩
238	"	N-9	IV	11.6	7.9	3.8	610.0	砂岩
239	"	M-12	IV	11.6	8.2	5.8	905.0	"
240	"	J-15	IV	4.3	8.2	4.7	0.2	花崗岩

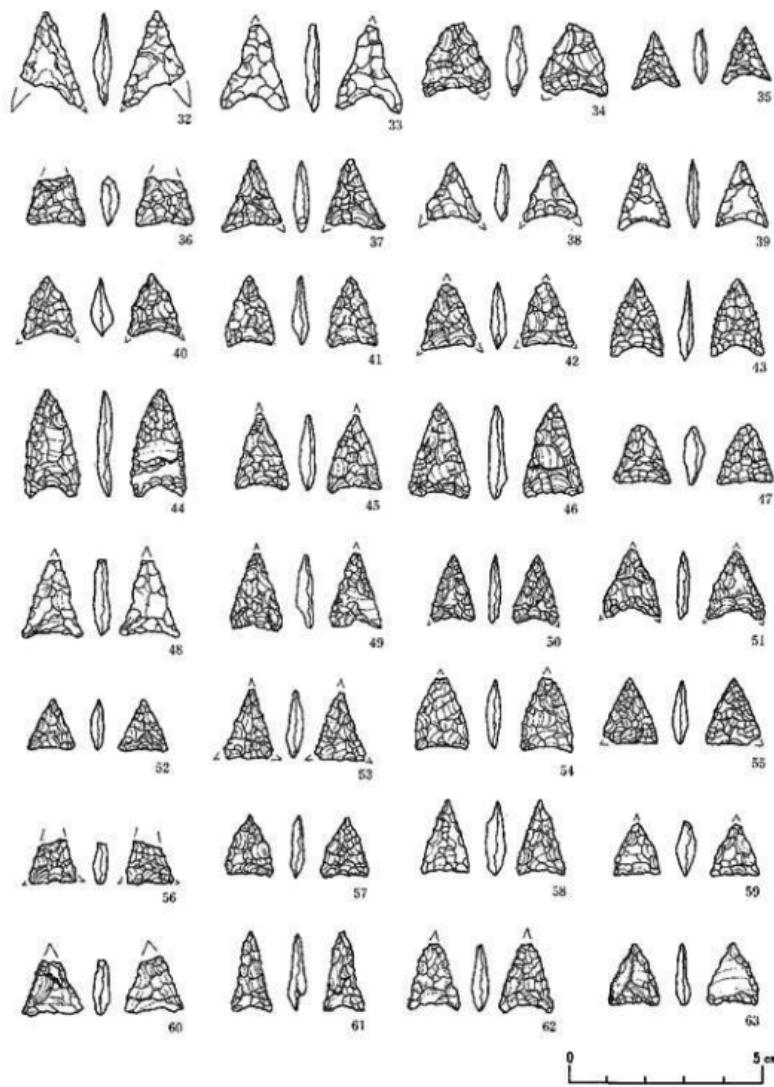
第5表 石器5

番号	器種	出土区	層位	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
241	磨心類	O-9	N	7.2	10.8	4.9	0.6	花崗岩
242.	"	O-12	N	6.7	5.8	3.2	0.2	"
243	"	P-7	N	11.6	8.7	3.8	0.55	泥質片岩
244	"			11.0	7.6	6.0	0.60	泥質
245	"			5.7	2.5	2.1	0.03	砂岩
246	"	N-7	N	6.9	2.6	2.1	0.1	"
247	"	O-13	N-N	9.0	3.8	4.3	0.2	花崗岩?
248	"			8.2	3.5	1.1	0.06	粘板岩
249	"	N-5	N	10.1	5.5	1.4	0.1	
250	"	N-6	N	13.3	4.8	1.5	0.15	砂岩
251	"	O-9	N	6.3	3.4	1.7	0.1	
252	"			4.1	3.7	1.8	0.03	砂岩?
253	"	N-9	N	4.0	4.4	1.1	0.03	
254	"	N-6	N	16.1	8.7	5.1	101.0	泥質片岩
255	"	P-9	N	15.8	8.5	6.7	116.0	細粒砂岩
256	"	O-6	N	8.2	6.8	4.3	345.0	
257	"	N-8	N	10.3	5.5	4.8	350.0	砂岩
258	"	O-10	N	14.8	4.9	4.2	450.0	"
259	"	O-7	N	9.2	9.0	4.0	460.0	"
260	"	N-9	H	13.3	3.7	2.4	220.0	
261	"	O-5	N	7.5	5.4	4.0	0.25	砂岩
262	"	C-10	N	7.8	6.3	3.5	0.2	
263	"	N-12	N	10.0	6.4	3.8	0.3	
264	"	P-9	N	9.5	6.2	3.2	0.35	
265	"	O-10	N	10.1	5.9	3.8	0.4	砂岩
266	"	P-11	N	6.4	4.9	3.4	0.2	"
267	"	P-9	N	13.3	4.3	3.3	0.3	不明
268	"	N-10	N	13.6	4.7	3.7	0.3	砂岩
269	"	N-11	N	13.6	5.8	3.7	0.3	
270	"	O-6	N	12.9	4.3	3.8	0.3	
271	"	O-9	N	9.2	4.8	3.9	0.25	
272	"	O-12	N	15.1	4.6	3.9	495.0	砂岩
273	"	N-5	N	17.4	6.6	5.8	0.9	泥質片岩
274	"	O-7	H	25.5	8.4	4.2	1.4	"
275	"	M-8	N		4.2	3.4	60.0	凝灰岩?
276	"			4.2	3.6	2.1	0.04	
277	"	N-9	N	8.9	4.0	2.5	160.0	
278	"	P-11	N	11.0	3.2	3.2	210.0	砂岩
279	"	O-9	N	13.2	4.1	3.5	370.0	凝灰岩
280	石皿	M-14	N	6.3	8.9	5.1	400.0	
281	"	O-10	N	12.0	12.6	6.9	161.0	花崗岩
282	研製石斧	P-11	N	10.8	6.8	8.6	360.0	綠色凝灰岩
283	"	P-11	H	3.5	3.9	1.2	0.02	チャート
284	"	O-10	N	12.5	4.0	2.9	250.0	綠色凝灰岩
285	"	O-10	N	16.6	4.8	3.1	400.0	"
286	"	O-11	N	20.2	6.0	3.6	650.0	"

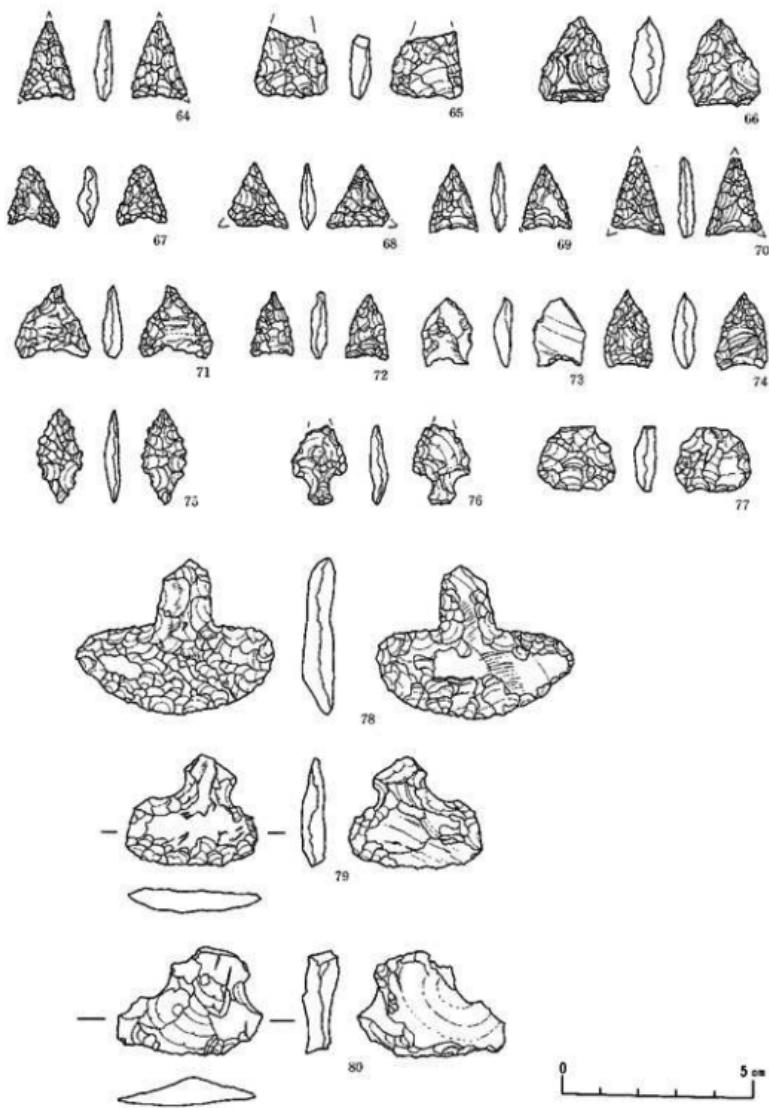
第6表 石器6



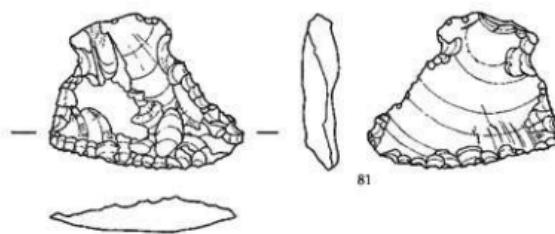
第32図 石器2(石錐)



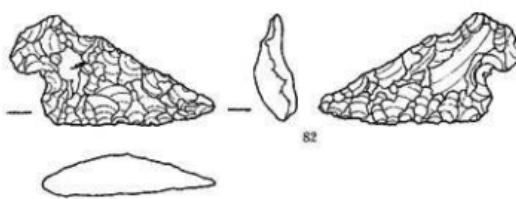
第33図 石器3(石鏃)



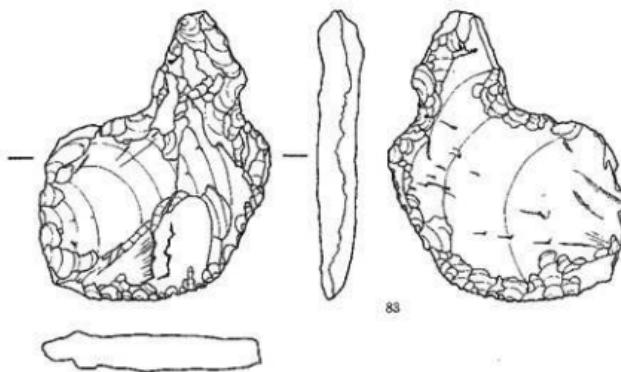
第34図 石器4(石錐,石匙)



81



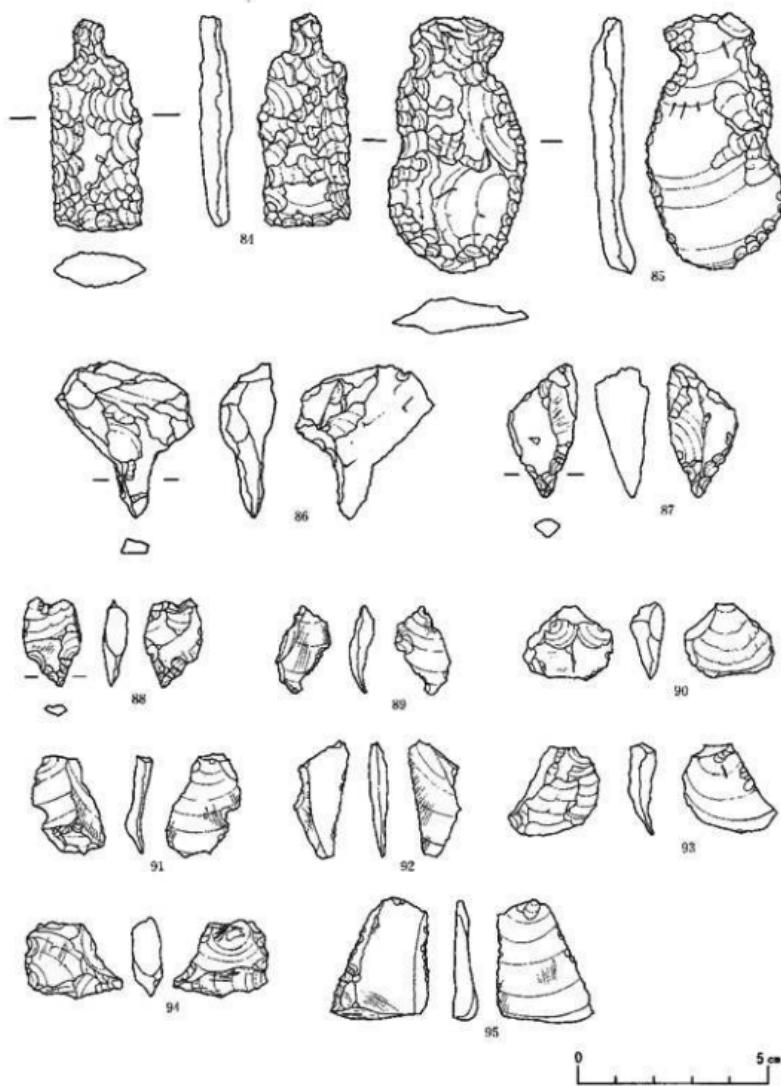
82



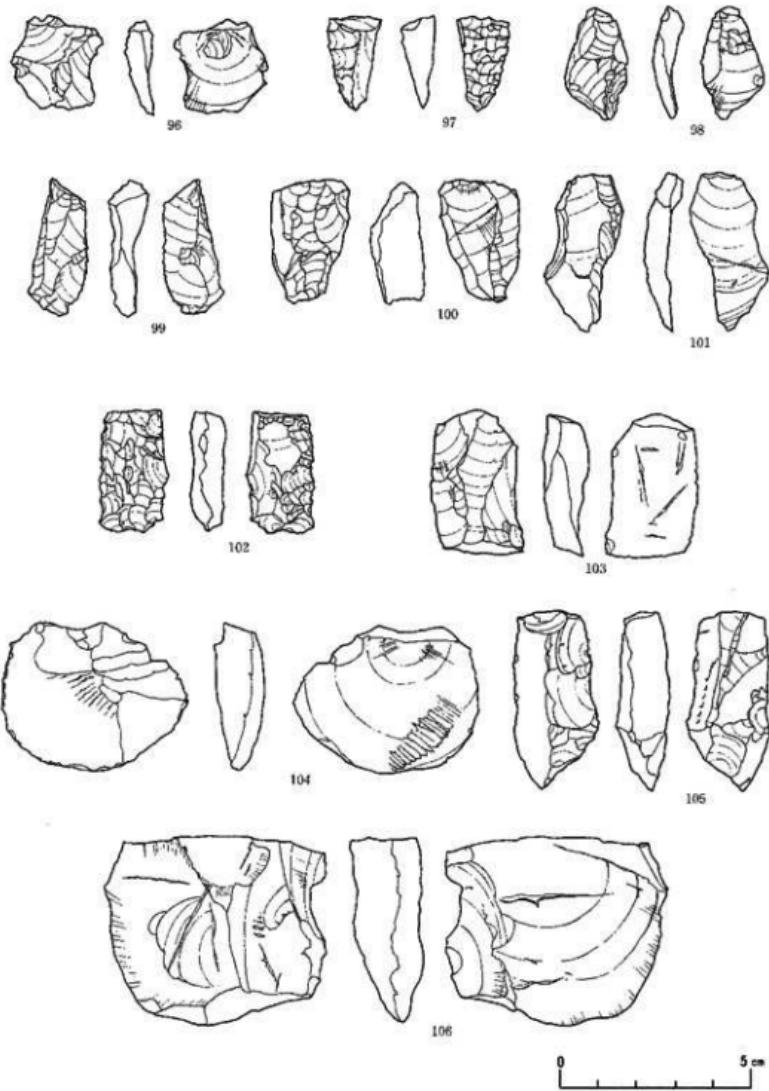
83



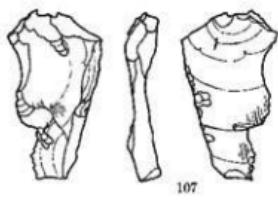
第35図 石器5(石匙)



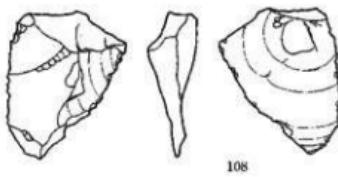
第36図 石器 6 (石匙, 石錐, 刃片)



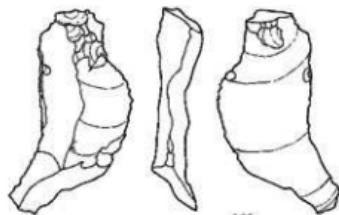
第37図 石器7(刮片, スクレイパー)



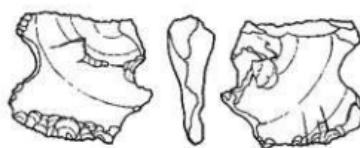
107



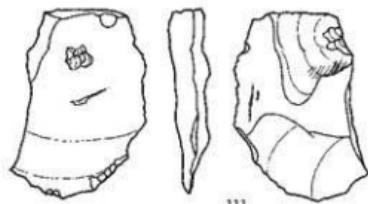
108



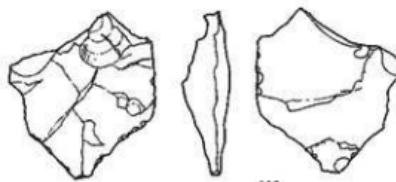
109



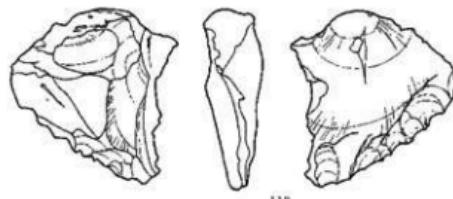
110



111



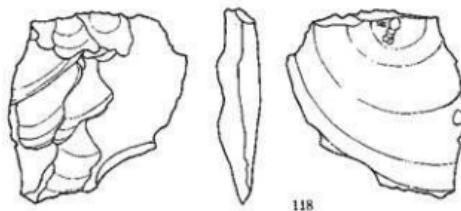
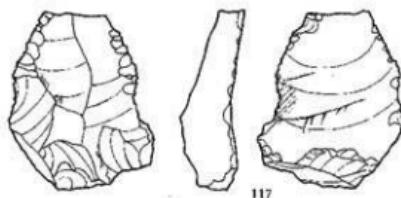
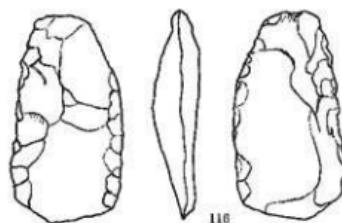
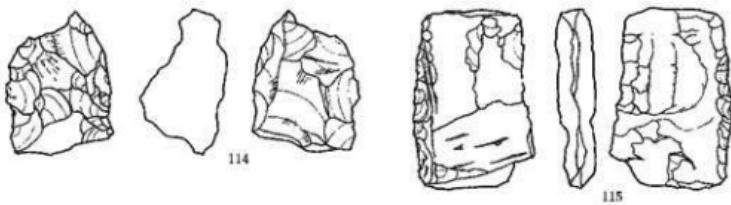
112



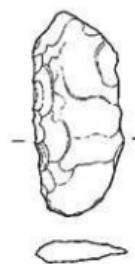
113



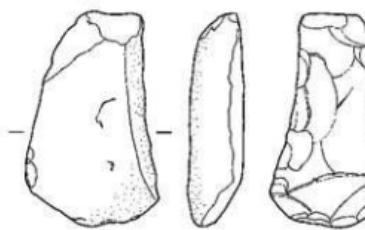
第38図 石器 8(刺片, スクレイバー)



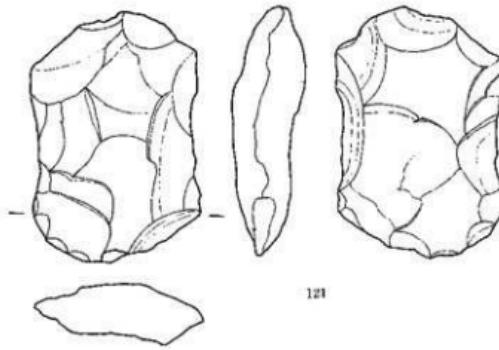
第39図 石器9(剥片,スクレイパー)



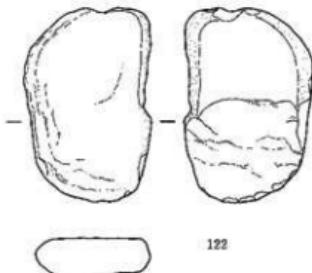
119



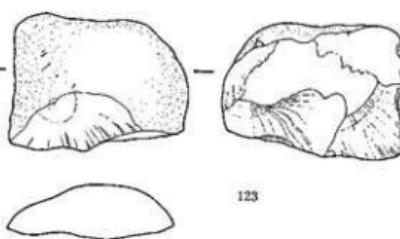
120



121



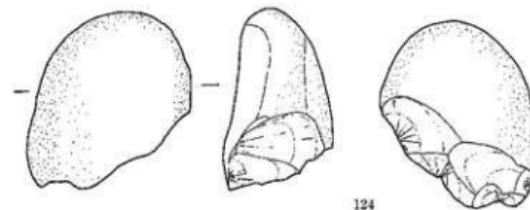
122



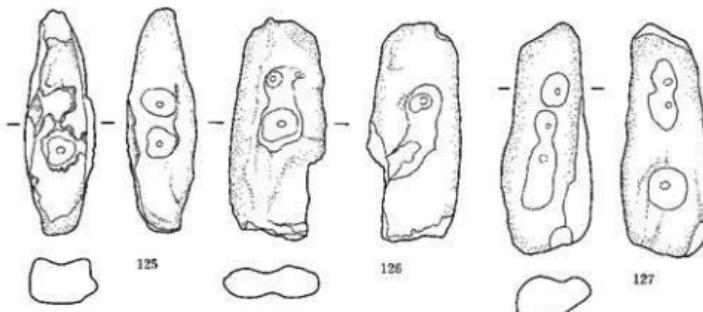
123



第40図 石器10(打製石斧, 碓器)



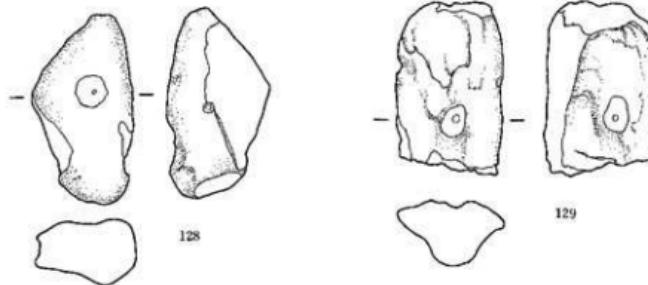
124



125

126

127

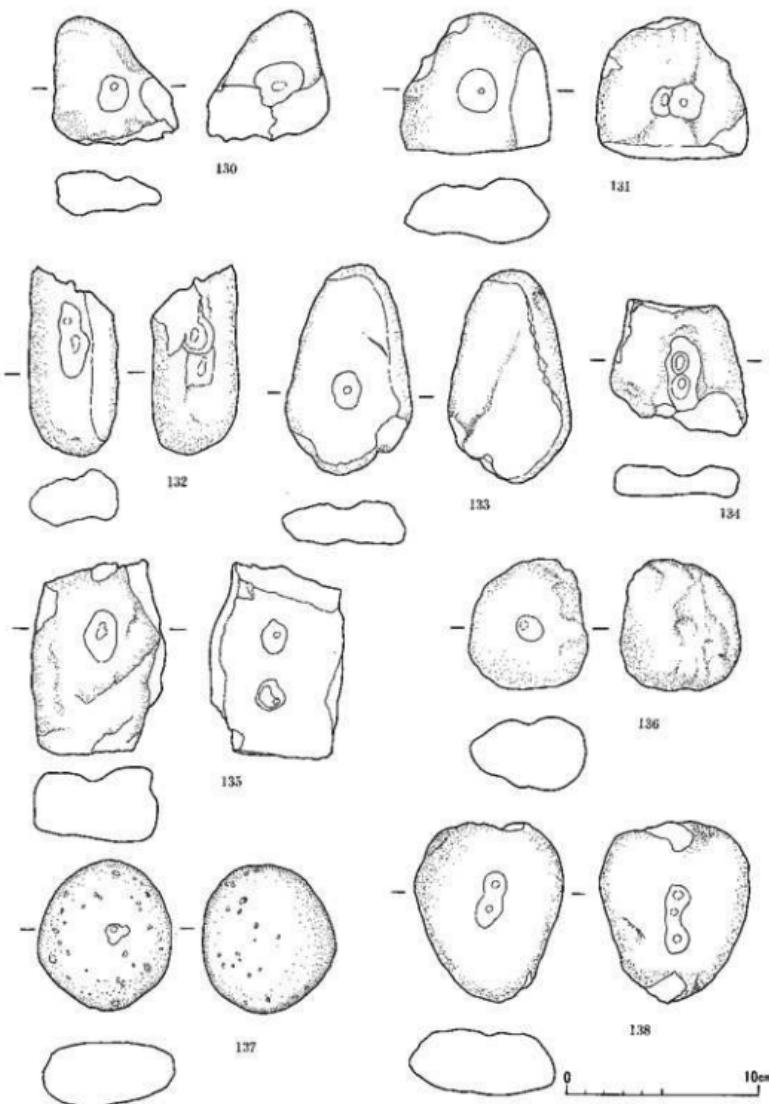


128

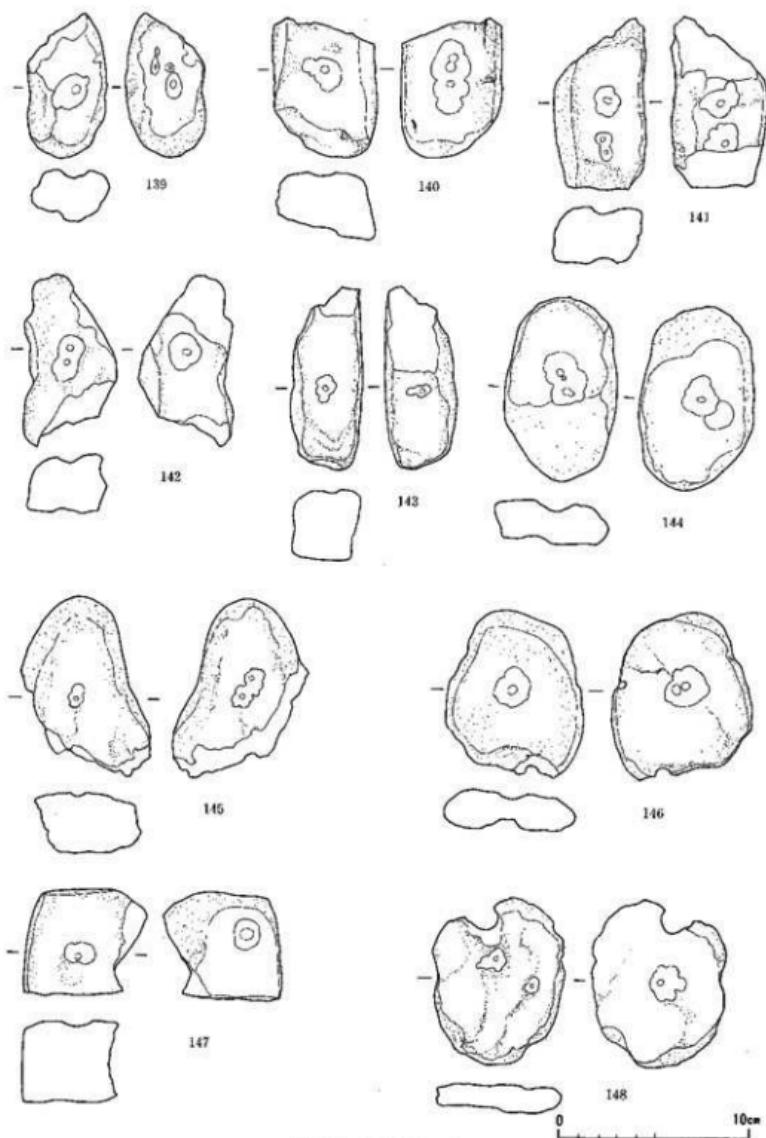
129

0 10cm

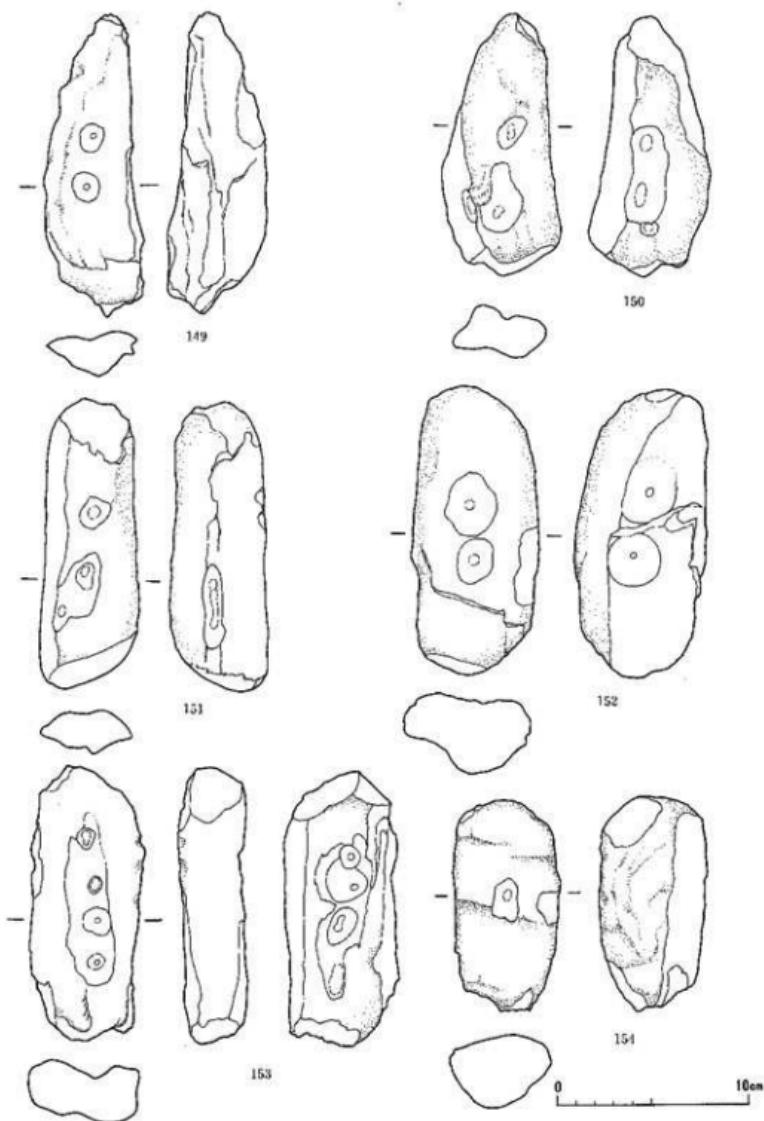
第41図 石器11(礫器, 回石)



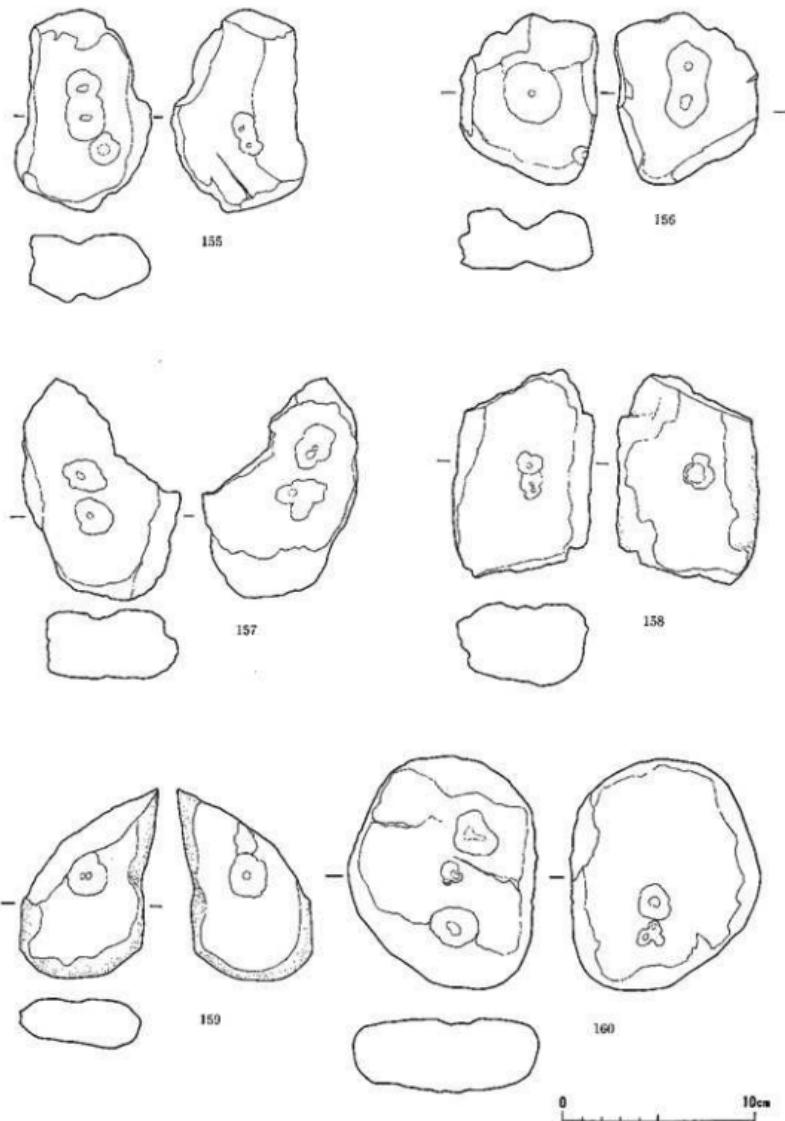
第42図 石器12(凹石)



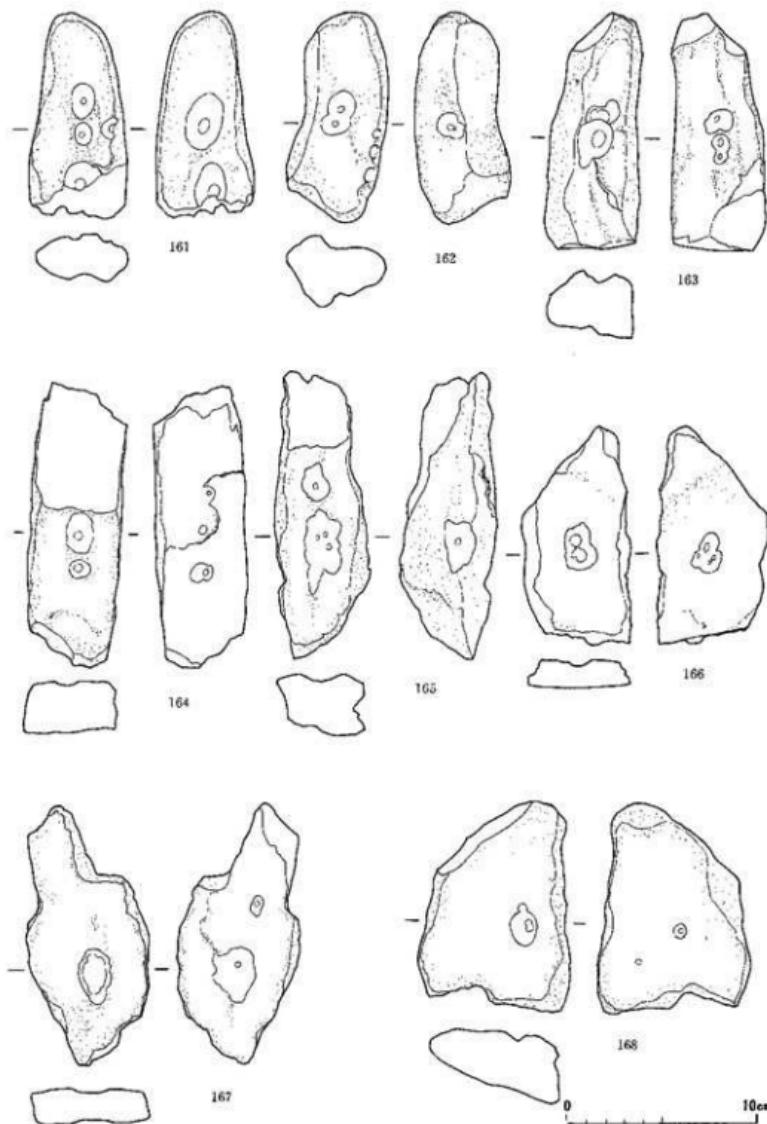
第43図 石器13(凹石)



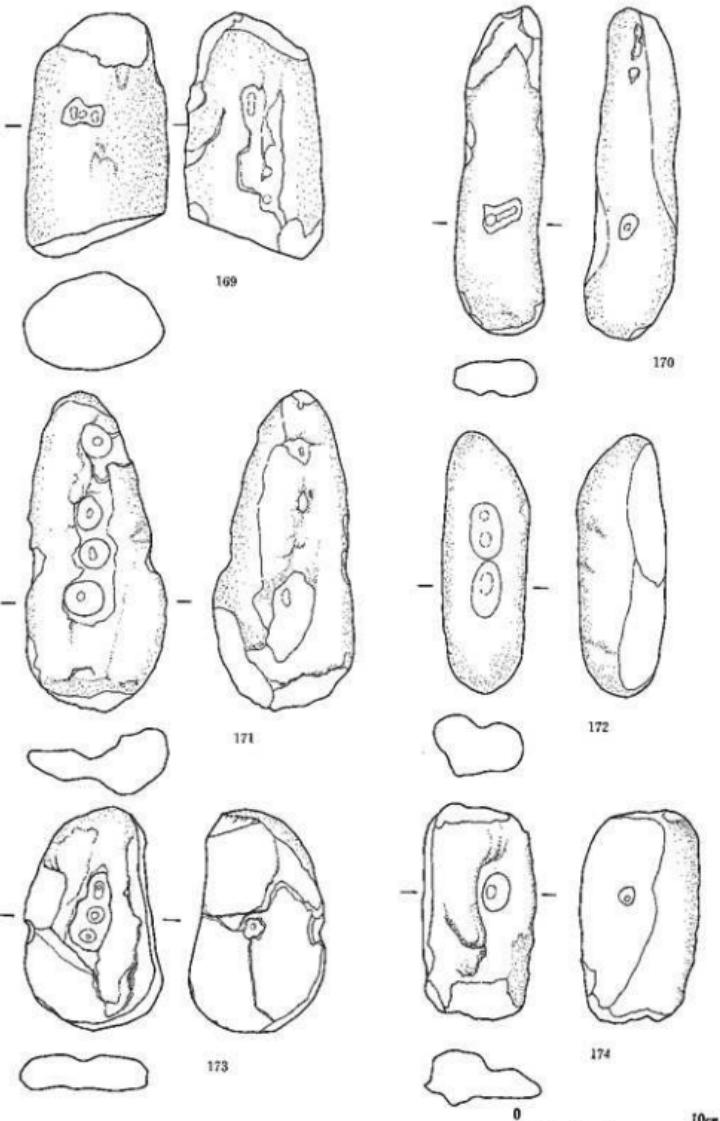
第44図 石器14(凹石)



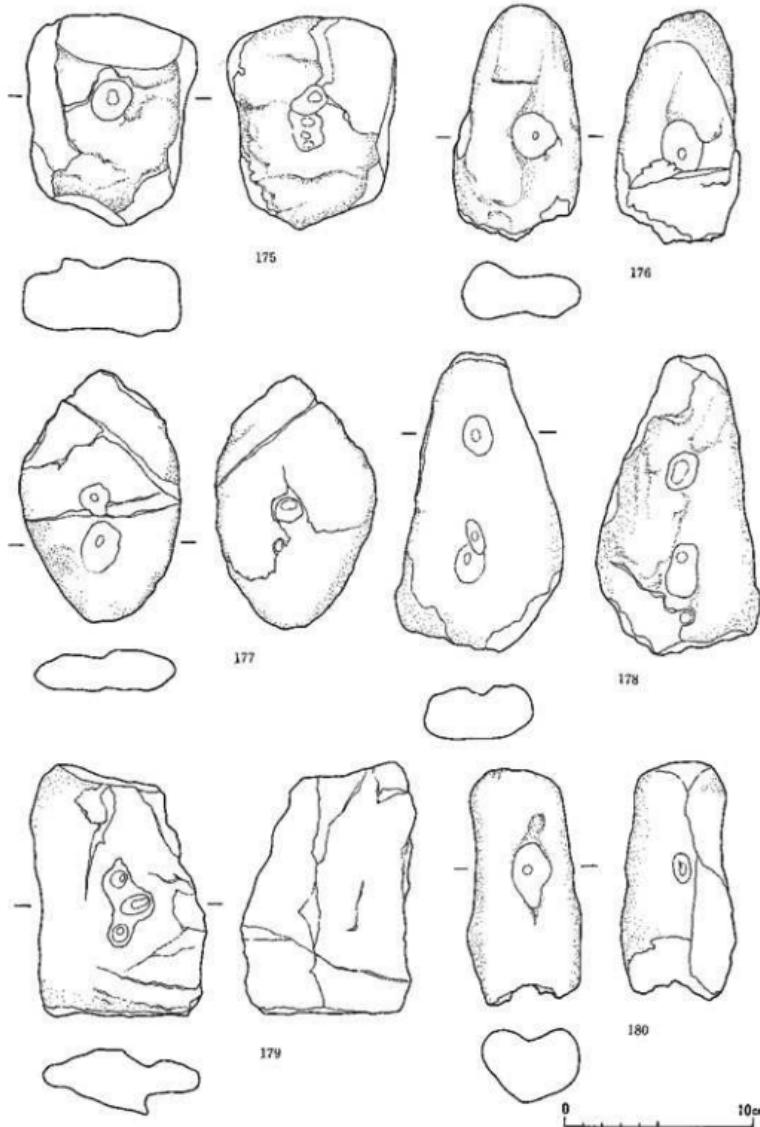
第45図 石器15(凹石)



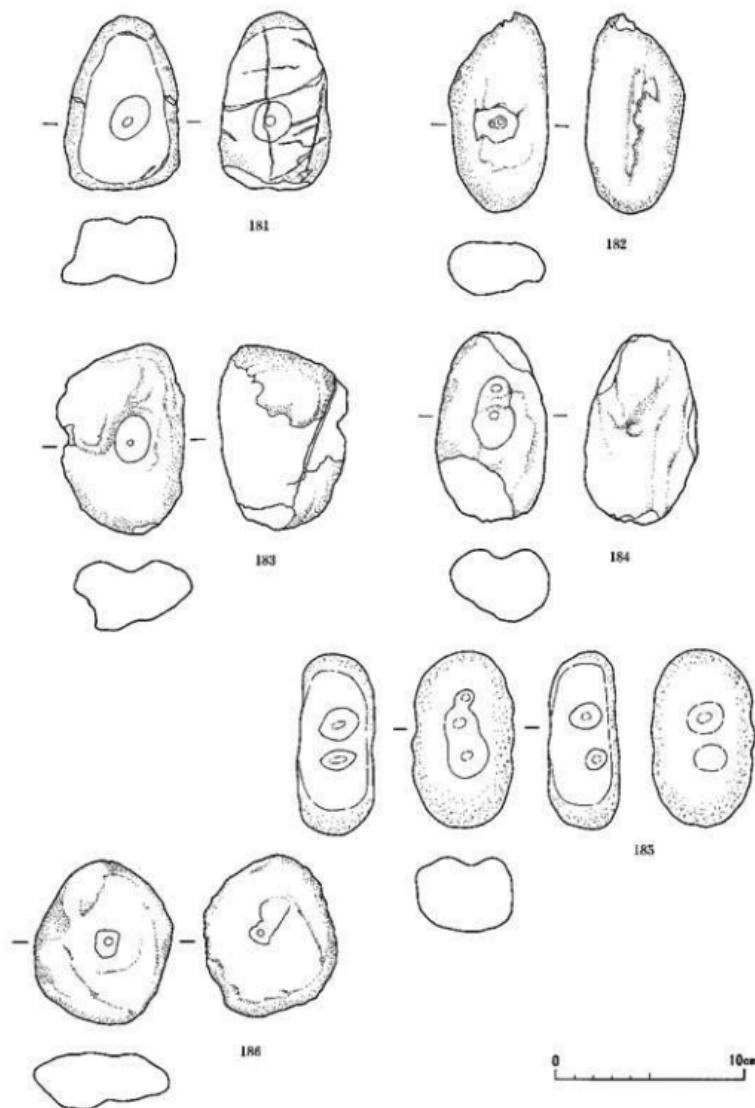
第46図 石器16(凹石)



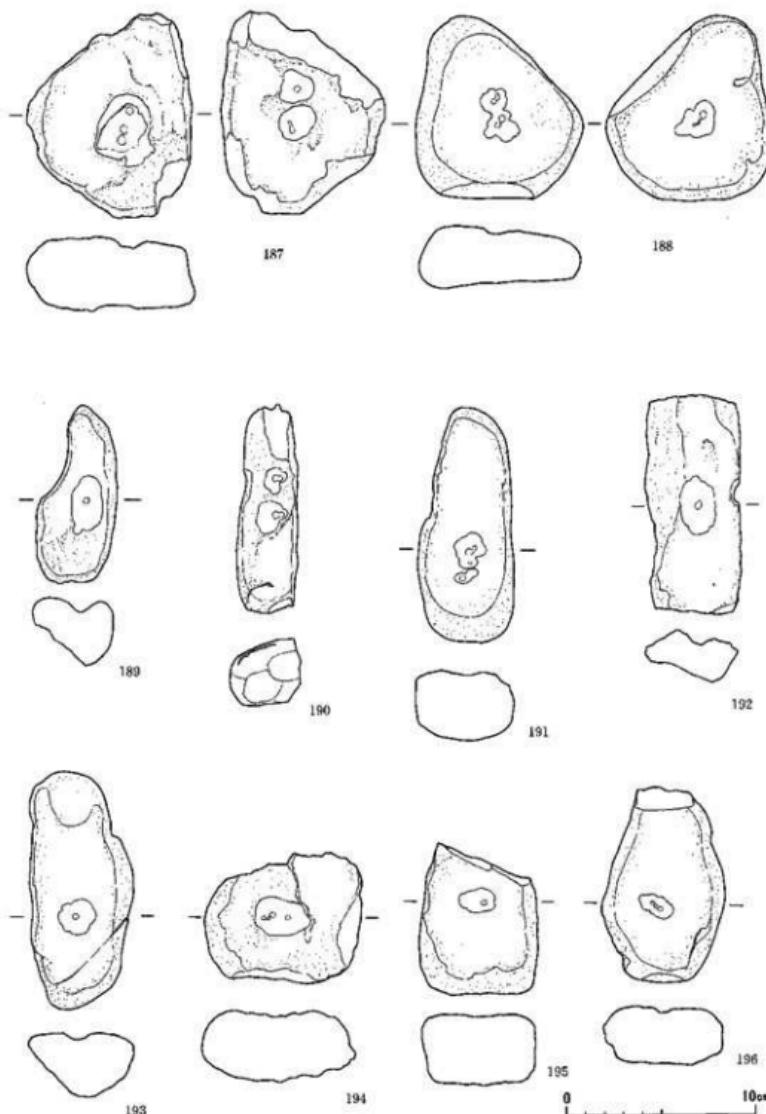
第47図 石器17(凹石)



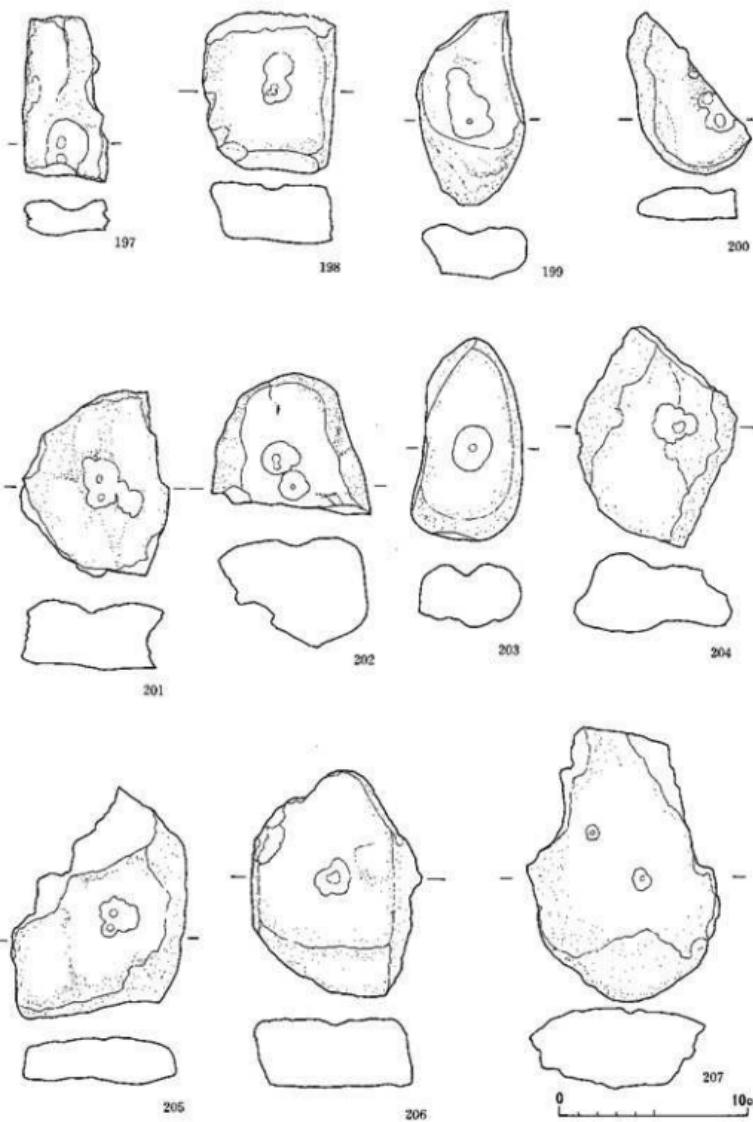
第48図 石器18(凹石)



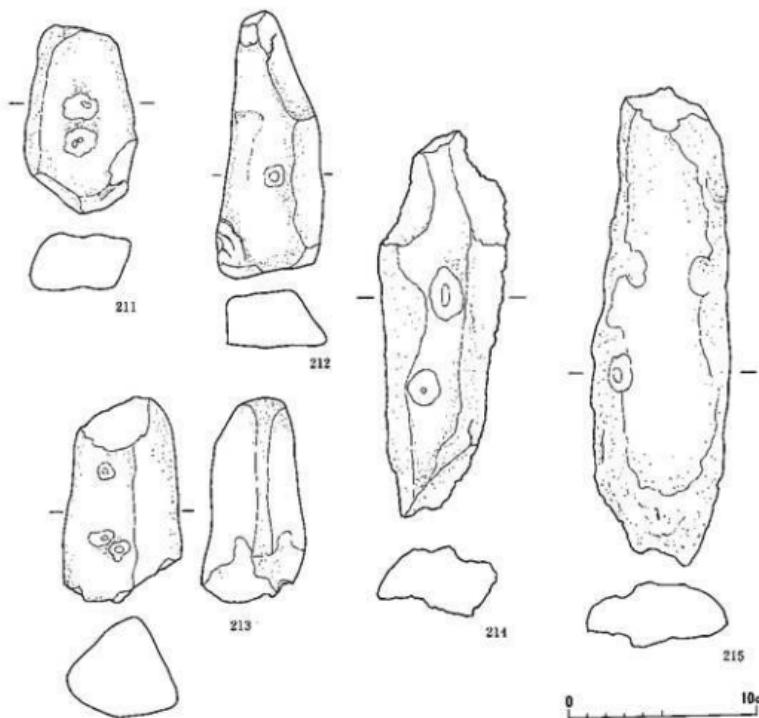
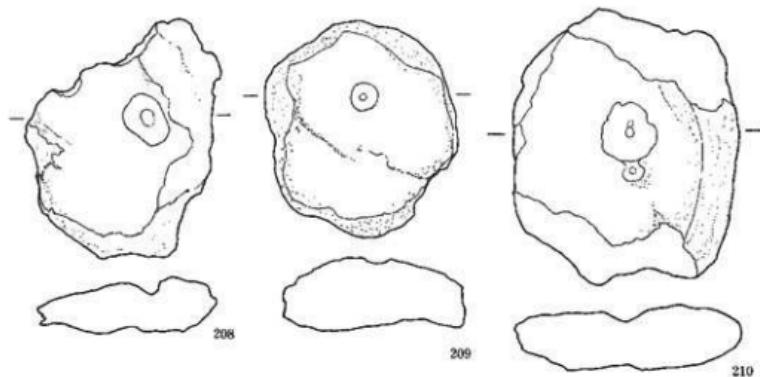
第49図 石器19(凹石)



第50図 石器20(凹石)

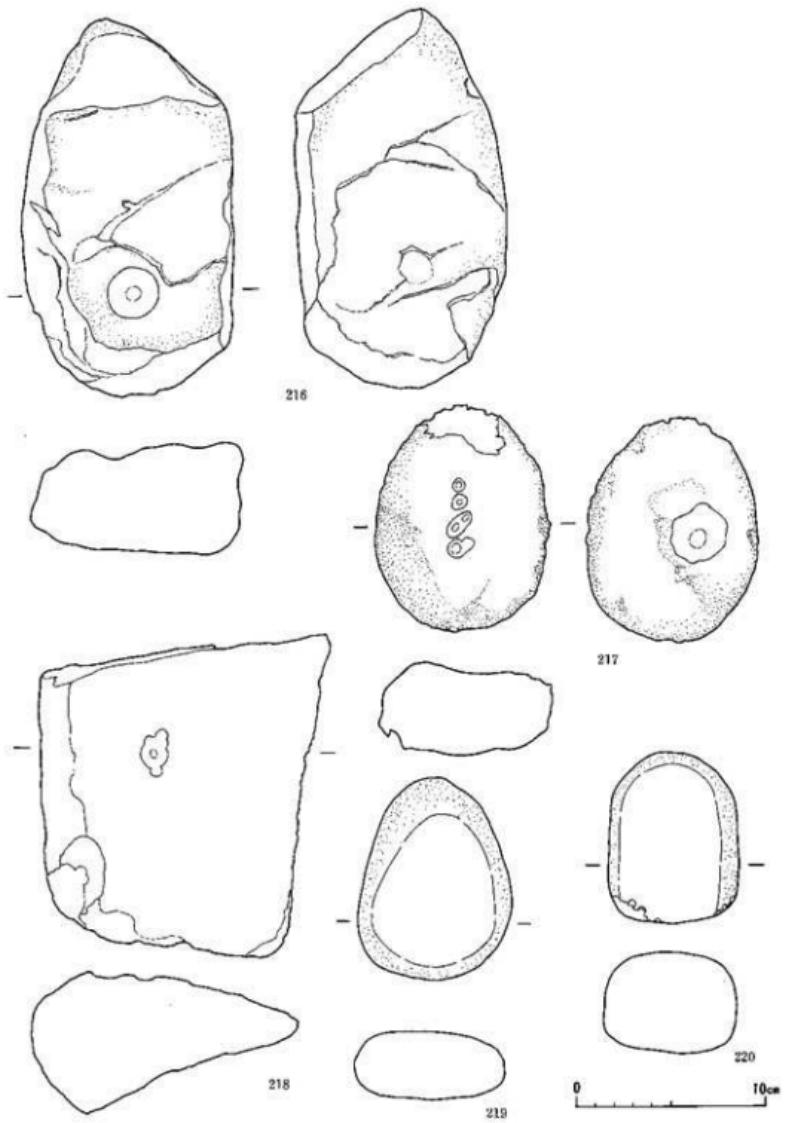


第51図 石器21(凹石)

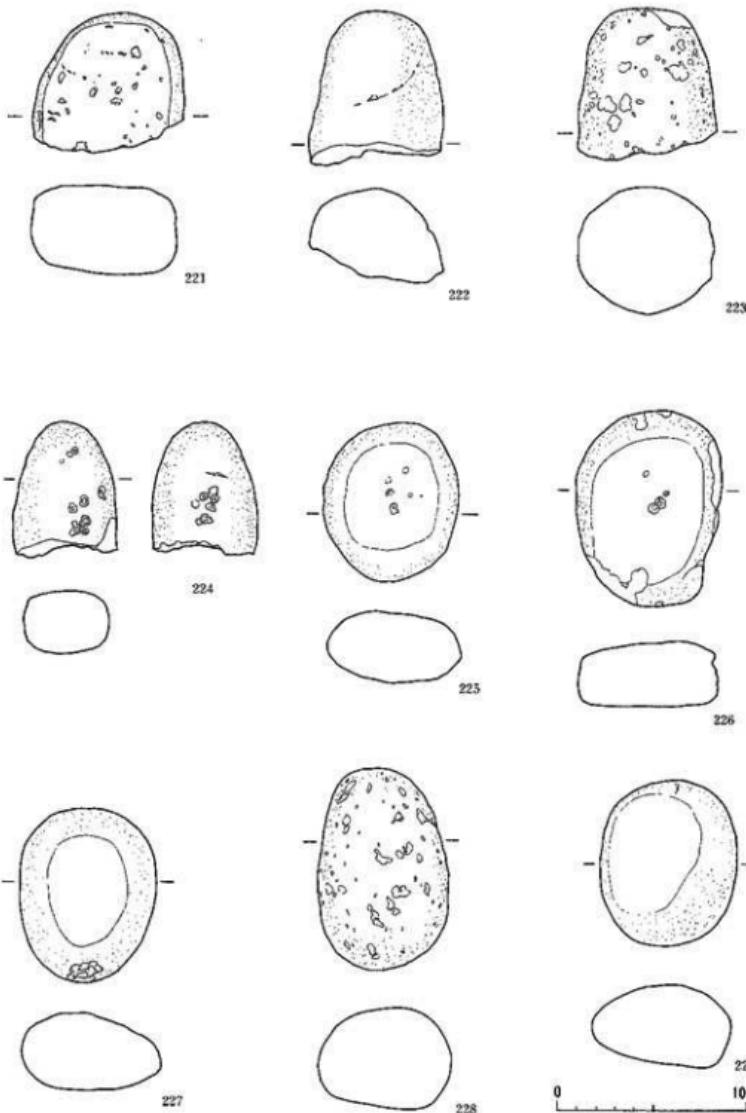


0 10cm

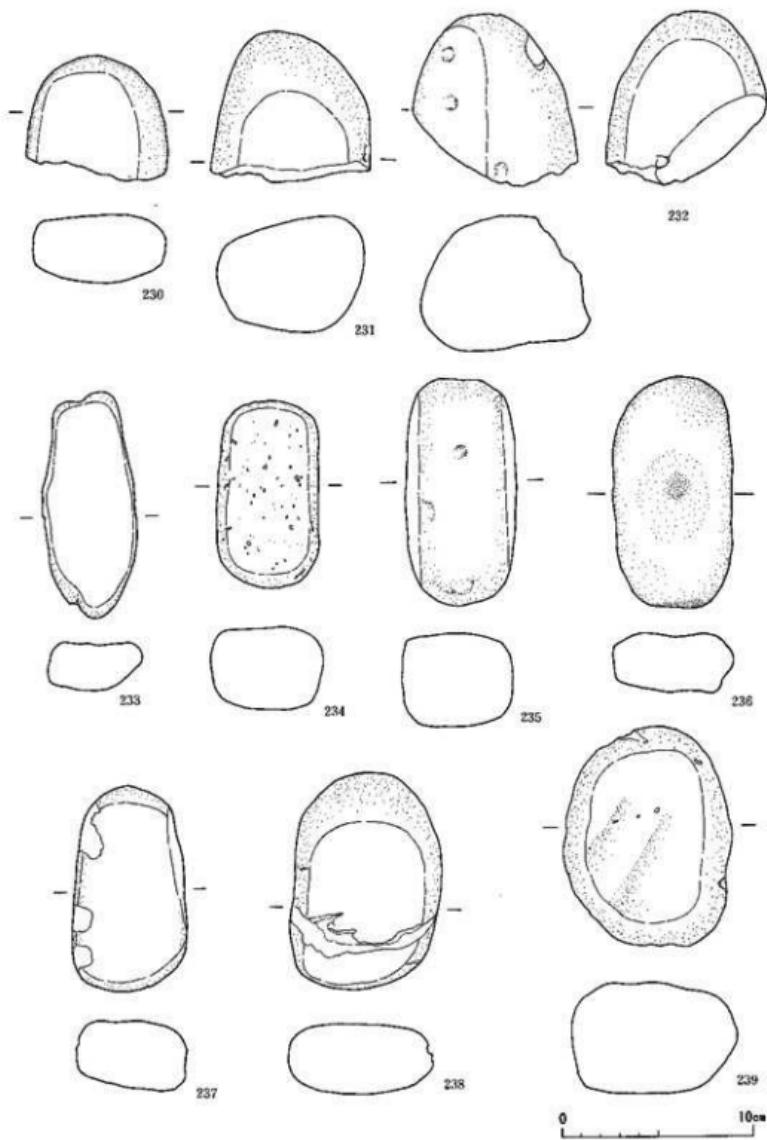
第52図 石器22(凹石)



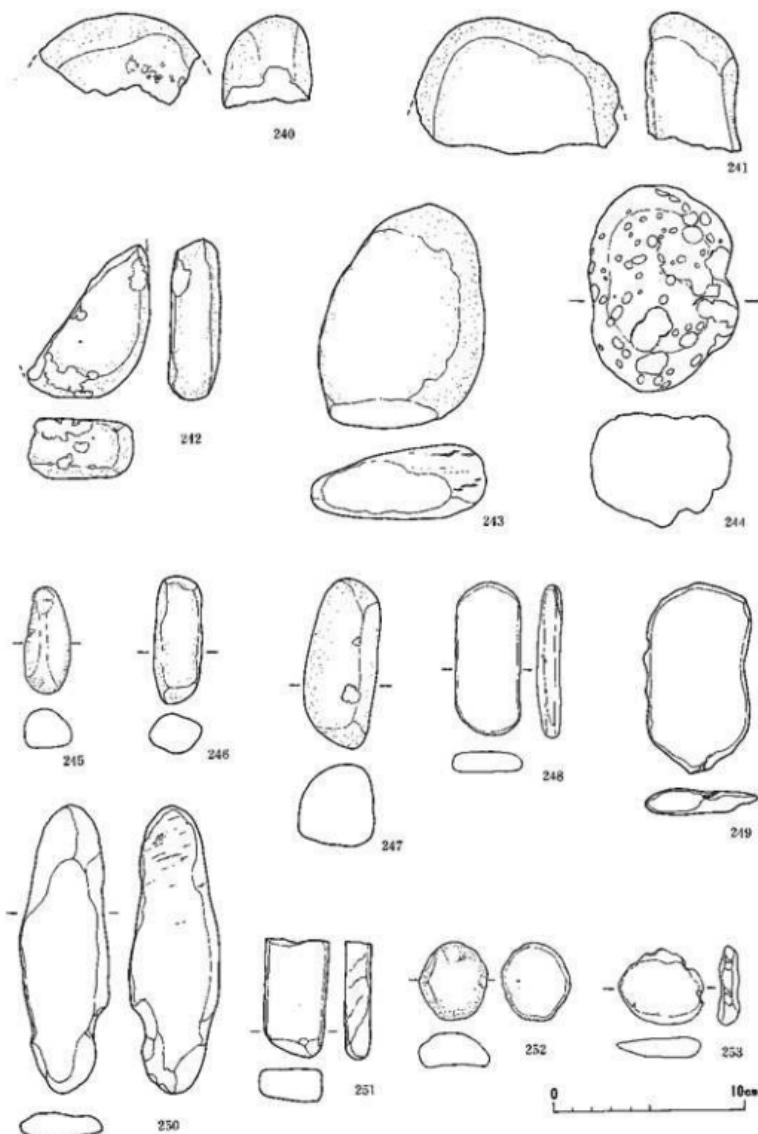
第53圖 石器23(凹石, 磨石類)



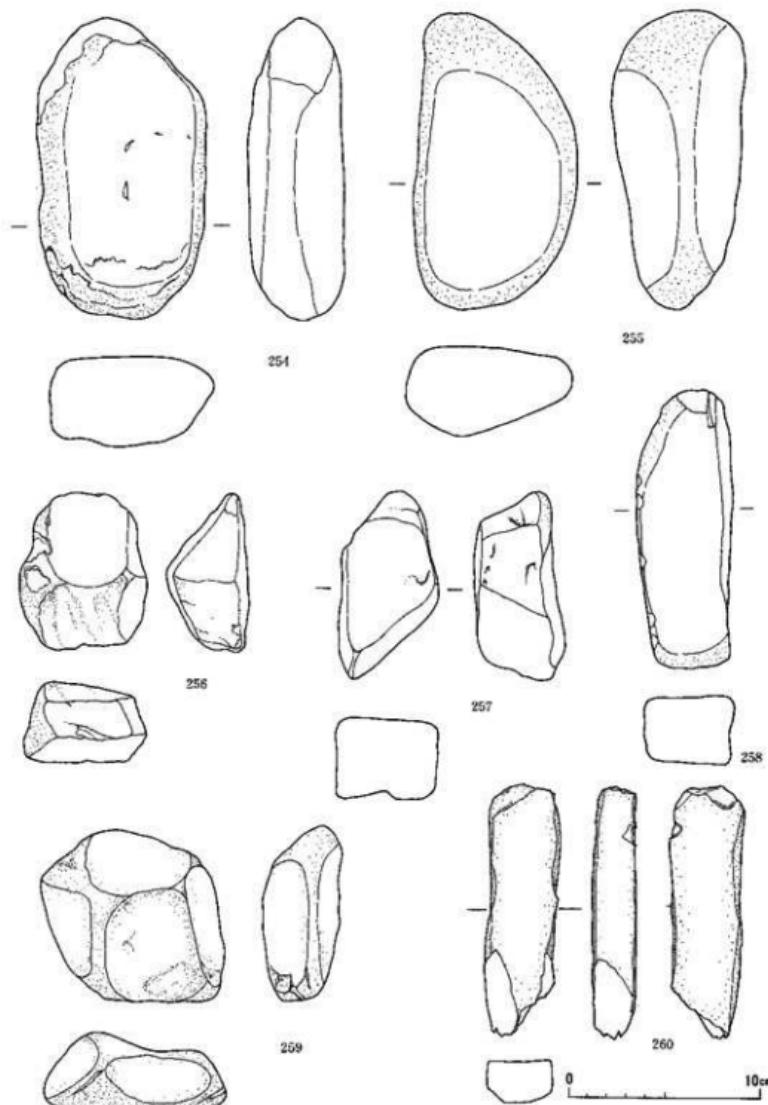
第54図 石器24(磨石類)



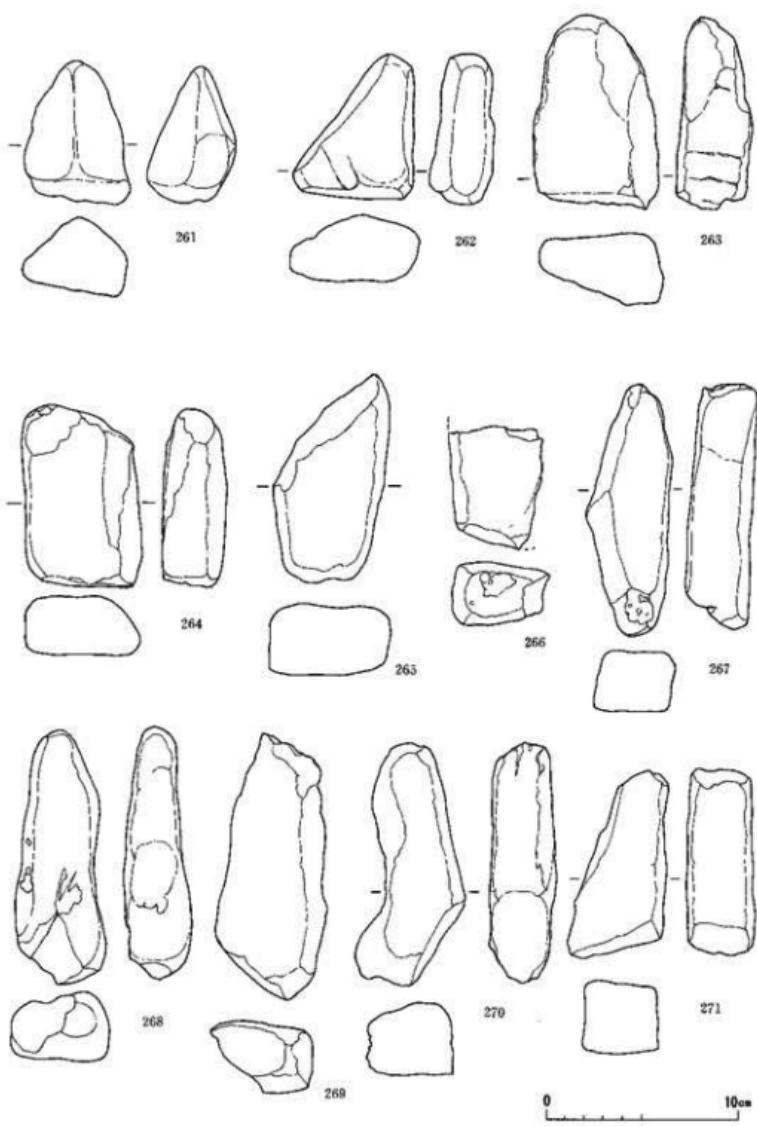
第55図 石器25(磨石類)



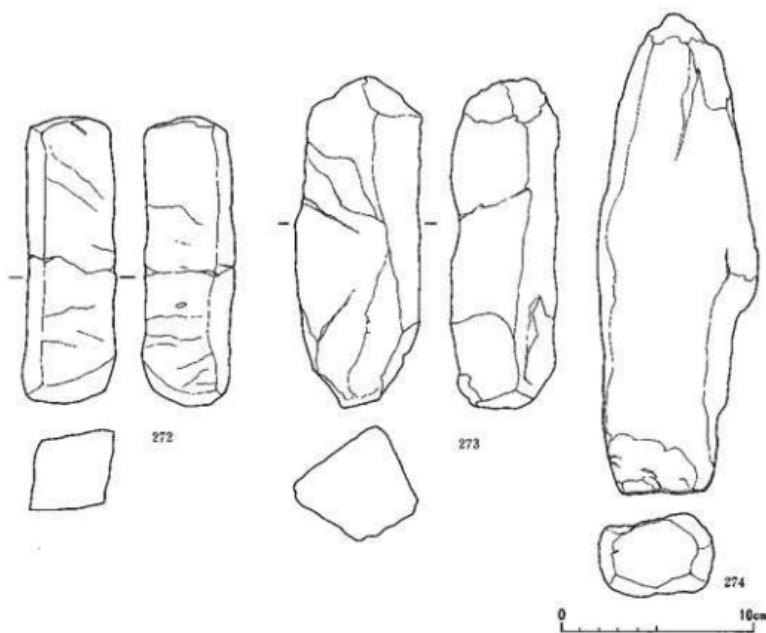
第56図 石器26(磨石類)



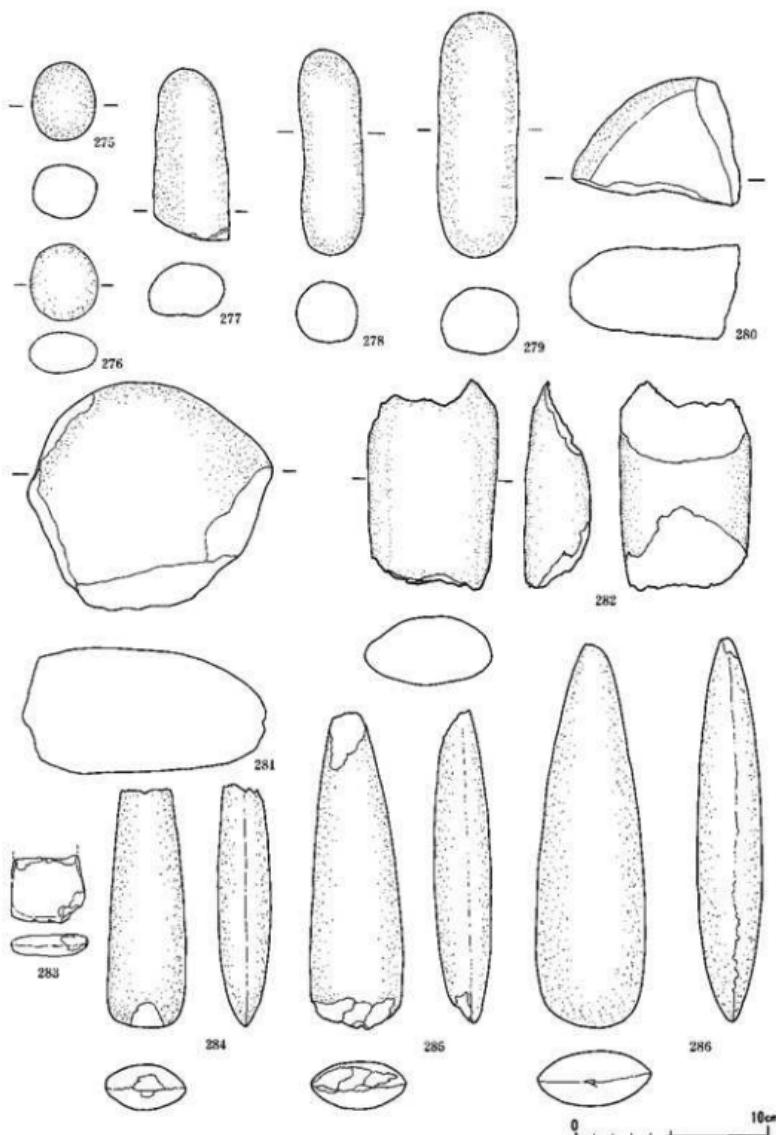
第57図 石器27(磨石類)



第58図 石器28(磨石類)



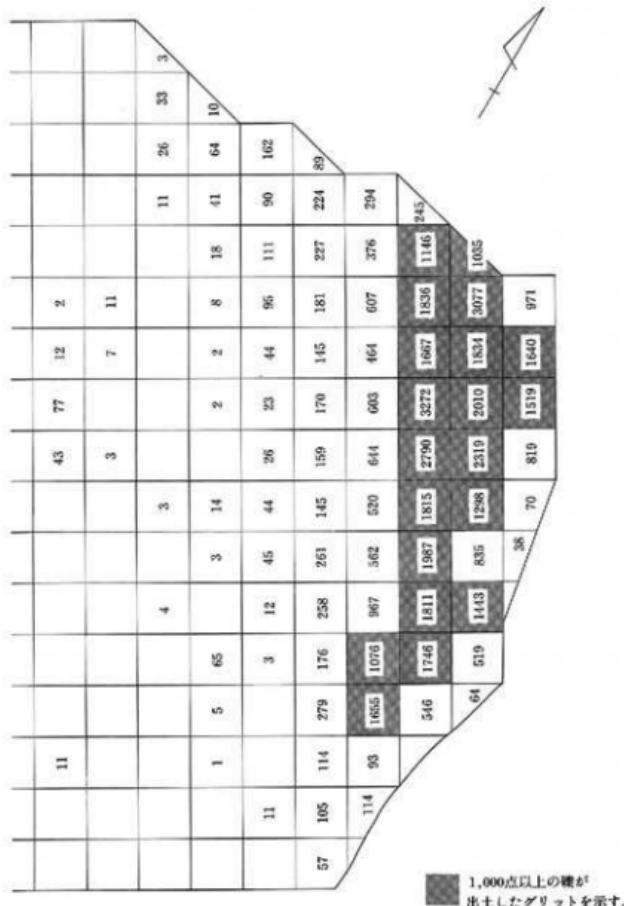
第59図 石器29(磨石類)



第60図 石器30(磨石類, 石皿, 磨製石斧)

(5) 碳 (第61回)

本遺跡からは、多量の礫が出土している。総数50,049点、総重量3,149kg、大半が第IV層中の出土である。分布状況を見ると、斜面下方に偏在する傾向が見られ、土器や石器の分布状況(第12図)とはほぼ一致する。加熱等の人为的な痕跡について調べたが、顯著に赤化した礫や、黒色付着物を有する礫はごくわずかであった。大半の礫は、泥質片岩や砂岩系統のものであり、遺跡周辺の礫層に由来するものである。



第61圖 縱分布圖

(1)土坑

10基発見された。平面円形を基調とした堀込みの比較的浅い類が大半を占める。11号土坑は他と比べて大型であり、覆土に焼土層を伴う点で特異な存在である。分布は、調査区東側、傾斜の緩やかな範囲に散在する。確認面は第II層である。

遺物は、覆土中より縄文早期から中期にかけての土器細片が出土している。

1号土坑（第62図、図版2）

位置 O-13区。

形態 平面橢円形。壁は緩やかに立ち上がり、一部オーバーハングしている。

規模 上端 70cm×54cm、深さ24cm 下端 60 cm×46cm

施設 無し。

遺物 無し。

2号土坑（第62図、図版2）

位置 N-11区。

形態 平面円形。壁は緩やかに立ち上がる。

規模 上端 122cm×106cm、深さ26cm 下端 70cm×64cm

施設 無し。

遺物 縄文土器片 1点

3号土坑（第62図、図版2）

位置 N-11区。

形態 平面円形。壁は上方に向かって開く。

規模 上端 92cm×90cm、深さ30cm 下端 80cm×80cm

施設 無し。

遺物 縄文早期（条痕文） 2点。

4号土坑（第62図、図版2）

位置 O-11区。

形態 平面不整橢円形。壁は緩やかに立ち上がる。

規模 上端 110cm×98cm、深さ10cm 下端 92cm×72cm

施設 無し。

遺物 無し。

5号土坑（第62図、図版2）

位置 N-10区。

形態 平面不整円形。壁は上方に向かって開く。

規模 上端 90cm×88cm、深さ28cm 下端 72cm×60cm

施設 無し。

遺物 繩文土器片 1点。

6号土坑（第62図）

位置 O-10区。

形態 平面不整椭円形。壁は緩やかに立ち上がる。

規模 上端 100cm×82cm、深さ16cm 下端 70cm×58cm

施設 無し。

遺物 繩文早期 3点

7号土坑（第63図、図版2）

位置 L-13区。

形態 平面不整椭円形。壁は上方に向かって開く。

規模 上端 85cm×64cm、深さ42cm 下端 40cm×22cm

施設 無し。

遺物 無し。

8号土坑（第63図、図版3）

位置 P-12区。

形態 平面不整円形。壁は緩やかに立ち上がる。

規模 上端 60cm×60cm、深さ14cm 下端 38cm×28cm

施設 無し。

遺物 繩文早期 1点

10号土坑（第63図、図版3）

位置 N-7区。

形態 平面円形？ 壁は上方に向かって開く。

規模 上端 (88cm) × (50cm)、深さ26cm 下端 (60cm) × (40cm)

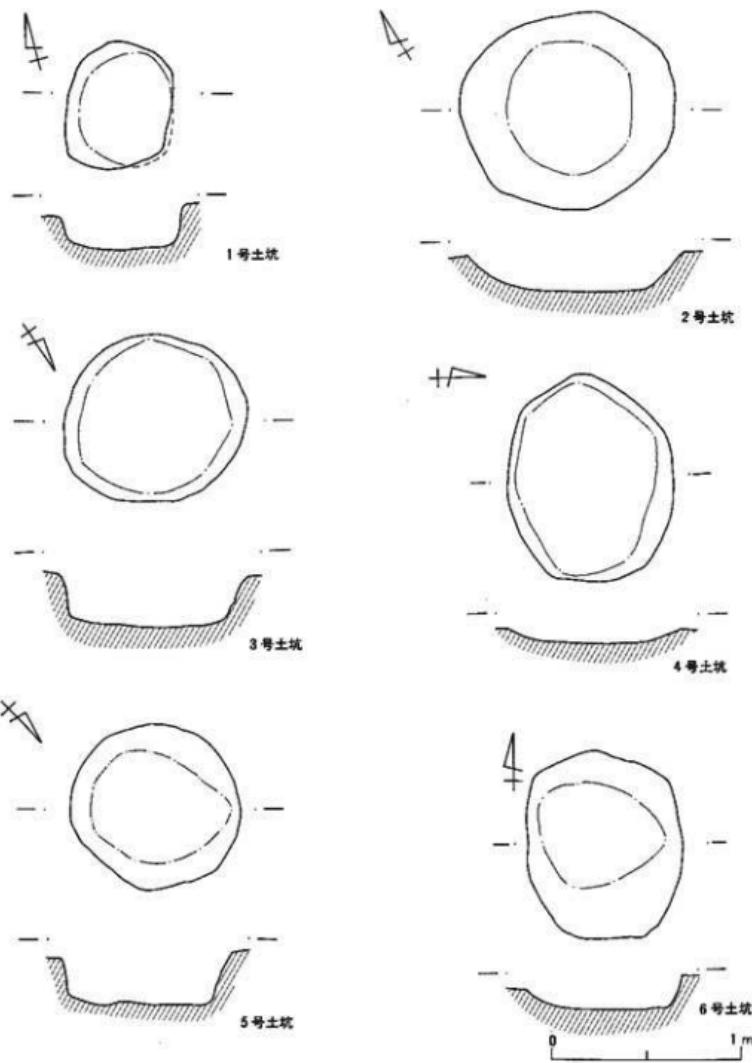
施設 未確認。

遺物 無し。

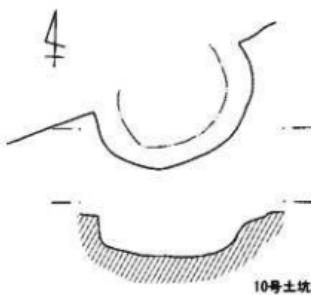
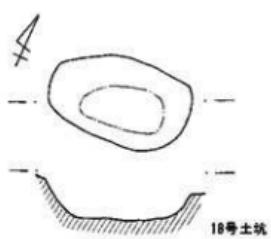
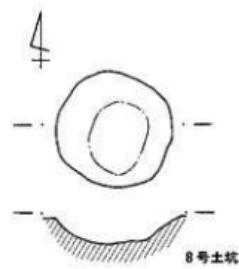
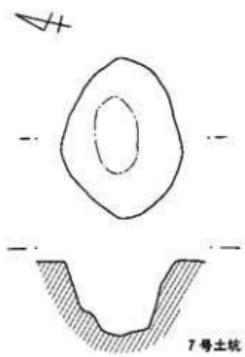
11号土坑（第64図、図版3）

位置 P-11区。

形態 平面椭円形。壁は上方に向かって開く。



第62图 土坑



0 1 m

第63圖 土坑

規模 上端 202cm×140cm、深さ52cm 下端 80cm×46cm

施設 無し。

遺物 無し。

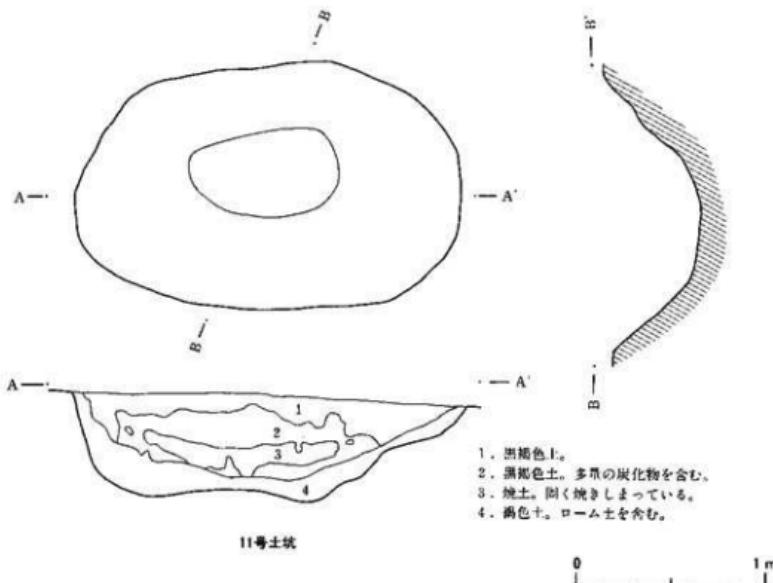
18号土坑 (旧4号小穴) (第63図、図版4)

位置 M-4区。

形態 平面椭円形 壁は上方に向かって開く。

規模 上端 78cm×48cm、深さ20cm 下端 44cm×22cm

遺物 無し。



第64図 土坑

第4節　まとめ

本遺跡からは、多量の縄文土器、石器の他、土坑、焼土址、小穴が発見され、山間のわずかな平坦地にもかかわらず長期に渡って利用されていた様子が窺えた。この成果は、周辺遺跡群の性格を考える上でも示唆に富むものであるとともに、山間地における縄文人の動態や生活面をさぐるうえで興味深い。以下、縄文時代を中心にその概要をまとめてみたい。

(1) 遺構について 土坑、焼土を主体とする。土坑は9号土坑を除き、共通点が多く指摘できる。平面は直径約80cmの円形を呈し、断面はほぼ直線的で急傾斜に開く。深さは80cm~90cmの範囲である。底面には複数の小穴を持ち、4個ないし5個が最も多い。このように形態、規模において同質性が高い。

覆土の堆積状況をみると、比較的粘性、締まりとも強い単一の土層が土坑下半部に堆積しているものが主体を占めている。また、ローム土など異なる土層が塊状に混入していることも特徴と言える。のことから、自然的というより人為的な埋め戻しがなされた可能性の高いことが指摘できよう。なお、16号土坑はこれらと異なり、下半部に3層がほぼ水平に堆積している。

分布は、緩斜面に位置し、ほぼ等高線に沿って、並列している。また、遺物の集中する地点と一線を画していることも特徴である。

出土遺物は、14号土坑の覆土中から縄文土器の細片が1点出土したのみであり、確実に遺構に伴って出土した遺物は無い。したがって造営時期についても不明ではあるが、本遺跡から主体的に出土している土器群が早期から前期にかけてであることから、おおざっぱながらこの時期に位置付けておきたい。こうした諸特徴から本遺構が周辺地域で類例の多い「陥穴」としての機能をもっていたことが窺える。しかし、平面円形の形態は周辺の遺跡では類例が少なく、この差異が何に起因するものなのか今後の課題と言えよう。

(2) 遺物について

本遺跡の特徴として、早期から晩期にわたって土器、石器が豊富に出土したことが挙げられる。このうち主体となるのは早期の沈線文系土器群、条痕文系土器群、前期の羽状縄文系土器群、竹管文系土器群であった。

早期 第II群は田戸下層式に比定される。文様構成により大別すれば、口縁部や胴部に三角状ないしは山形の沈線文をもつ一群（第1、3類）や、曲線的な沈線文をもつ一群（第4、5類）、口縁部に平行沈線文を持つ一群（第2類）がある。

第III群は、野鳥・鶴ヶ島台から茅山上層式に比定される。

第1類の縞条体压痕文土器は、これまで県内での出土例が少なく、関東と長野方面の狭間にあってその空白域を埋める資料として注目される。41は、口縁部に巡らされた隆带上に斜位に

縞条体压痕を施したものである。45~48は、多量の纖維を含み、内外面に条痕文を施して、口縁部に芋虫状の縞条体压痕が施されている点で長野県丸山遺跡例に近似しており、長野県における編年では古手に置かれているものである。この他、42、43は纖維をほとんど含まない比較的硬質の土器であり、地文の条痕文が菱形状に施される点で他の縞条体压痕文土器とは異質な感を呈している。このように本遺跡出土例については胎土や文様のあり方は一様でなく、編年的に時間幅のあることが考えられる。

この他、薄手、平坦な口唇部、内外面に貝殻版縁による押引き文を持つ土器（第3類c種）や、隆帶をもつ土器（第6類）、無纖維で波状口縁の深鉢（64）など特徴的な土器が出土している。

前期 第IV群は関山式、黒浜式に比定される。器種は深鉢が主体であり、平鉢、波状口縁、片口を持つものがある。

第V群は、前期後半諸磯式に比定される。なお、繩文のみ施された土器（第6類）は、無纖維、薄手、内面に指印痕などの調整痕を残す諸特徴をもち、黒浜式平行の糸迦堂Z3式に比定できそうである。また、指頭压痕隆帶（第6類b-2種）や無文上器（第7類）は編年的位置付けが難しいが、それぞれ便宜的に本群に含めた。諸磯式上器はa、b、c式に分類できる。a式土器には、連續する爪形文が施された土器（第1類）が比定されるが、胎土に纖維を含むことから黒浜式に近いものと言える。b式土器にはキャリパー形深鉢（第2類）や浅鉢（第8類）が比定できる。c式土器には、口縁部に多数の貼付文を持つ（第5類）ような古式のものから、折返し口縁と集合沈線文をもつ深鉢（第4類、第3類C種）のようにc式終末期とされる一群が含まれている。

前期末から中期初頭 第VI群は十三苦提式に比定される。第2類a種は結節沈線文を横に溝巻状に連ねた構成や、三角刻印文を作うことから鍋屋町式に位置付けられる。

第VII群は、五領ヶ台式に比定される。

中期 第VIII群は、加曾利E式期に比定される。第1類は、頸部に無文帯を持つキャリパー形の深鉢である。第2類は、直線的に開く深鉢であり口縁部文様帯が認められないことから、時期的には第1類に後続するものである。

後期 第IX群は、撫之内式に比定される。

晚期 第X群は、大洞b、c式に比定される。

石器は、尖頭器・石鎌・石匙・石錐・スクレイバー・打製石斧・凹石・磨石類・石皿・磨製石斧と多様であるが、中でも石鎌・凹石・磨石類の出上がきわだっている。石材別では、石鎌・石匙・石錐・スクレイバーが黒曜石やチャートを主体的に用いている。凹石は、手近にあった石をそのまま利用したタイプと、磨石と併用して利用されたタイプとに分けられ、前者は泥質片岩、後者は砂岩を主に使用しており石材の違いが明瞭である。こうしたことから凹石として

分類した中には基本的に機能の異なるものが含まれる可能性がある。

以上、本報告書では遺跡のもつ豊富な資料内容の一端を記したにすぎず、遺物の編年的位置付けを含め解明すべき問題点は多々あろうかと思われる。先学諸氏のご叱責、ご批判をいただければ幸いである。なお、本書の作成を通じ奈良泰史氏には多大なご助言を頂いた。記して感謝申し上げます。

参考文献「上野原町誌（上）」上野原町誌編纂委員会 1975

長谷川孟他「仲大地遺跡」上野原町教育委員会 1976

「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5—」長野県教育委員会
1982

「シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」『神奈川考古』第18号 神奈川
考古同人会 1984

小野正文他「駿遊堂I」山梨県教育委員会 1986

今村啓爾「諸磯式土器」『縄文文化の研究 3』雄山閣 1987

中山誠二他「関山遺跡I, II」山梨県教育委員会 1988

第IV章 カイル遺跡

第1節 調査の概要

調査日誌より

- 87.2.20(金)晴れ カイル遺跡発掘調査開始。センターラインの左右2mの4m幅で表土剥ぎを始める。R1グリッドより3グリッドまでの表土剥ぎ終了。R1グリッドより土器片1点、R3グリッドより土器片1点出土。R1グリッドより出土した土器は、縄文中期の勝坂式かと思われる。
- 2.21(土)くもり 7グリッドまでの表土剥ぎ終了。R7.7グリッドで表土下約40cmでローム層が表れる。R5.5R6.6グリッドにかけて住居跡かと思われる黒色土の落ち込みが見られた。5グリッドより土器片1点、7グリッドより土器片4点出土。
- 2.23(月)晴れ 10グリッドまでの表土剥ぎ終了。ここまで杭を全面に落とした。午後、県文化財担当新津健氏はか1名が発掘の指導に来る。R11-1グリッドでは表土下約22cmでローム層が表れた。
- 2.24(火)晴れ 15グリッドまでの表土剥ぎ終了。杭は全て全面に落とし、遺跡の全体図が出来た。やはり表土下20~30cmでローム層が表れたが15グリッドの西側侧面から16グリッドにかけての溝状の落ち込みが見られた。中世の遺構ではないかと思われるが、それらしき遺物は出土せず。
- 2.25(水)晴れ 18グリッドまでの表土剥ぎ終了。15グリッドから19グリッドまでのロームの堆積状態は、東側から西側かけてなだらかに下がり、西側1mぐらいのところから急激に低くなる。19グリッドの西側から、土壤かと思われる落ち込みが表れた。R5.5グリッドで黒色土の周間に表れたローム層は、浮いており、さらに掘り下げる必要がある。
- 2.26(木)晴れ 表土剥ぎ終了。R4からR3グリッドにかけて約50cm幅のテストレンチとR2.2グリッドの3グリッド寄り2mのテストレンチを設け、ローム層まで掘り下げる。杭4の位置で、表土下45cmでローム層が表れ、R1グリッドの方向になだらかに下りていき、R3とR2グリッドの境のあたりから急激におちこんでいる。R2.2グリッドは何らかの原因で流れこんだと思われるレキ層が厚く堆積し、表上下1m程度の深さでようやくローム層が表れ、掘り下げは完了しなかった。

- 2.27晴れ 昨日にひき続きR4, R3グリッドのテストトレントを掘り下げ、ローム層の確認をしたところでR4,4, R3,3, R2,2グリッドの全面をローム層まで掘り下げた。R2,2,グリッドで急激におちこんだローム層は1~2mで再び立ちあがる。さらに、2グリッドには長径約2m・短径約1.5m程度のおちこみが見られるが、ここから遺物は出土していないので、人為的な掘り込みである可能性は少ない。
- 2.28晴れ 発掘区域内全体の清掃を終え、写真撮影を行った。午後3時より現場にて、カイル遺跡の調査中間報告会を開く。終了後、慰労会を行う。
- 3.2晴れ R3,3, R4,4グリッドのローム面は、細かい礫やブロック状の暗褐色土をかなり含んでいるので、さらに掘り下げを進めた。R1,1グリッドでは礫層を掘り下げ、ローム層を確認する。また、15, 16グリッドで検出された溝状の落ち込みの外郭、内郭を確認し、平面図をとった。その後19グリッドから検出された上構らしき落ち込みを清掃し、写真撮影を行った。半蔵して掘り込みを始める。
- 3.3次晴れ R5, R6グリッドの北壁セクション図(SPA-SPA^{*})完成。R5,5, R6,6グリッドの住居跡らしき落ち込みの清掃をし外郭を求める。R5,5グリッドの土層の変わりめにそって礫が並んでいる。外部は北壁と南壁で切れているため、南壁を拡張して掘り込んだ。R6グリッドの黒色土層上から繊維の混入が見られる土器片が1点出土。19グリッドの半蔵した1号土壙は、8割程度掘り進み、現時点で約140cmの深さである。1号土壙内より礫が1点出土。
- 3.4次晴れ R4, R5グリッドの北壁セクション図(SPБ-SPB^{*})完成。1号土壙では全面を掘りはじめ、土壙内より平行蛇線の施された土器片が1点出土した。土壙内に落ち込んでいた表土を掘り切った段階で清浄をし、土器の出土状態を撮影した。4グリッドの2号土壙周囲の集石は、メッシュによって実測後、土壙を半蔵して掘り始める。R5,5, R6,6グリッドの壁をくずして、グリッド全面を掘り下げたところ、黒色土はさらに西側に流れしており、R5,5グリッドの黒色土からは、礫が多数出土している。黒色土の入り方、住居跡以外の遺構である可能性が出てきた。また、単に上の流れによる土層噴火ということもありえる。確認のため、発掘区域をさらに拡大する必要がある。黒色土層上から土器片が7点出土。
- 3.5次晴れ R1, R2, R3グリッド北壁セクション図(SCP-SCP^{*})完成。R5,5グリッドの黒色土層上に礫が長く連なっている。焼けた石も礫数点見られる。R5グリッド拡大部分の表土層より土器片が1点出土。1号土壙は現時点で深さ約2mである。2号土壙は半分掘り切り、セクション図を作成。その後清浄し、写真撮影を行った。2号土壙を全面を掘り下げたところ集石が表れ、この集石はさらに広がるよ

- うである。くい15の周囲4m×3.5mでローム層の掘り下げを始める。2m程度掘り下げる予定である。12:00より地元の方々への説明を行った。また、作業能率を上げるために、メッシュとレフ板を作成した。
- 3.6(晴れ) R5.5, R6.6グリッドの配石らしき遺構をメッシュによって測量する。1.5m×1.5mのメッシュでNo.1～No.3までの平面図を完成。R6グリッドの拡張部分より北壁に切られた土壙が表れた。1号土壙はまだ完掘せず。西側に広がり、西壁で切れている。2号3号土壙内からは、1群の集石が表れ、清掃し、写真撮影をした。
- R5.5, R6.6グリッドの配石らしき遺構も清掃し、写真撮影をする。R5グリッドで大きめの上器片を確認する。焼成は悪く、薄手である。ローム層掘り下げは1/3程度進む。
- 3.7(出くもりのち雪) R5.5, R6.6グリッドの配石らしき遺構、2号3号土壙内の集石を再び清掃し、写真撮影をした。その後、昨日にひき続い、配石らしき遺構を測量する。No.4～No.7までの平面図を完成する。2号3号土壙内の集石は測量している途中である。1号土壙はまだ完掘せず、ローム層は約1mの深さまで掘り下げた。出土遺物は黒色土層より土器片3点。2:00頃から雪が降りはじめる。3:00よりブレハブにてミーティング及び勉強会を行う。
- 3.9(晴れ) R5.5, R6.6グリッドの配石らしき遺構のNo.7～No.10までの平面図を完成する。2号3号土壙内の集石の平面図が完成し、礫を取りはずして掘り下げたところ、集石はさらに続いている。こぶし大以上の礫は、とがっている部分を下にして立った状態にあることが多い。ローム層掘り下げは、2/3程度進んだ。
- 3.10(晴れ) R5.5, R6.6グリッドに渡る配石の計測は本日で終了となる。R6グリッドにおいて土層観察をしながら、ローム層まで掘り下げを始める。その黒色土層中より土器片2点出土。2号3号土壙内の集石を清掃し、写真撮影をする。
- 3.12(出くもり) 2号3号土壙内の集石を計測し、礫を取り外して、さらに掘り下げる。2号3号土壙は完掘していない。R6.6グリッドを昨日にひき続いてローム層まで掘り下げる。R6グリッドでは東側になだらかにおちていき、タイ6を中心にして半径1.5m程度のところから急激に落ち込んでいる。その落ち込み部分では、黒色土の下から礫層がでてきた。
- 3.13(出くもりのち雨) 黒色土層の掘り下げと、2号3号土壙の掘り下げを行う。10:00頃より、雨が降り始めたためブレハブにて整理作業を行い、午後は教育委員会にて資料の作成をする。
- 3.14(晴れ) R5.5, R6.6グリッドの黒色土層の掘り下げを行う。R6.6グリッドは掘り下げを

完了した。遺物は出土せず。この黒色土層は自然の流れ込みによる堆積であると思われる。

- 3.16(晴れ) 2号3号土壠の掘り下げを終了し、清掃して写真撮影をする。R6グリッドの4号土壠は外郭を確認し、写真撮影をして、掘り下げる。R5,5, R6,6グリッドはローム層までほぼ掘り下げを終え、清掃して写真撮影をする。東西方向のベルトのセクション図を完成する。
- 3.17(雨くもり) R5,5, R6,6グリッドはローム層まで掘り下げを完了する。南北方向のベルトのセクション図を完成し、その後ベルトをとりはずして清掃し、写真撮影をする。5グリッドより平行沈線の施された、土器片1点出土する。R2グリッドの北壁に切られた土壠は外郭を確認し、清掃して写真撮影をする。終わって、掘り下げを開始する。
- 3.19(雨くもり) R2グリッドの5号土壠は完掘する。遺物は出土せず。4, R5,5, R6,6グリッドの平板測量を行い、その後R5~R10グリッドの北壁セクション図(D-D',E-E')を完成する。ローム層のテストピットは2m程度の深さで終了した。
- 3.20(晴れ) R5,5, R6,6グリッドを再び清掃し、写真撮影を行う。R15, 16, 17グリッドの東壁セクション図(F-F')とローム層のテストピットの北壁セクション図(G-G')を完成する。19グリッドの1号土壠は上層の誤認による掘りすぎを確認して終了する。発掘区域内の地形図はR4,4グリッドより東側を残して完成した。現場の全調査を終了する。
- 3.24(雨くもり) 現場より機材を運び出し、プレハブ内の清掃を行い、機材の汚れをおとして収納した。本日をもって発掘調査を終了とし、午後よりミーティングを行う。
- 3.26(晴れ) 残務整理を行う

第2節 遺跡の層序

第I層 黒褐色土。スコリア層を挟み、上下2層に細分できる。スコリアは磨滅しており、層厚は谷部で最大となり10cmである。

I a層 締まりがなく、やわらかい土である。

I b層 粘性があり、I a層より色調が明るい。

第II層 接色土。礫が含まれる。

第III層 ソフトローム。礫が含まれる。

第IV層 ハードローム。

第3節 遺構と遺物

1 遺構

1号土坑

位置 R-19 区

形態 平面橢円形。壁はほぼ垂直に立ちあがる。

規模 上端 66cm×42cm, 深さ75cm, 下端 54cm×24cm。

施設 無し。

遺物 無し。

2号土坑

位置 R-4 区

形態 平面橢円形。集石を伴う。

規模 上端 100cm×80cm, 深さ15cm, 下端 60cm×45cm。

施設 無し。

遺物 無し。

3号土坑

位置 R-4 区

形態 平面円形。集石を作う。

規模 上端 65cm×45cm, 深さ15cm, 下端 40cm×40cm。

施設 無し。

遺物 無し。

4号土坑

位置 R-6 区。一部調査区外にかかる。

形態 平面長方形。

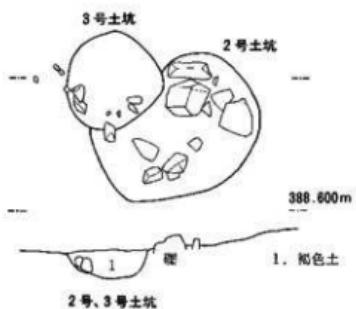
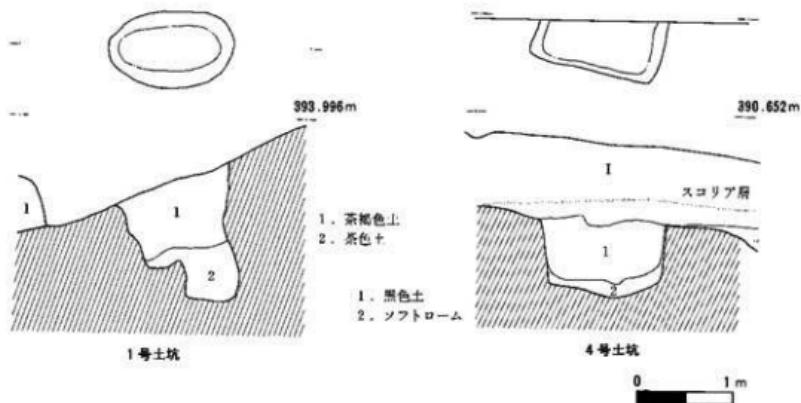
規模 上端 66cm×(36cm), 深さ42cm, 下端 57cm×(30cm)

施設 無し。

遺物 繩文中期の土器片が1点出土した（第68図、第7表）。



第65図 R 6 グリッド周辺土石流配置図

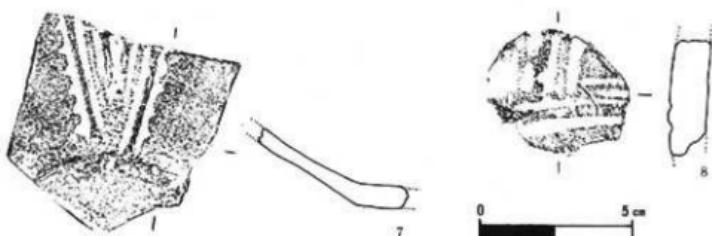
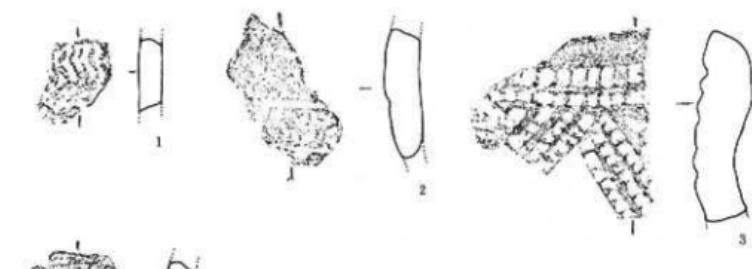
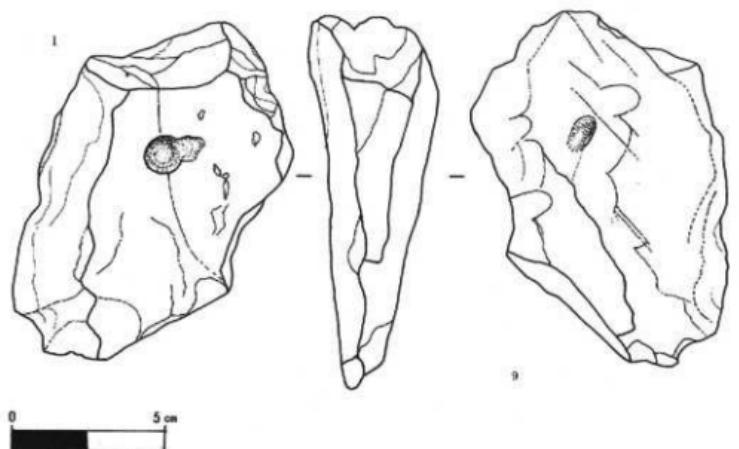


第66図 造構

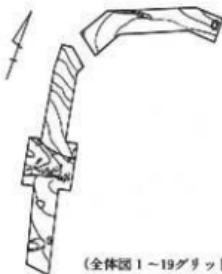
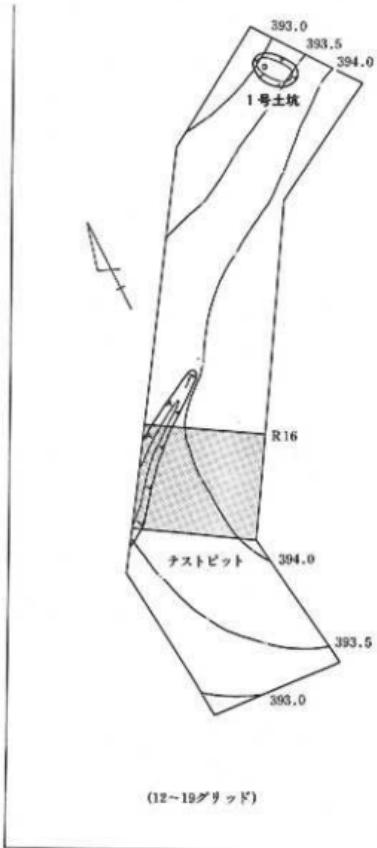
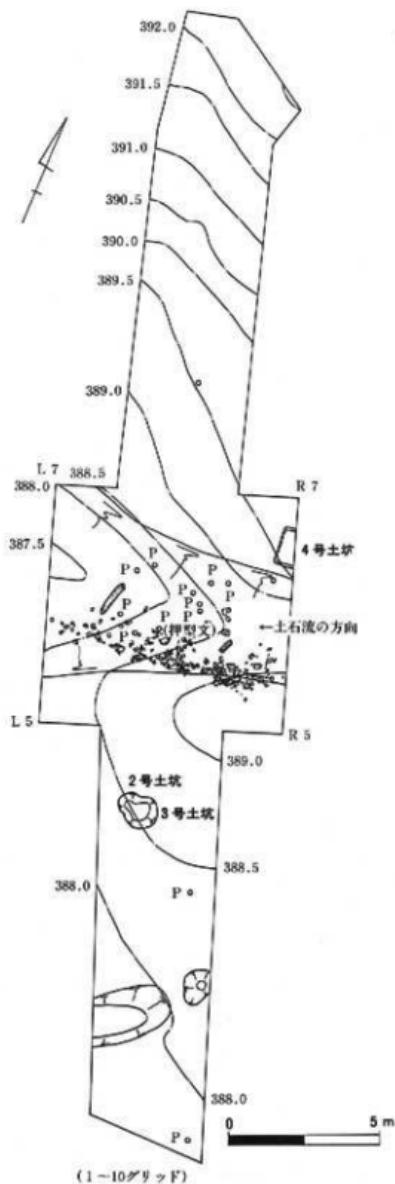
2 出土遺物

番号	出 土 地 点	層位	時 期、備 考
1 (7)	R 1グリット P210×250×30	表 土	縄文時代中期前半 竹管文系土器
2	R 3グリット P270×265×20	"	縄文時代中期
3 (1)	5グリット P324×37×43	"	縄文時代早期 押型文 山形
4	5グリット P355×257×388.623	黒色土	縄文時代
5	" P395×125×388.873	"	"
6	" P347×245×388.648	"	"
7 (9)	" P315×102×388.641	"	" 雨だれ石
8 (3)	" P377×157×388.671	"	縄文時代中期 竹管文系上器 口縁部
9	6グリット P316×101×389.531	表 上	縄文時代中期 口縁部
10	" P122×64×389.323	"	縄文時代 石器用材
11 (2)	6グリット P155×75×388.741	黒色土	縄文時代中期
12	" P126×118×388.791	"	縄文時代前期 機維土器(無文)
13	R 6グリット P19×304×389.153	黒色土	縄文時代中期 無文
14	" P0×304×389.093	"	縄文時代前期 機維土器(無文)
15	" P98×29×389.301	"	縄文時代中期
16 (4)	" P98×207×389.381	"	縄文時代中期 沈線文土器
17	" P38×81×389.371	"	縄文時代 無文
18	" P23×256×389.111	"	"
19	" P115×263×389.076	"	縄文時代中期 無文
20 (5)	R 7グリット P326×375×375.25	表 土	縄文時代中期 加賀利E式土器片
21 (8)	" P29×321×21	"	縄文時代中期 勝坂 五領ガ台
22 (6)	19グリット P148×14×392.615	上坑内	縄文時代中期

第7表 カイル遺跡出土遺物



第67図 遺物



(全体図 1~19グリッド)

第68図 カイル遺跡全体図

第4節　まとめ

本遺跡は、昭和57年8月の「レイク相模ゴルフ倶楽部ゴルフ場予定地内予備調査」の段階で新たに発見された遺跡であった。『レイク相模ゴルフ倶楽部ゴルフ場予定地内予備調査』概報（1982.9）によると“黒色土層中より縄文時代中期初頭から中葉にかけての土器片を中心に、前期・早期の土器片が出土した。”とある。また、配石遺構の発見される可能性や住居跡の発見される可能性が説かれていた。

しかし、結論から言うと、上流域からの土石流による搅乱された遺構の確認と上流域から混入したと思われる土器片（黒色土中より縄文時代早期・前期・中期初頭から中葉の土器片）が数点発見され、また、山の中腹部の鞍部にあたる場所から一基土坑が発見されたにとどまり、全体として本発掘区域に極めて遺跡のあった可能性が少なく、むしろ、本発掘区域より上流域に遺跡のあった可能性が大きいことを示唆していると思われる。

調査団として、このような発掘調査における結論をだして全体の調査を終了した。

図 版

図版 1

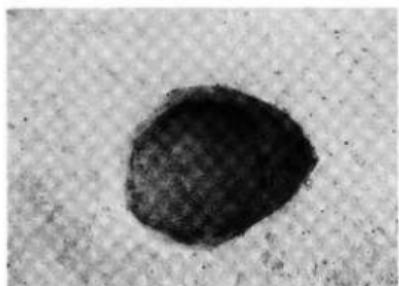


穴沢遺跡 調査前全景

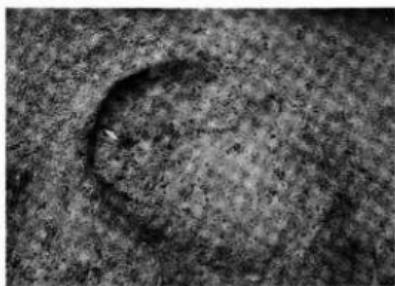


調査状況

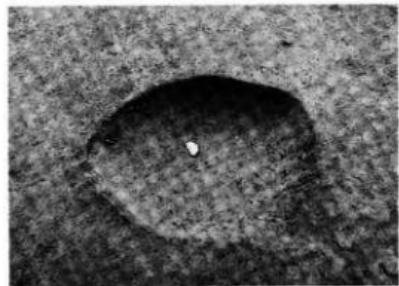
圖版 2



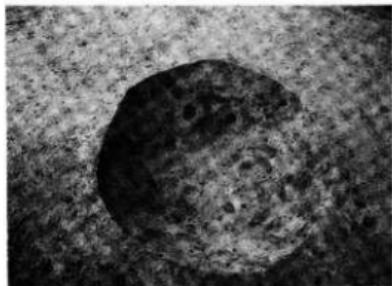
1号土坑



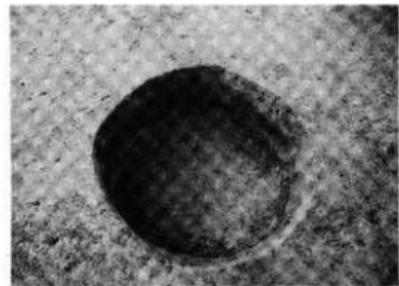
4号土坑



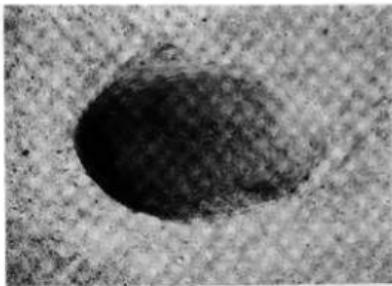
2号土坑



5号土坑



3号土坑

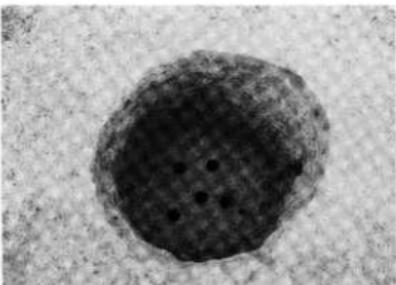


7号土坑

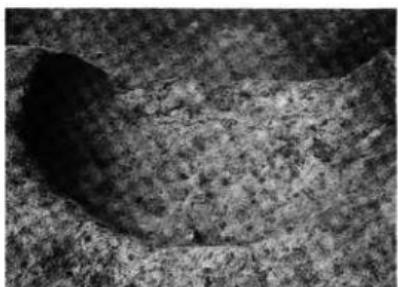
圖版 3



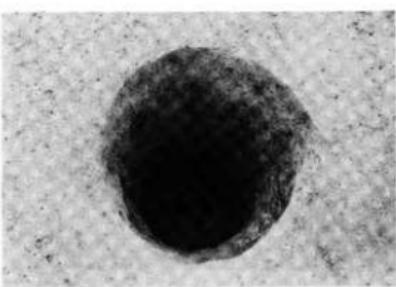
8号土坑



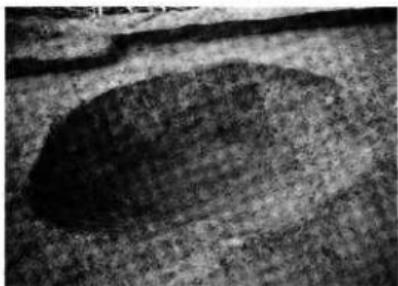
12号土坑



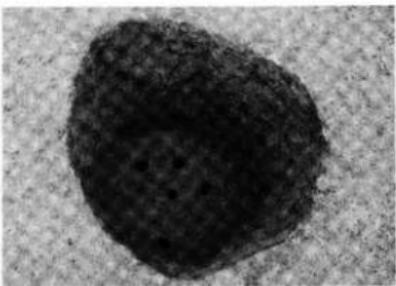
10号土坑



13号土坑

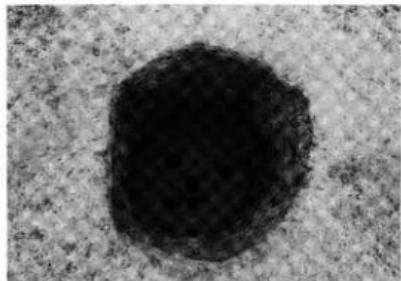


11号土坑

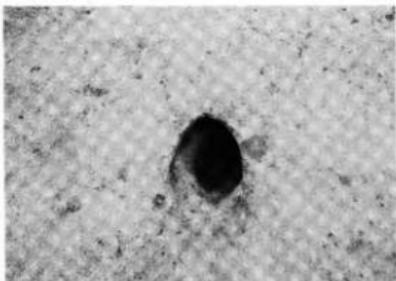


14号土坑

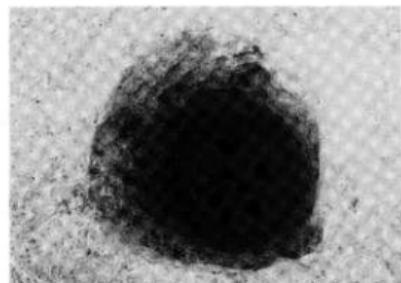
图版 4



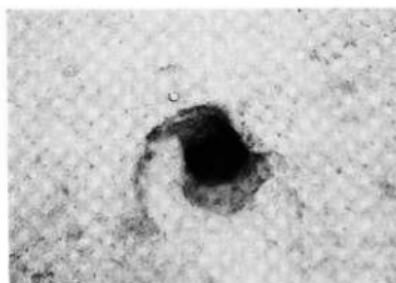
15号土坑



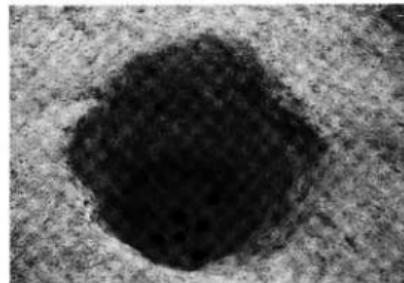
1号小穴



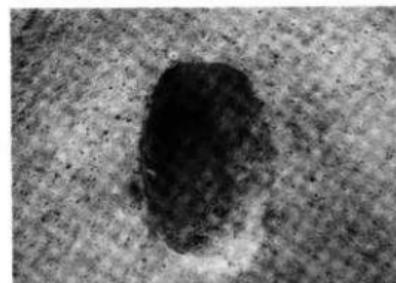
16号土坑



2号小穴

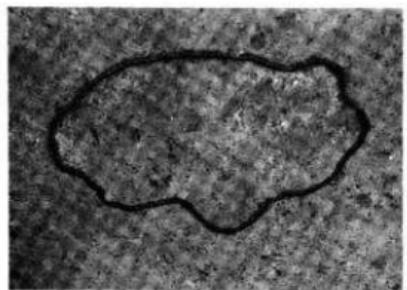


17号土坑

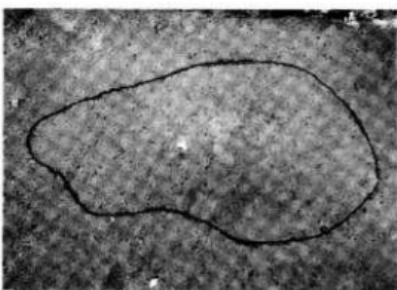


18号土坑

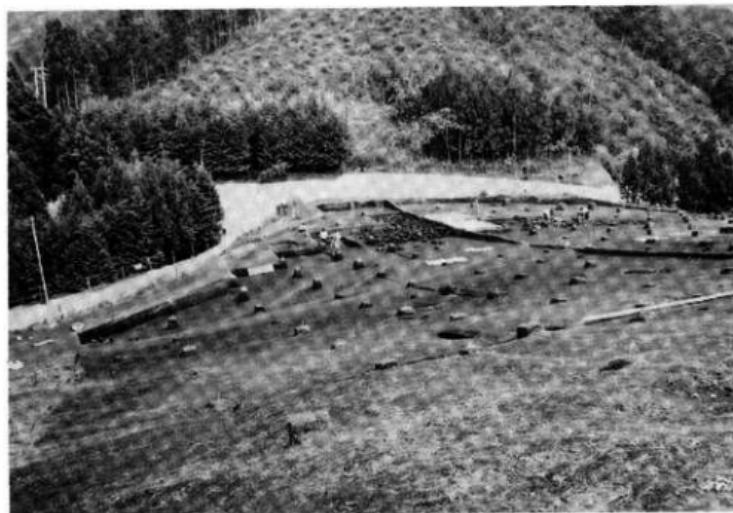
图版 5



1号烧土址

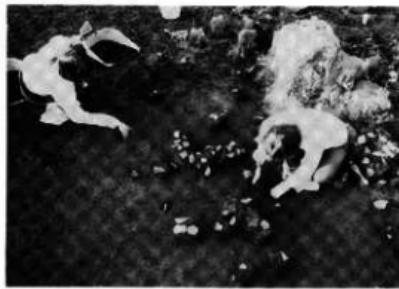
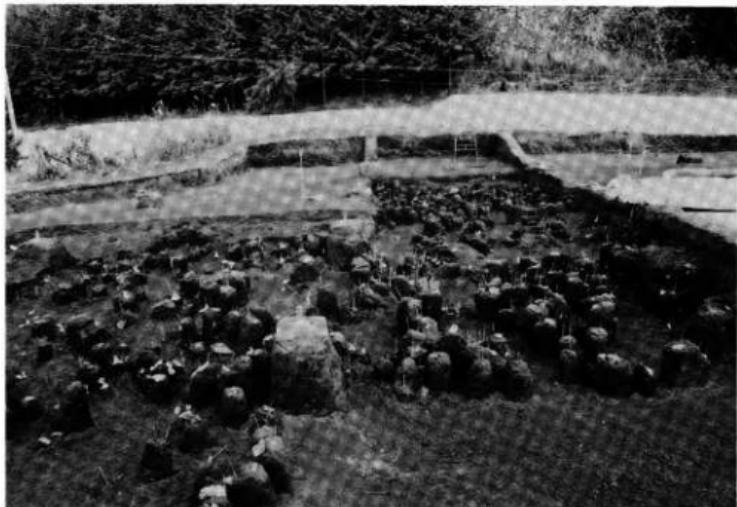


4号烧土址



穴沢遺跡 調査風景

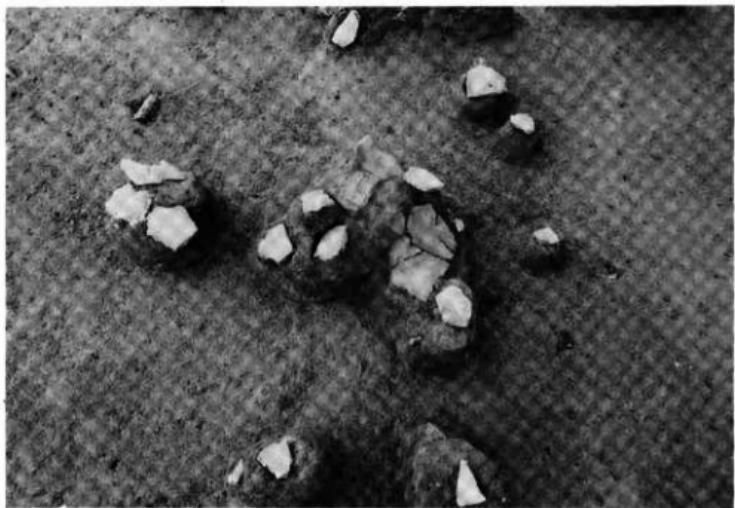
図版 7



穴沢遺跡 調査風景

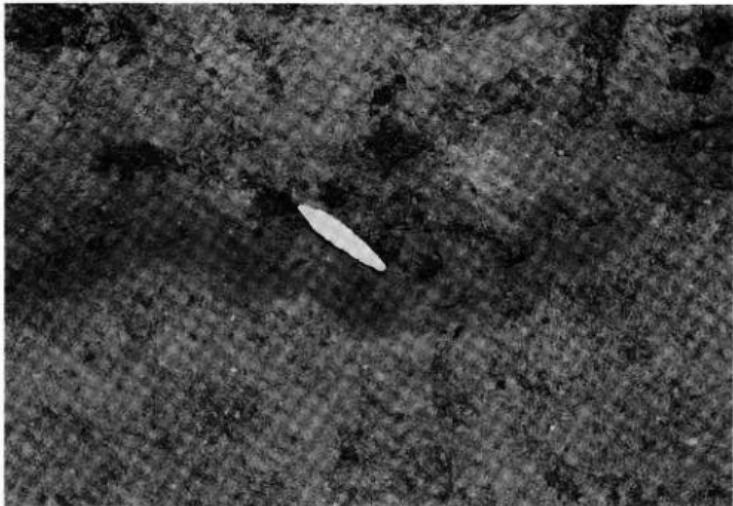


土器出土状况



土器出土状况

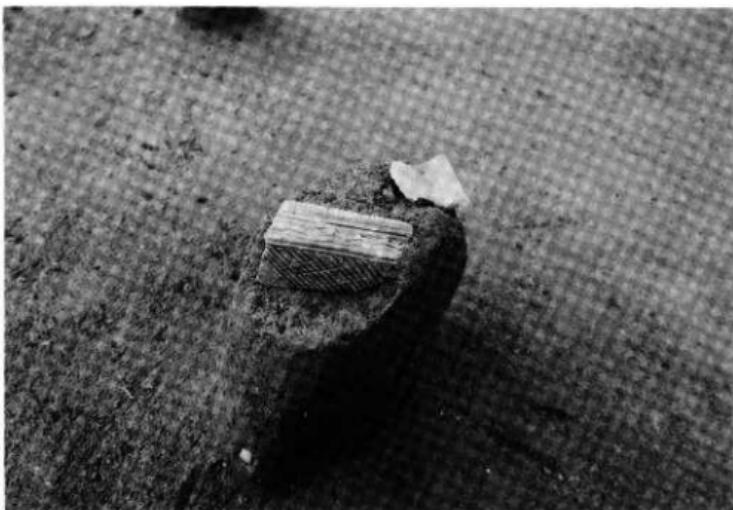
圖版 9



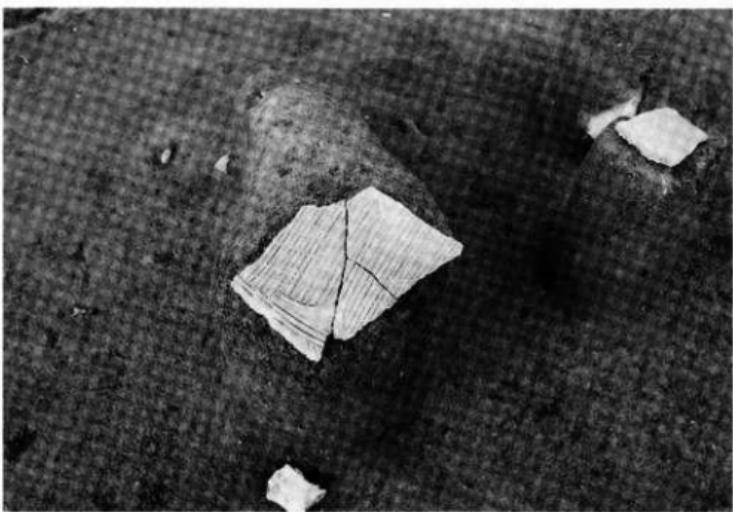
尖頭器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況

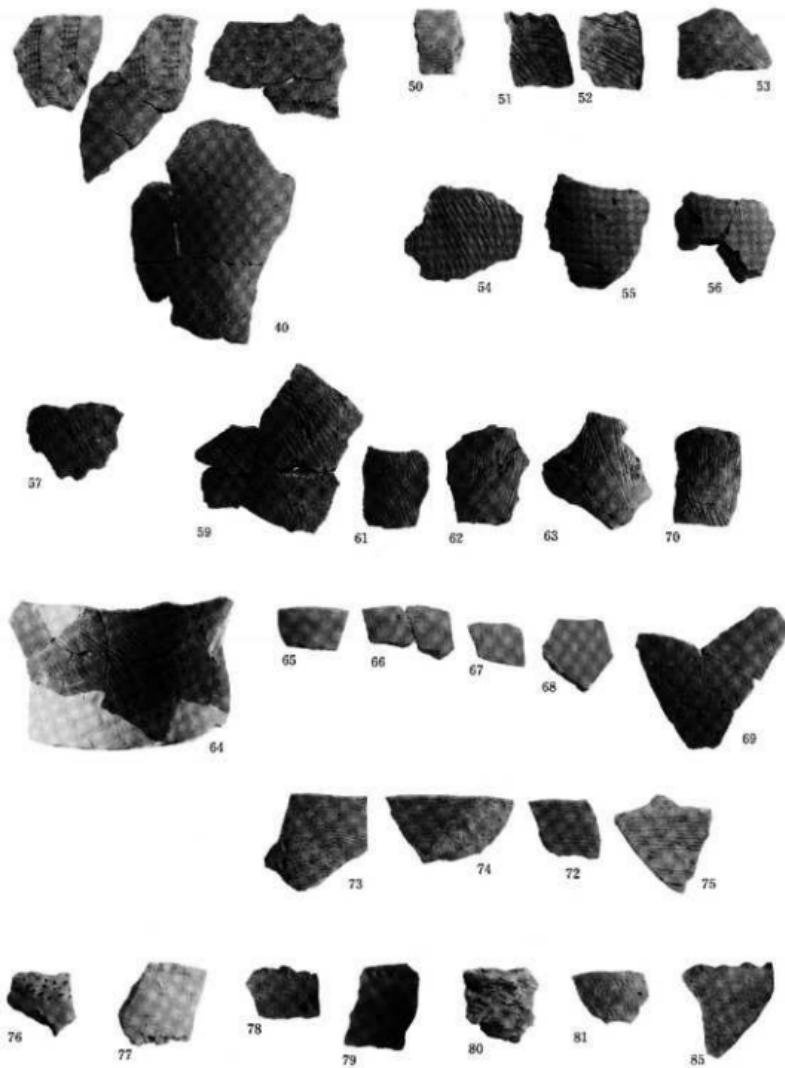


土器出土狀況

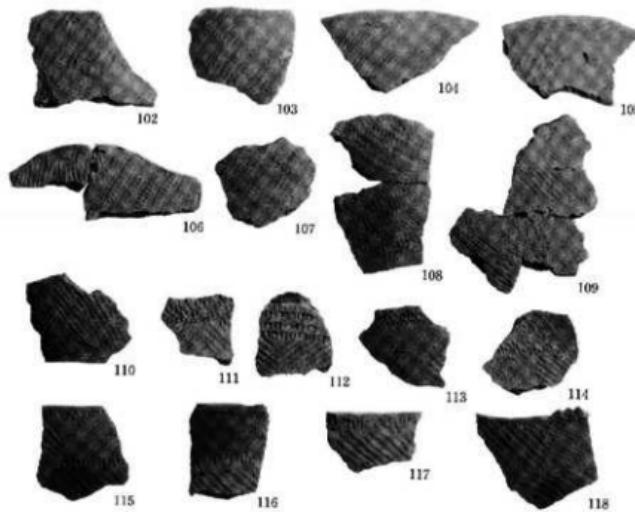
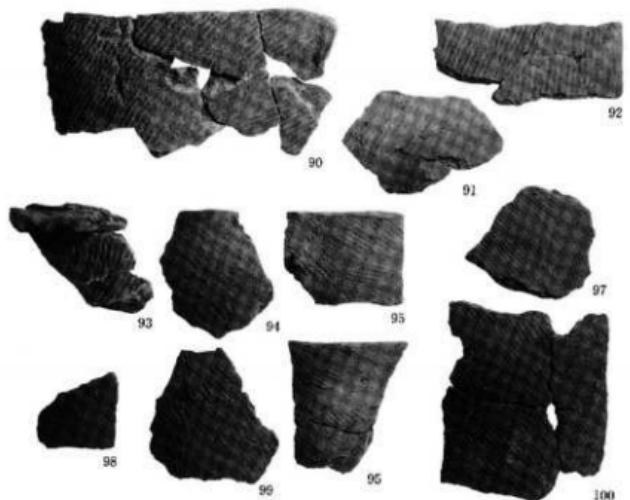
図版11

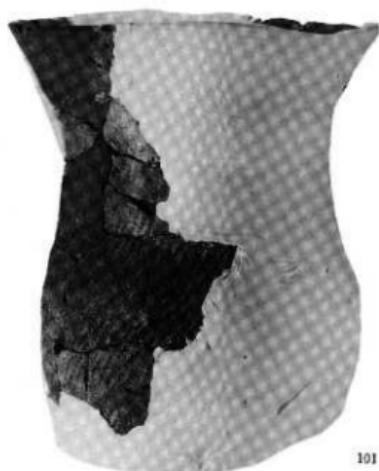


図版12

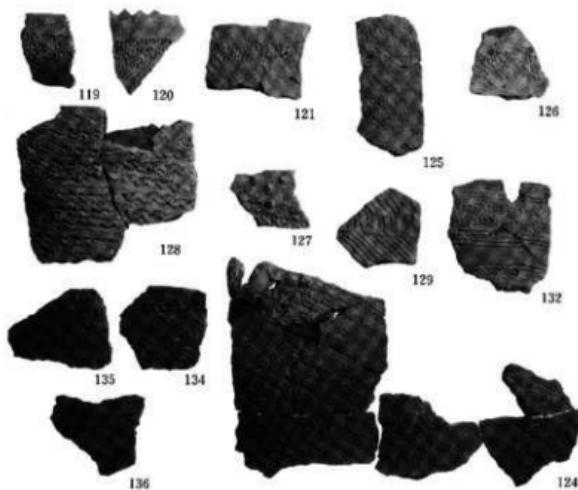


図版13

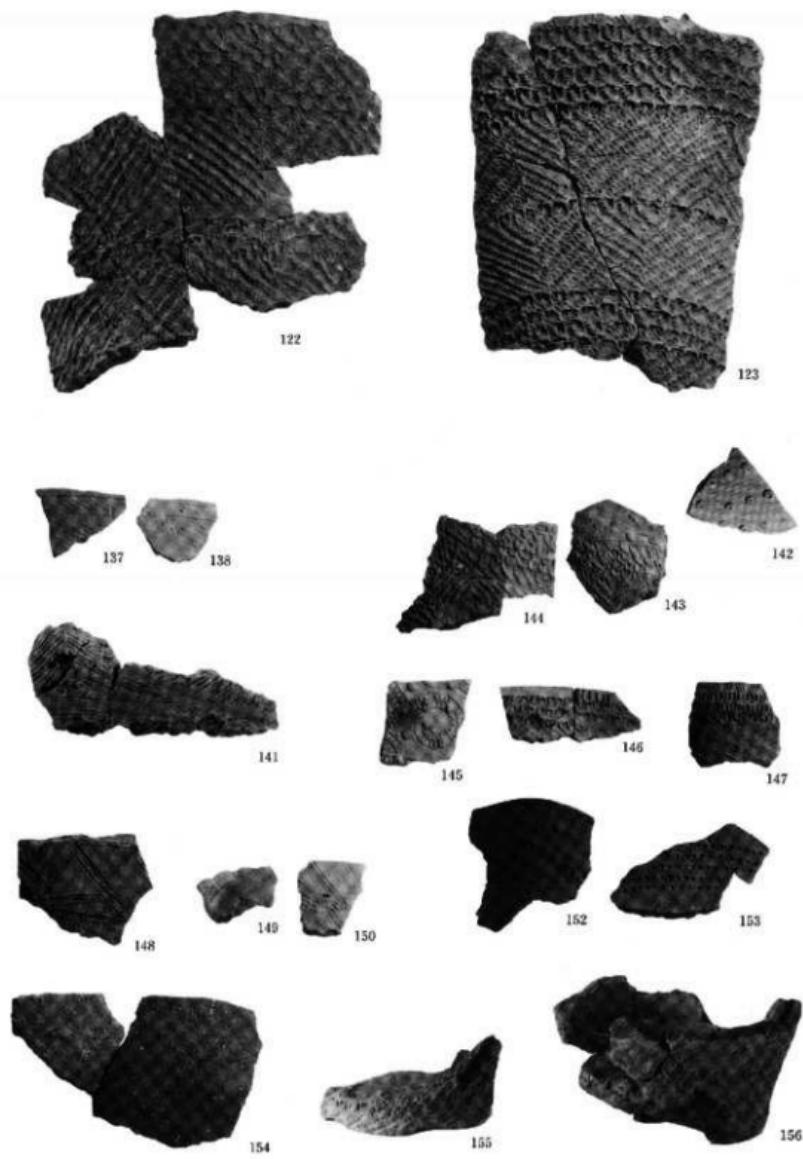


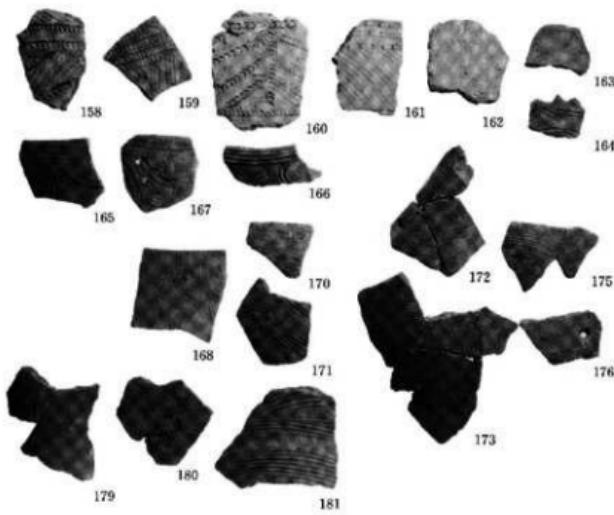


101

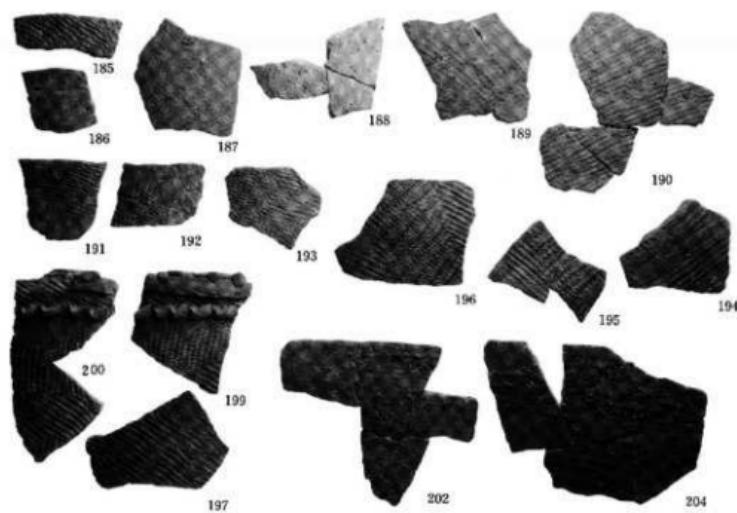


図版15

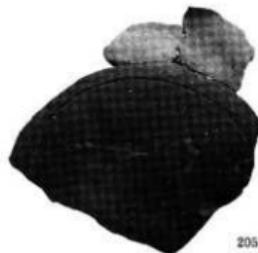
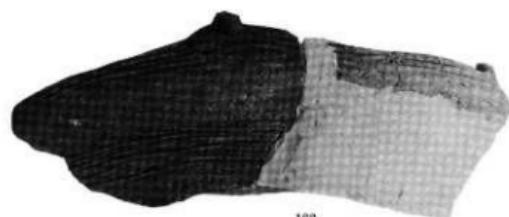




図版17



198



211



215

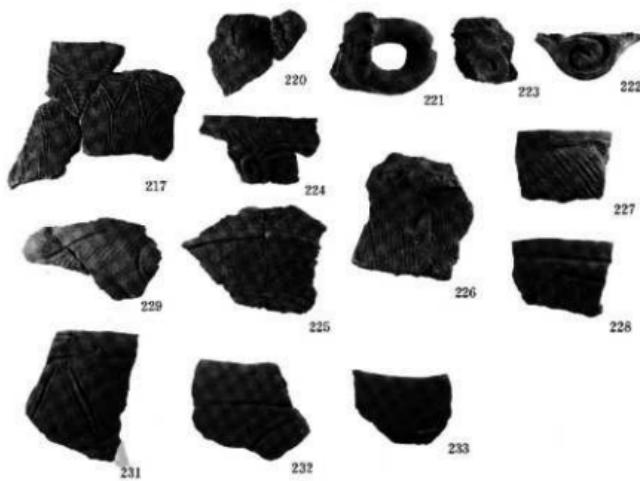
図版19

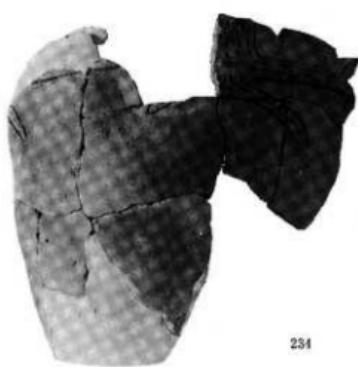


218



219

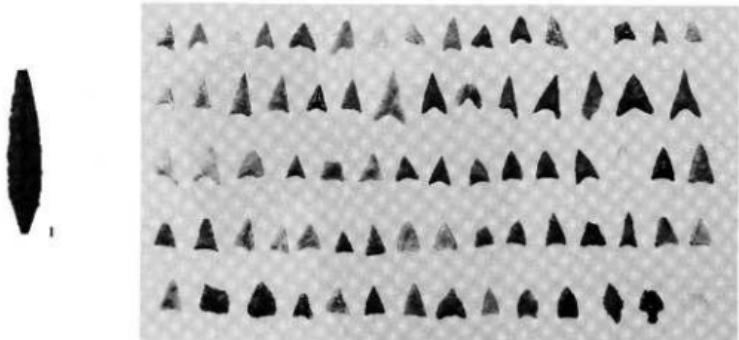




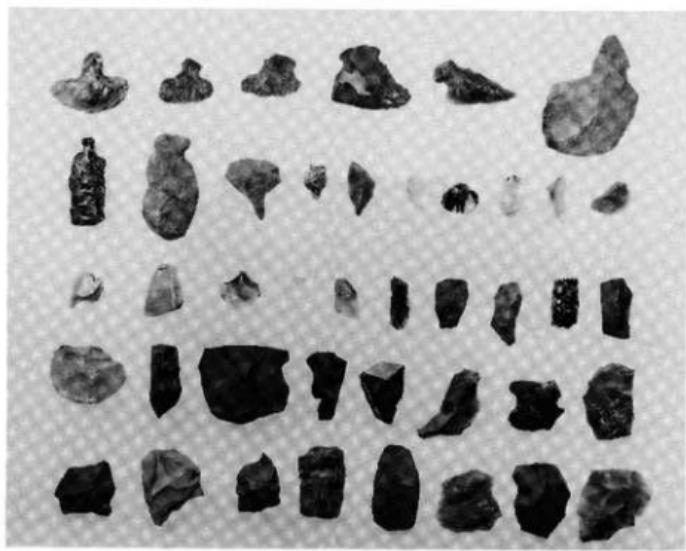
234



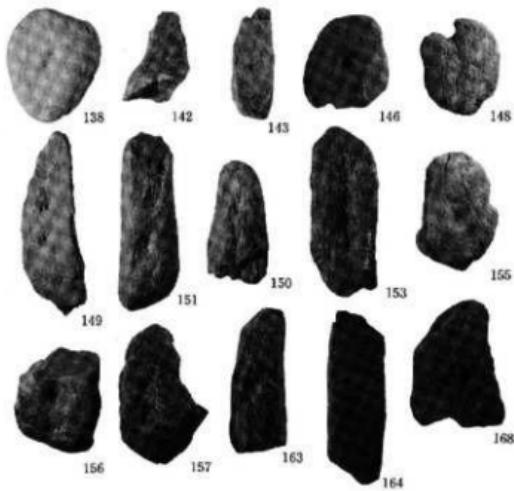
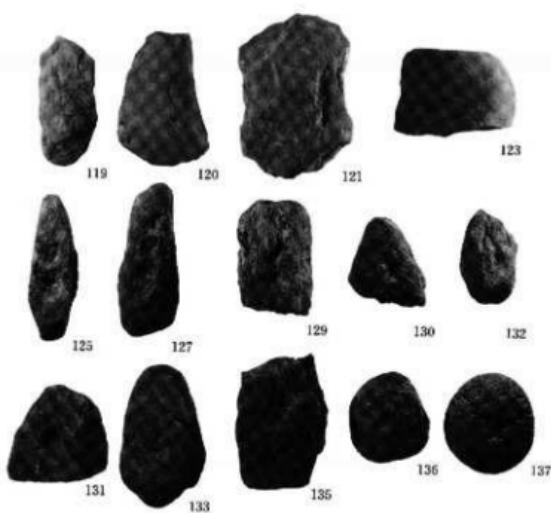
235



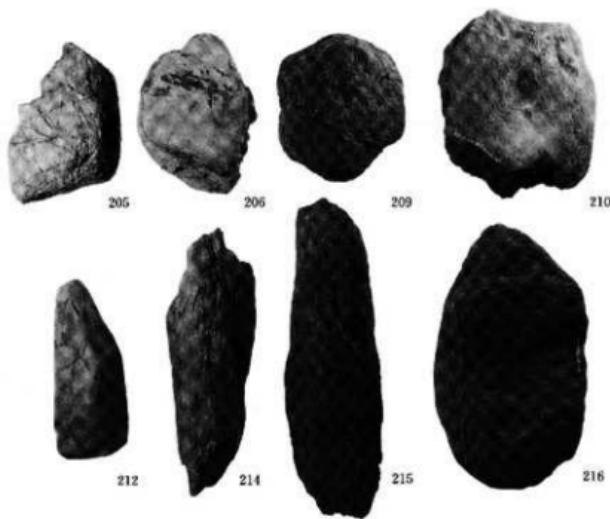
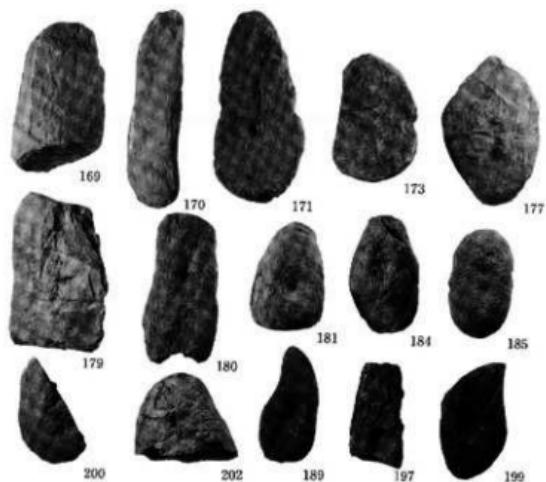
2-77

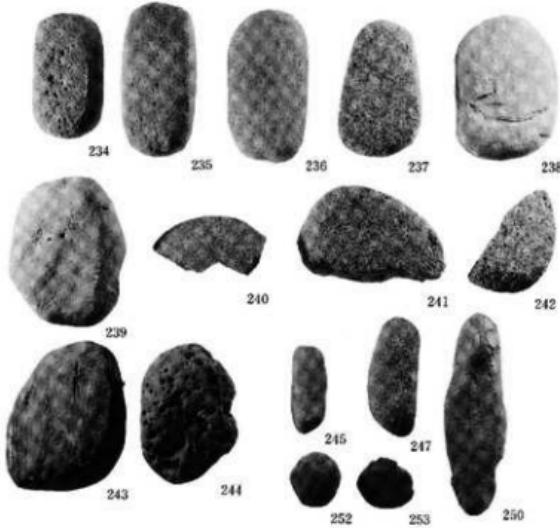
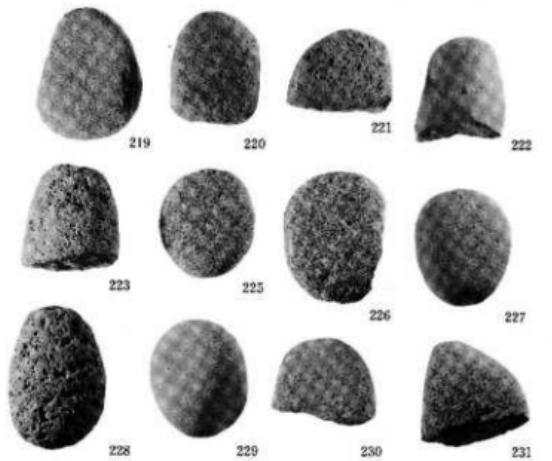


78-118

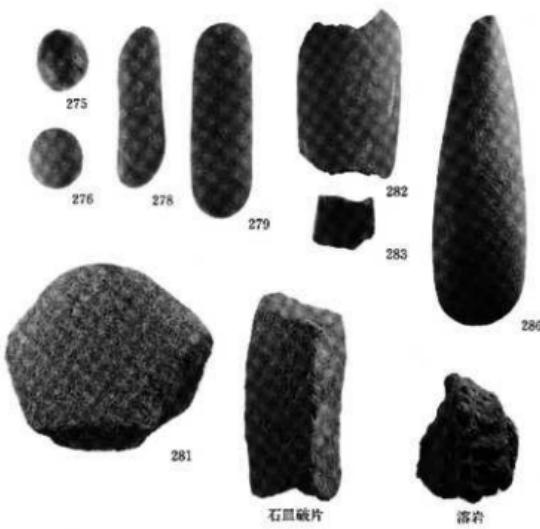
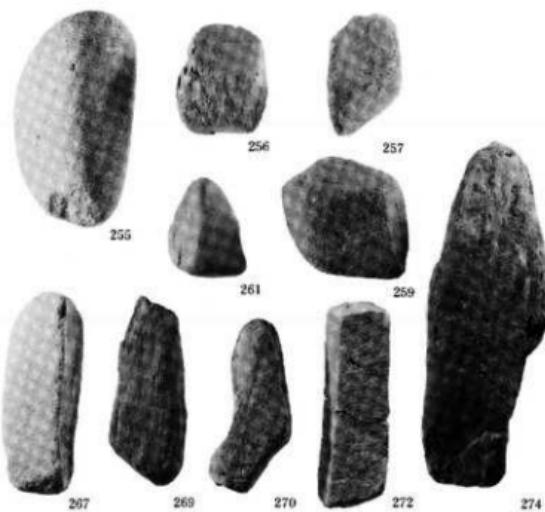


図版23





圖版25





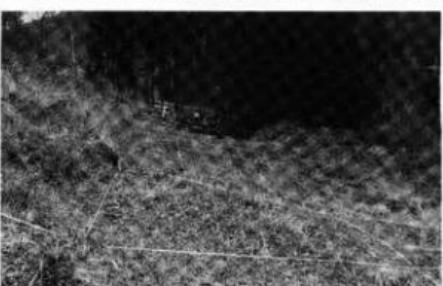
カイル遺跡周辺風景



カイル遺跡発掘以前

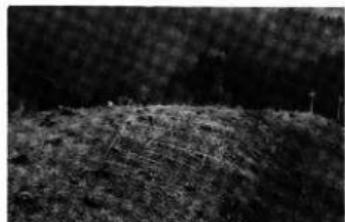


発掘準備



1~10グリット設定

図版27



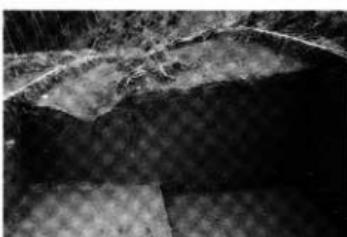
カイル遺跡II～I9グリット設定



テスト・ピット遠景



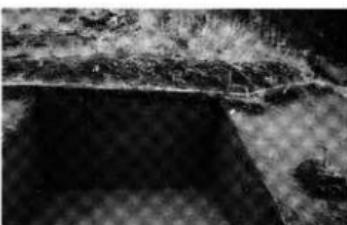
カイル遺跡II～I9グリット完掘



テスト・ピット



I号土坑



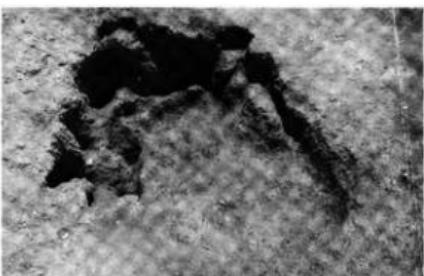
テスト・ピット



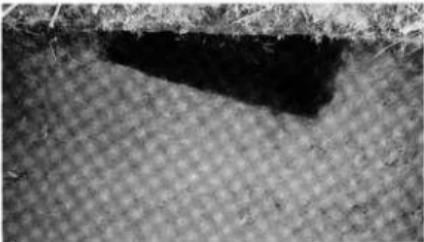
カイル遺跡
2号、3号土坑



2号、3号土坑集石



2号、3号土坑完掘



4号土坑

図版29



カイル遺跡 5～7グリッド周辺土石流跡



土石流跡（散石）



5～7グリッド周辺十字断面調査遠景



近景



1～10グリッド発掘全景



1～10グリッド発掘全景
(5～7グリッド周辺を含む)



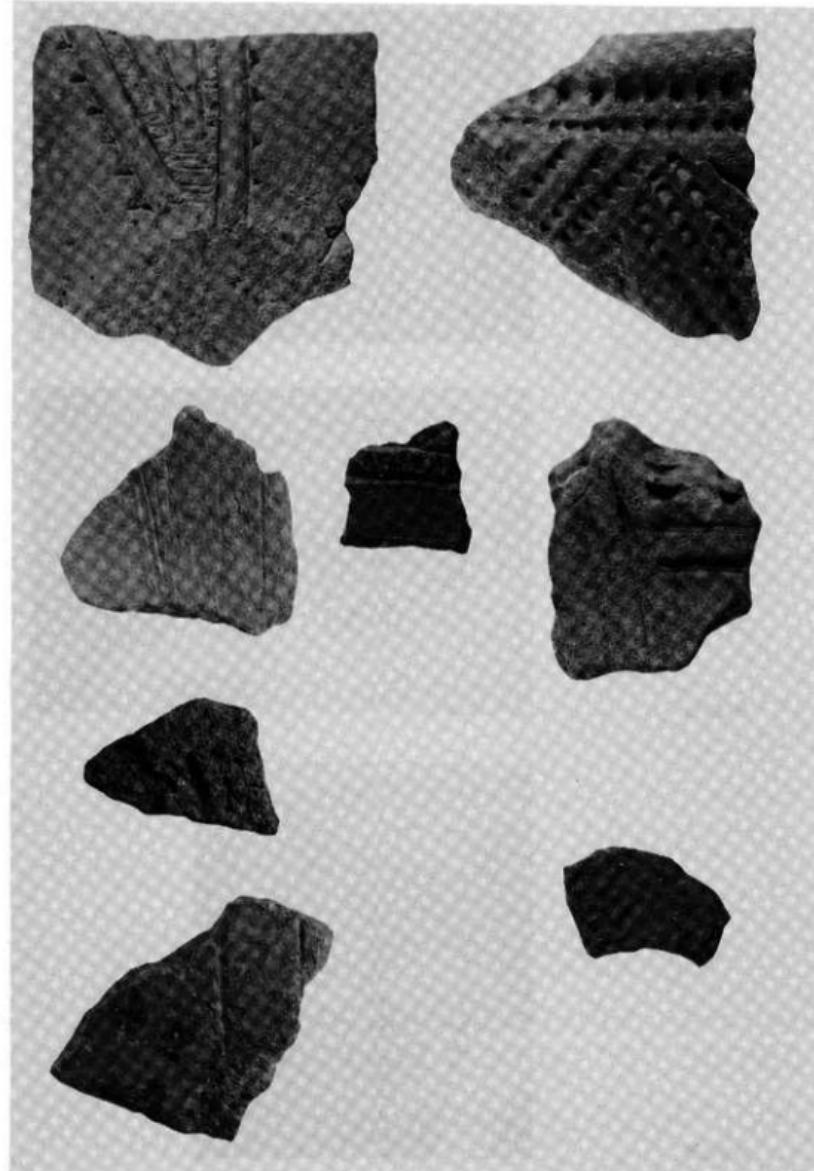
カイル遺跡
発掘風景



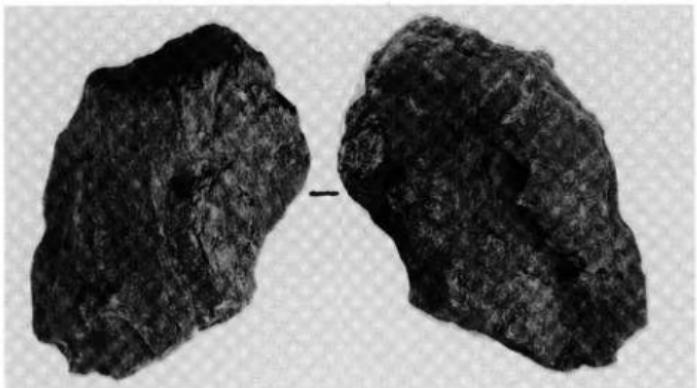
発掘風景



発掘風景



カイル遺跡 出土土器



カイル遺跡 出土石器

穴沢遺跡・カイル遺跡

1992年3月31日

編集 桐原字穴沢・カイル地内埋蔵文化財発掘調査団

発行 上野原町教育委員会

山梨県北都留郡上野原町上野原3504-1

TEL 0554-62-3111

印刷 第一法規出版株式会社
